

作物所方  
洲濱

左方洲濱  
ノ歌

右方洲濱  
ノ歌

御遊アリ  
上達部ニ  
祿ヲ賜フ

安子ヲ御  
追慕アラ  
セララル

前裁合ノ  
濫觴ナリ  
ト説

かきて、しろかねをませのかたにして、よろつの蟲どもをすませ、大井に逍遙したるかたをかきて、うふねにかゝり火ともしたるかたをかきて、むしのかたはらに、うたはかきたり、造物所のかたには、おもしろきすはまをゑりて、しほみちたるかたをつくりて、いろくくのつくり花をうへ、松竹などをゑりつけて、いとおもしろし、かゝれども、歌はをみなへしにそつけたる、  
左方、  
君かためはなうへそむとつけねともちよまつむしのねにそなきぬる  
右方、  
心してことしはにほへをみなへしさかぬ花そと人はみるども  
御遊ありて、上達部おほく参り給て、御祿さま／＼なり、これにつけても、宮のおはしまし、おりに、いみしくことのはへありて、おかしかりしはやご、うへよりはしめたてまつりて、上達部たちこひ聞え、めこのひ給ふ、

〔扶桑略記〕

村上天皇下

八月十五日、殿上有前裁合、○歴代編年集成同ジ

〔濫觴抄〕

下 前裁合

村上廿一年、丙寅、康保八月十五日、於殿上有之、

〔古今著聞集〕

下 前裁合

康保三年間八月十五日、作物所、畫所相分つて、殿の西

藤原師中殿  
等候後涼  
侍臣東堂  
殿ノ候ス  
子ノ東堂  
酒饌ヲ賜  
女房ニ男  
フ

菊合

御製

の小庭に前裁をうへられけり、右大將藤原朝臣、治部卿源朝臣、朝成朝臣中渡殿に候、侍臣等後涼殿の東のすのこにこうす、つきに兩所酒饌をもて男、女房にたまふ、夜に入て侍臣唱歌し管絃を奏す、又高光、永頼に花の枝にゆひつくるどころの和歌をとりてよませられけり、公卿侍臣に仰てうたを奉らせけり、右大將延光朝臣を題を奉りける、十五夜翫後庭秋花と侍ける、深更に及ひて、侍臣和歌を奉る、保光朝臣をしてよませられけり、さらに又管絃の興ありて、そのうち公卿に祿を給はせけり、

〔夫木和歌抄〕

菊十四 秋部五

よみ人しらす

いくたひか霜はおきけん菊の花やそしまなからうつろひにけり  
このうたは、康保三年十月十七日、内裏の前裁合に、○新千載和歌集、康保三年内裏歌合の時、一番め給て、花を奉らあさかれひのおましかたにやそしまをつくりて、にはに菊をうゑさせ給たりけり、さくの花にかゝれける歌云々

〔新勅撰和歌集〕

秋五 歌下

康保三年、内裏菊合に

天曆御製

かけみえてみきはにたてる白菊はおられぬ波の花かどそみる



内裏歌合  
形天橋立ノ

康保三年八月十五日

七一八

〔新千載和歌集〕

慶賀歌

康保三年内裏歌合に、十月廿二日、大盤所の方の

つほに、二番のかた、草の花いとすくなく成にければ、天橋立のかたを  
つくりて、松につけたりける歌、  
よみ人しらす

うつろはぬ松につけてや橋立の久しき世をはかそへわたらん

○日本紀略及ビ古今著聞集、竝ニ閏八月十五日ニ作ル、今内裏歌合、西

宮記、榮華物語、扶桑略記、濫觴抄ニ據リテ掲書ス、十六日、東宮御宴及ビ

十月十七日ノ前裁合、同月二十二日ノ歌合、便宜合鼓ス、右近命婦ノ事

蹟、便宜左ニ附載ス、

〔倭歌作者部類〕

庶女上

右近 季綱少將

〔尊卑分脈〕

藤原氏  
眞作孫氏

千乘

季繩 右近少將、從五上、

女子 穩子大后女房、右近、歌人、後撰集作者、

女子 歌人、同集作者、

或本、此二人女子季繩女也々々、

右近命婦  
ノ傳  
世系

皇后穩子  
ニ仕フ

歌人

康子内親  
王御屏風  
ノ歌ヲ詠  
進ス

右近ト藏  
人頭某

〔大和物語〕

上

季繩の少將のむすめ右近、故きさいのみやにさふらひけ  
る比、略下

〔二中歴〕

十二  
倭歌歴

歌人

拾遺抄歌人

季綱子

〔拾遺和歌集〕

十六  
雜春

北宮屏風に、

右近

とし月の行方も知らぬ山かつは瀧のをとにや春をしるらん

〔大和物語〕

上

おなし女、内のさうしにすみける時、忍ひてかよひ給人有  
けり、頭なりければ、殿上につねに有けり、雨のふる夜、さうしのしとみのつ  
らに立より給へりけるもしらて、雨のもりければ、むしろをひきかへすと  
て、

思ふ人雨と降くる物ならばわかもるところはかへさゝらまし

どなんうちいひければ、あはれときゝ給て、ふとはい入給にけり、

おなし女、おどこの忘れしとよろつの事をかけてちかひけれど、忘れにけ  
る後に、いひやりける、  
忘らるゝ身をは思はず誓てし人の命のおしくも有かな○拾遺

及ビ古今和  
歌六帖同ジ、

康保三年八月十五日

七一九



右近ト藤原師氏

男ニ贈ル歌

歌什

康保三年八月十五日

かへしはえきかす、

同し右近藤原師氏も、その、宰相のきみなんすみ給ふなどいひの、しりけれど、そらことなりければ、かのきみによりてたてまつりける、

よし思へあまのひろはぬうつせ貝空しき名をは立つへしや君  
となん有ける、

〔後撰和歌集〕

七歌下

あひしりて侍りけるおとこの、久しうとはす侍り  
ければ、なか月はかりにつかはしける、右近

〔後撰和歌集〕

十戀歌二

大かたの秋の空たに侘しきに物思ひそふる君(ナシ)にもあるかな  
人の心かはりにければ、

右近

思はんとたのめし人はありときくいひしここのはいつちいにけん○大和物語初句ヲ忘れしとニ作ル

〔勅撰作者部類〕

女部

右近右近少將藤原季綱女

後撰集

秋下、一、戀二、一、戀三、一、戀六、三

拾遺集

〔百人一首抄〕

下 百人一首作者部類

百人一首作者

官女十七人 右近

○右近、藤原敦忠ニ歌ヲ贈リ、敦忠ヨリ、雉ヲ贈ラル、コト、天慶六年三月七日ノ條ニ、藤原師輔ト歌ヲ贈答スルコト、天徳四年五月四日ノ條ニ、源順ヨリ歌ヲ贈ラル、コト、應和二年正月二十二日ノ條ニ、藤原朝忠ヨリ歌ヲ贈ラル、コト、本年十二月二日ノ條ニ見ユ、

十六日、戊申信濃勅旨駒牽、

〔日本紀略〕村上天皇 八月十六日、戊申天皇出御南殿、依信濃御馬牽進也、

十八日、庚戌兵部少録小槻陳群ヲ算得業生試ノ博士ト爲ス、

〔類聚符宣抄〕

九算得業生試

請以成業兵部少録小槻宿禰陳群、爲試得業生小槻惟信之博士狀

右謹檢案内、惟信年限自滿、課試之期已到、糸平謹須依例參預試場、而脚病殊重、進退不調、儀式之處、恐致失禮、望請被下宣旨、以件陳群、爲試得業生惟信之博士、

康保三年八月二日

主計頭從五位上兼算博士小槻宿禰糸平

小槻惟信  
ヲ試ム  
小槻糸平  
脚病ニ依  
ルリテ辭  
ス

紫宸殿出御

康保三年八月十六日 十八日

七二一

七二〇



康保三年八月十九日

七二二

左大臣宣、宜以兵部少錄小槻陳群、爲試算得業生小槻惟信之博士者、

同月十八日

大外記物部安親奉

十九日、辛天變ニ依リ、大極殿ニ御修法ヲ行ハシメ、又權律師良源ヲシテ、仁壽殿ニ不動法ヲ修セシム、

〔日本紀略〕村上天皇 八月十九日、辛亥、於大極殿御修法、依天變也、又於仁壽殿、

令律師良源修不動法、番僧廿口、

城外ニ向フ檢非違使廳官人ノ隨身看督長ノ員數ヲ定ム、

〔政事要略〕六十一 檢非違使 雜事 一

先例アリ  
ト稱シテ  
身ヲ隨  
官人一人  
ニ看督長  
ツ一人ヲ充

被別當宣稱、看督長是左右之間、雖有員數、差雜役、猶以不足、而官人等蒙臨時

宣旨、每向城外、事稱有先例、官人一人隨身看督長二人、因之守直之者彌多、從

役之輩猶少、自今以後、(向説カ)城外官人一人率一人、但事不獲止、可過此數、先申事由、而後進止之者、

康保三年八月十九日

右衛門少尉宮道忠城奉

○檢非違使廳官人、宣旨ノ外ノ看督長ヲ隨身シテ、城外ニ出ヅルヲ禁ズルコト、天慶五年閏三月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十日、壬守平親王、弘徽殿ニ於テ、初メテ、御註孝經ヲ讀ミ給フ、

〔日本紀略〕村上天皇 八月廿日、壬子、第五皇子守平親王、於弘徽殿、讀御註孝經、

篤茂爲序者、

〔日本紀略〕圓融院 康保三年八月廿日、壬子、於弘徽殿、初受蒙求於東宮學生(主カ)

大江齊光、召文人賦詩、

〔大鏡裏書〕圓融院御事

康保三年八月廿日、壬子、於弘徽殿、初讀御註孝經、

二十五日、日霖雨ニ依リテ、丹生、貴布禰兩社ニ、奉幣使ヲ發遣ス、

〔日本紀略〕村上天皇 八月廿五日、丁巳、奉幣丹、貴二社、依霖雨也、

○十六社ニ止雨奉幣使發遣ノコト、閏八月二十一日ノ條ニ見ユ、

選子内親王、御著袴ノ儀ヲ行ハセラル、

〔日本紀略〕村上天皇 八月廿五日、丁巳、略中今日選子内親王著袴、

〔大鏡〕上○侯爵德川義親氏所藏 齋院 選子 康保三年八月廿五日、丁丑、

著袴、

二十六日、戊内膳司正四位下庭火神ニ從三位ヲ授ク、

康保三年八月二十日 二十五日 二十六日

七二三

序者藤原  
篤茂  
蒙求ヲ大  
江齊光ニ  
受ケ給フ  
トノ説



康保三年八月二十七日

七二四

〔日本紀略〕村上天皇 八月廿六日、戊午、授内膳司正四位下庭火神從三位、

光孝天皇國忌、仍リテ、甲斐勅旨駒牽ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔西宮記〕八月駒牽次 康保三年八月廿六日御記云、令濟時仰外記、今日同牽進

眞衣野、柏前牧御馬由、而依廢務不可分取、須令候左右馬寮、廿七日、云々、之仁

壽殿、云々了、春宮亮延光朝臣令取引別馬一疋、訖召左右馬寮令分取、訖還清

涼殿云々、

〔權記〕寬弘六年八月十六日、戊戌、中略參内、中略仰云、依康保三年八月廿六

日國忌廢務、不分取、令候馬寮例、今日給馬寮、明日可令取、

二十七日、已未權律師良源ヲ、天台座主ニ補ス、

〔日本紀略〕村上天皇 八月廿七日、己未、以權律師良源、爲天台座主、勅使左少將

懷忠、

〔行成卿記〕伏見宮御記 長德四年十月卅日、乙卯、中略内大臣於弓場殿、

令權左中辨說孝、奏天台座主宣命、中略檢先例、康保三年秋御記云、奏草、仰云、

〔小右記〕寬仁四年七月三十日、己卯、中略入道殿命云、天台座主院源、非山阿

廢務ニ依  
リ馬寮ニ  
候セシム  
仁壽殿出  
御

宣命ノ草  
ヲ奏ス

山阿闍梨  
ニ改補ス

喜慶入滅  
ノ替  
衆人ノ推  
舉ニ據ル

賀靜ヲ超  
越ス  
宣命使藤  
原懷忠

闍梨、今有山阿闍梨闕、可改補歟、有前例由云々、而不能尋得、中略資平申云、康

保三年、良源被任座主之時、改補山阿闍梨之由、具見御記、

〔慈惠大僧正傳〕康保同三年、補延曆寺座主、先是前座主慈念僧正、元元年正月十

鎮朝僧都日ノ元、十月、五日、入滅之時、被擬此職、而和尚遜讓至于再、至于三、喜慶

僧都入滅日ノ條、七月、十日、之替、遂被抽用、于時年五十五也、和尚謙光彌明、不肯重

任、然而綸命稠疊、衆中推席、山上耆德相謂曰、時不可留、衆不可逆、和尚縱執謙

退、奈本山職務何、和尚遂當其仁、慈以從事、久爲台嶺之棟梁、送廿箇年也、

〔扶桑略記〕村上天皇下 八月廿八日、律師良源任天台座主、五十超法性寺

座主律師賀靜所補也、皇代編年集成 歷

〔西宮記〕臨時一 康保三年八月廿七日、以權律師良源、任座主、宣命使小納

〔天台座主記〕百二十一華頂要略 第十八權律師良源略、中 治山十九年

康保三年、丙寅八月廿七日、座主宣命、生年五十五夏、三十九九

勅使少納言藤原懷忠、同廿九日到來、

〔座主宣命〕第十八慈慧大僧正、諱良、號御廣大、 治山十九年

康保三年八月二十七日

七二五



康保三年八月二十七日

使者少將也、今度任少納言殿如何、  
使少納言懷忠廿九日到來、

宣命云、

天皇我詔旨と、山中乃法師等爾白佐倍与止与宣勅命乎白、權律師法橋上人  
位良源波、○年藤漸高之上爾慈覺大師山門兼舍乃門徒乃上乃爾之天、  
兼習利、故是以座主爾治賜上、任賜有作ル事乎白上○佐倍与止宣勅命遠白、

康保三年八月廿七日補年五十五、

先是、慈念、鎮朝座主入滅時、粗擬此職、再三辭遁、今亦謙退、綸命重疊、衆人推  
薦、遂以從事、

〔眞言三部經傳授抄〕

大日經傳授抄 第三卷

慈惠大師、爲往生極樂、阿彌陀護摩千日

往生ノ爲  
メ阿彌陀  
護摩ヲ修  
シタルニ  
座主トナ  
レリトナ  
説

被修、千日滿修、五初、勅便山座主被成、勅難有故、即座主任畢、慈惠心思、我千日  
間所願、西方往生爲也、更非願世間悉地、何成座主乎、成世間悉地事、大非也、非  
本意思ケリ、後或人申、或問世間成就、出世願成就ト云ケレハ、サラハ我往生  
モ不可有疑也云云、不審被散、彼文者大日經疏文ニ見テ候ト人申也、

具平親王、承香殿ニ於テ、御著袴ノ儀ヲ行ハセラル、是日、參議源重光ノ  
昇殿ヲ聽ス、

御年三歲

〔日本紀略〕

天村上

八月廿七日、己未、○中是日也、具平親王著袴、年三、

〔西宮記〕

臨時九 內親王著裳

康保三年八月廿七日、於承香殿、親王著袴、自內給裝束

公卿參候、親王家給酒肴、有御遊、息所賜祿獻和歌、重光昇殿、

〔禁祕抄〕

上 聽直衣事

康保、具平著袴日、藤原在御民部卿奉仰云、參議重光昇殿、民部卿傳宣、重光下殿舞蹈、

二十八日、庚申神泉苑ニ放飼セル馬牛ヲ、宮中闌遺ニ准ジテ、馬寮ニ送ラシム、

〔政事要略〕

七十亡 關遺亡失物事十

典侍從三位藤原朝臣灌子宣、奉勅、神泉苑築垣破損、放飼馬牛、准宮中闌遺、取  
送左右馬寮、立爲恆例者、實仰藏人藤原時清、

康保三年八月廿八日

左看督長津守忠連 奉

○宮中闌畜ノ處科ヲ定ムルコト、寬平三年十二月十日ノ條ニ、宮中闌  
畜ノ處科ヲ、法ノ如ク行ハシムルコト、本年閏八月二十七日ノ條ニ見

ユ、

神泉苑ノ  
築垣破損

御遊アリ  
御息所庄  
子祿ヲ賜  
フ  
重光殿ヲ  
下リテ舞  
踏ス



康保三年閏八月二日 十二日

閏八月壬戌朔

七二八

二日、癸亥大替ニ依リ、民部省ヲシテ、仕丁、仕女ヲ點貢セシム、

〔類聚符宣抄〕仕丁仕女

太政官符民部省

應點貢仕丁、仕女等事

仕丁仟陸佰玖拾陸人

仕女玖拾壹人

仕丁千六百六  
仕女九十九  
一人

右得彼省去年四月廿六日解儀、謹檢案内、來年當大替、仍可點貢之狀、依例申送如件者、從二位行權大納言兼右近衛大將春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣師尹宣、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、  
(右カ)參議左大辨從四位上藤原朝臣(左カ)

康保三年閏八月二日

外從五位下行左大史物部宿禰(左カ)

十二日、癸酉神祇官ヲシテ、穢疑ヲトハシム、

〔西宮記〕

七臨時甲 定穢事

康保三ノ閏八一十一日御記云、左近少將懷忠令申云、在私宅下女已死、未知其由之間、從者男來著直廬、其後聞其告、且

藤原懷忠  
宅下女  
死アリ

死亡ノ刻  
限不明  
公卿ヲシ  
テ穢ト爲  
スベキヤ  
否シヤト  
メシム定  
メシム年  
ノ例  
穢ト爲サ  
ズ

令奏事由、即仰體尋問件女死程令申、懷忠令申云、件女初夜之間、相語寢後、不知宿惱、今朝驚推驚之間、始知死去之由、從者男參來、在人未驚以前、然則不辨知其死程、即仰諸卿、令定申可爲穢否之由、入夜民部卿令奏、天慶八年十月廿八日外記日記云、有宮内省置死兒之穢、有入内裏之疑、而不知其置死人之程、依(忠平)太政大臣申、令神祇官ト之、ト云、不可爲穢者、件例可相准、令仰云、令神祇官ト申云々、十二日、民部卿令神祇官ト申穢否由、(推之、不)見穢由、仰依勘申、不可有穢之、十六日、(丑)東寺ノ請ニ依リ、山城國所進ノ佛燈油供米ハ、寺家返抄ヲ以テ、(在在)稅帳ヲ勘會セシメ、攝津國ノ正稅ヲ以テ、灌頂會并ニ戒年分料物ニ充テシム、

〔延喜天曆御記抄〕柳原家記錄 灌頂事

康保三ノ閏八一十六日、令文範(朝臣下同シ)ニ給民部卿藤原(在在)ニ、文之中、東寺申四個

條事文、(元カ)去九年十二月給中納言藤原(朝臣)ニ、而又依病不參、仍改給、二個條

先定已了、但以寺家返抄勘會稅帳、山城國所進佛燈油供米條、停從諸司、每

年以攝津國正稅宛給灌頂會并戒年分料物條等、竝依請、

十九日、(辰)京都洪水アリ、看督長ヲ遣シテ、之ヲ巡檢セシム、

康保三年閏八月十六日 十九日

七二九

四箇條ヲ  
申ス  
二箇條ハ  
先ニ定メ  
了ル



家屋流失

西獄ノ垣  
破損ス

五六條及  
西河海  
ノ如シ

〔日本紀略〕村上天皇 閏八月十九日、庚辰、遣使巡檢洪水、或流失屋烟、或漂沒資

儲、又西獄垣爲水破衝、五六條及西河渺々如海、

〔河海抄〕常十一 康保三年閏八月十九日御記云、遣左右看督使巡檢洪水、其

五六條及西河渺々如海、

〔扶桑略記〕村上天皇下 八月十八日、有洪水、

〔一代要記〕村上天皇 三年丙寅八月十八日、大洪水、

○藤原師尹ヲシテ、水害ヲ巡檢セシムルコト、九月三日ノ條ニ見ユ、

二十一日、壬午大神宮以下十六社ニ奉幣シテ、止雨ヲ祈ル、

〔日本紀略〕村上天皇 閏八月廿一日、壬午、爲止雨、奉幣十六社、

〔諸神記〕上 一定二十二社由來事

村上天皇御宇、康保三年、雨霖經月、九天覆雲、依之閏八月廿一日、被奉獻官幣於十六社、

霖雨月餘  
ニ涉ル

伊勢 石清水 賀茂上、下 松尾 平野 稻荷 春日 大原野 大神

石上 大和 廣瀬 龍田 住吉 丹生 貴布禰

已上十六社記○錄九十二社註式、日吉山王新記、柳原家

〔賀茂注進雜記〕

行幸官幣御幸付祈願靈驗等

同年八月廿一日、九天雲お

ほひ、霖雨月をわたりて晴る事なかりしかは、諸社に使を立らるゝに、賀茂、貴布禰兩社に奉られける、此時十六社の御祈といふ事始る、貴布禰は當社の攝社たりといへとも、水徳の御神なれば、雨の御祈は必ず官幣使を奉らる、

○丹生、貴布禰兩社ニ止雨奉幣使發遣ノコト、八月二十五日ノ條ニ見

ユ、

二十五日、丙戌神位記請印ヲ延引ス、

〔西宮記〕

臨時一家大永鈔本

裏書

康保三年閏八月廿五日、民部卿藤原朝臣、令

奏内案云々、又令時清申、今日欲捺神位記、中務輔并少將等不候、檢先例、有中將供代官、請被仰延光、即以此由、令仰延光、而不奏其位記也、

二十七日、戊子宮中闌畜ノ處科ヲ、法ノ如ク行ハシム、

〔政事要略〕

七十一糺彈雜事十

典侍從三位藤原朝臣灌子宣、奉勅、檢非違使今日奏云、宮中闌遺畜、時而不絶、放牧之輩、已以數多、使等任式文、決罰牧人、免行其畜、至無牧人、取送馬寮、々須

十六社奉  
幣ノ濫觴

内案ヲ奏  
ス  
中務輔等  
不參  
位記ヲ奏  
セズ

宮中闌畜  
絶エズ放  
牧ノ輩多  
シ



馬寮ノ處  
分設忘ナ

畜主幼童  
處科ヲ通

七十以上  
十六以下  
ノ牧人ハ  
贖ヲ徵ス  
關及三度  
奏聞セシ  
ム

康保三年閏八月二十七日

守式文、慥以勤行、而畜主屬託之日、不辨度數之重疊、妄以免行、徒有取之名、曾無懲肅之實、又七十以上十六以下牧人、須免行其當、依法徵贖、而只從教諭、立以勸免、故實時反、不能改行、于時追取鬪畜之日、畜主存似申出幼稚之兒、稱放牧之豎、不加見決、忽以原免、鬪畜難絕、莫不由斯、非蒙勅裁、何行將來者、所申可然、自今以後、七十以上十六以下牧人、依法徵贖、至無牧人、令馬寮差申其主、但以鬪畜免行者、慥銘其驗、若及三度、奏聞其由、實仰藏人左近將監藤原信輔左衛門權佐大江朝臣澄景、奉  
○宮中鬪畜ノ處科ヲ定ムルコト、寬平三年十二月十日ノ條ニ見ユ、

七三二

九月壬辰朔

三日、御燈、

〔日本紀略〕

村上天皇

九月三日、甲午、御燈、

權大納言藤原師尹ヲシテ、兩京ノ水害ヲ巡檢セシム、

〔日本紀略〕

村上天皇

九月三日、甲午、○中今日權大納言師尹卿、依勅定巡檢兩京水害所々、騎馬著衣冠、

○看督長ヲシテ、洪水ヲ巡檢セシムルコト、閏八月十九日ノ條ニ見ユ、

九日、京畿洪水ニ依リテ、賑給ヲ行ヒ、調倭ヲ免ズ、

〔日本紀略〕

村上天皇

九月九日、庚子、賑給京畿內人、依洪水也、尤甚者勿輸當年調倭、

十日、權少僧都玄慶寂ス、

〔日本紀略〕

村上天皇

九月十日、辛丑、少僧都玄慶卒、

〔僧綱補任〕

○二興福寺本

權律師玄慶、應和元年十二月廿八日任、花嚴宗、東大寺、已講勞七十、右京人、宮道氏、康保元年七月廿日傳正、同二年十二月廿

八日轉任權小僧都、同三年九月十日入滅、七十五

康保三年九月三日 九日 十日

七三三

騎馬衣冠  
ヲ著ス

被害甚シ  
キ者ノ調  
倭ヲ免ズ



康保三年九月十一日 十三日 十八日

七三四

宮道氏

宮道氏、左京人、  
良緒僧都弟子、

十一日、壬寅伊勢例幣、

〔日本紀略〕村上天皇 九月十一日、壬寅伊勢例幣、天皇幸南殿、

十三日、甲辰天變ニ依リ、權律師良源ヲシテ、仁壽殿ニ熾盛光法ヲ修セシム、

〔延喜天曆御記抄〕百三十一所收 御修法事付七高山 御修法、

伴僧二十  
口  
七箇日  
祿ヲ賜フ  
法師等ニ  
度者ヲ賜フ

紫宸殿出  
御

康保三年九月十三日、甲辰、始自今夜、於仁壽殿、令延曆寺座主權律師良源率  
廿口伴僧、修熾盛光法、限七箇日、依天變也、廿日、此日修法了、阿闍梨延曆寺座  
主良源率番僧參上加持了、令右カ左近中將博雅朝臣下御、兼賜掛、兼仰法師等賜度者  
各一人之由、暫留良源、語所申請事、前日令延光々々奏文也、

十八日、己酉除目、

〔日本紀略〕村上天皇 九月十六日、丁未、除目

十七、八日、同、

〔公卿補任〕五

大納言從二位藤師尹、四十九九月十七日轉正、右大將、春宮大夫、按察、

敘位

權中納言從三位橘好古、七十九九月十七日敘從三位、任權中納言、  
參議正四位下藤賴忠、三十四右大辨、勘長官、備前守、九月十七日轉左大辨、

兼官如元、

從四位上源延光、四十七康保三十九十七參議、中將如元

〔公卿補任〕五 康保四年

參議正四位下藤齊敏、四十康保三十九十七春宮權亮、元散

從四位上藤文範、五十九康保三十九十七右大辨、內藏頭如元

〔公卿補任〕六 安和二年 非參議從三位藤濟時、廿六同三十九十七右中辨、少將如元

〔公卿補任〕六 天祿元年 參議從四位上源保光、七十同三十九十七左中辨、

〔公卿補任〕六 天延二年 參議從四位下藤朝光、四十同三十九十七侍從、

〔公卿補任〕六 永祚元年 參議正四位下藤懷忠、五十同三十九十七伊与權介、

執筆

〔敘位除目執筆抄〕康保三十九十六京官、十八日執筆左大臣同、

二十五日、丙辰是ヨリ先、東大寺、檢全破使帳相違アル由ヲ申ス、仍リテ、大  
和守注申ノ損色帳ニ勘合シテ、之ヲ決セシム、

〔東大寺要錄〕四 諸會章第五 村上御日記三帙

康保三年九月二十五日

七三五



寺家注進  
損色帳多シト

老病ト稱  
シテ奉ラ  
ズテ依リ  
重ネテノ  
仰ニ依リ  
テ奉ル

紫宸殿出  
御帳中ノ倚  
子ニ著御  
東宮參上

太子ノ臺  
盤一獻ノ後  
氷魚ヲ賜フ

東宮以下  
陪ス  
先ニ洪水  
依リテ  
停止ス  
座ニ著御  
左大臣以  
下參候ス

康保三年九月二十七日

七三六

康保三年廿五日、丙辰、右大臣令保光朝臣奏前日給文一枚、檢東大寺全破使帳并寺家注進損色帳事文、副兩卷帳申云、件帳所相違已多、仍問奉使右少辨偕行々々申云、彼時奉所司所錄也、而今與寺家所申帳已違、重遣使實檢、自決真偽歟、然則依塔事可罷下辨官、加仰此事、令實檢歟、令仰云、前司光智之時、當國守安親、依宣旨注申損色、而光智愁申有所漏之由、仍重遣偕行實檢、今法藏又申偕行所注相違之狀、常疑官司所申者、以誰爲證乎、須勘合安親所進損色帳定仰、實朝左大臣令保光朝臣奏前日令勘文一枚、○本書十所收ノ新記ヲ以テ校ス、

二十七日、戊午、直物、

〔日本紀略〕村上天皇 九月廿七日、戊午、直物、

前大宰大貳小野好古ヲシテ、五節ヲ獻ゼシム、

〔西宮記〕五節節定 同三年九月廿七日御記云、遣藏人永頼於前大貳小野朝臣宅、問稱老病不申可奉五節之由、永頼來申云、仰旨相重、須奉五節、

十月 辛酉 朔

一日、辛酉、旬、

〔西宮記〕還宮後儀 康保三年十月一日御記云々、未三刻出紫宸殿、仰裝束使、令撤御倚子及皇太子座毯代、暫著帳中倚子、云々了、高朝右大臣參、無官奏、以兼大將先昇

次皇太子參上自東階、次王卿參上、次出居左少將濟時、率保光朝臣、入自日花門參上云々、

〔西宮記〕十月 王卿侍從昇、○中康保三、先太子參上、主膳候北庇如例、

康保三年御記云、須應出居召內豎聲、昇出太子大盤云々、  
康保三年十月一日御記云、一獻後、賜氷魚云々、

○權記長徳元年十月一日ノ條及ビ左經記萬壽三年四月一日ノ條、異事ナキヲ以テ略ス、

七日、卯殿上侍臣等ノ樂舞ヲ御覽アラセラル、

〔日本紀略〕天村天皇 十月七日、丁卯、召殿上侍臣、小舍人等舞、皇太子以下陪矣、

〔西宮記〕臨時樂 康保三年十月七日、此日覽殿上侍臣奏樂、去秋欲奏此音樂、而依洪水之灾停止、近日無雜、○雜、教訓抄所收、事、仍果其志也、午刻著東又御記殊ニ作ル、

庇座、兩第三間、立次召公卿、即左大臣、高朝右大臣、民部卿藤原朝臣、左衛門督藤原

康保三年十月一日 七日

七三七



納言以上  
參議ノ座  
樂人ヲ召  
酒肴ヲ公  
給以下ニ  
左大臣以  
下樂ヲ奏  
東宮參上  
東宮ニ酒  
肴ヲ賜フ  
微雨ニ依  
リ仁壽殿  
於テ舞フ  
炬ヲ供ズ  
蘇原實資  
納蘇利ヲ  
舞フ  
實資ニ柏  
ヲ賜フ  
公卿以下  
ヲ祿ヲ賜

康保三年十月七日

朝臣、治部卿源朝臣、修理大夫源朝臣、朝成朝臣、賴忠朝臣、重光朝臣、延光朝臣、  
等參候、納言以上、候、東宮、子、參議、長橋上、並、菅、圓、座、為、座、次召樂人、左近中將博雅朝臣已下、相率著河  
竹架邊座、先是大鼓一面、鉦鼓一口、立同竹架東、並、加、火、燭、其、前、立、棹、載、力、車、內藏寮給酒肴  
公卿已下、次兵部卿親王、上野太守親王等參候、次奏參入音聲、勇、勝、左、大、臣、琵琶、  
治部卿源朝臣、朝成朝臣、二人、琴、篳、博、雅、朝、臣、右、馬、允、藤、原、清、通、大、夫、源、朝、臣、吉、水、  
清、真、大、筆、朝、臣、行、正、小、筆、朝、臣、左、衛、門、督、藤、原、朝、臣、馬、允、藤、原、清、通、大、夫、源、朝、臣、吉、水、  
鼓、助、信、朝、臣、指、鼓、寬、信、朝、臣、拍、子、右、衛、門、督、藤、原、朝、臣、馬、允、藤、原、清、通、大、夫、源、朝、臣、吉、水、  
鼓、共、政、鉦、鼓、左、馬、允、永、原、守、節、播、磨、藤、原、朝、臣、方、唱、歌、大、此、間、皇、太、子、參、上、東、第、四、  
為、座、間、敷、苗、次奏萬歲樂、佐、理、右、兵、衛、門、次、奏、延、喜、樂、光、舞、人、兼、蘇、利、朝、臣、忠、君、朝、臣、朝、于、時、  
御厨子所賜太子酒肴、次奏賀殿、兼、通、朝、臣、自、奏、延、喜、樂、之、間、時、々、小、雨、仍、於、仁、  
壽殿階隱下、舞件急、次奏輪臺、著、麴、塵、欲、脫、袍、帶、劍、左、衛、門、督、藤、原、朝、臣、濟、時、為、光、  
二十餘人、為、垣、代、朱紫交舞、視聽催感、舞訖、主殿供炬、次奏散手破陣樂、重、光、朝、  
次歸德隻、時、中、次太平樂、初、定、舞、人、四、人、而、濟、時、二、人、忽、有、所、次、酣、醉、樂、兼、朝、次、胡、  
飲酒、兼通、次羅陵王、著、舞、衣、并、天、冠、光、次納蘇利、著、天、冠、舞、衣、兼、蘇、利、朝、臣、忠、君、朝、臣、朝、于、時、  
子、脫阿古女衣賜之、左大臣不堪欣感、起舞、前例給御衣者拜舞、今夜不拜、依少  
小之内、舞裝難致拜禮、歟、右大臣獻御酒、又令奏唱歌、賜祿公卿已下有差、大、臣、  
下、重、表、榜、各、一、重、樹、一、王、真、納、言、白、樹、亦、樹、同、自、餘、給、一、重、參、議、皇、太、子、先、是、退、下、仍、不、給、之、

七三八

入御

實賴孫實  
資ニ代リ  
テ舞踏ス

酣醉樂ヲ  
奏ス

退出音聲  
ハ越殿樂  
ノ急

大筆築

次奏退出音聲、越、殿、殿即入内、公卿侍臣退出、丑、二、刻、御、刻、ヲ、以、テ、校、記、所、

〔小右記〕

長保三年十月七日、甲辰、今日院御賀試樂日也、略、中、右、大、臣、進、倚、大、

〔古今著聞集〕

管絃歌舞 康保三年十月七日、舞御覽有けるに、小野宮右大  
臣童にておはしけるか、天冠をして納蘇利をつかうまつり給けり、舞をは  
りて御倚子のもとにめして、御袖を給はせければ、左大臣清、實、憤かしこまり

〔教訓抄〕

無舞曲高麗曲物語 酣醉樂  
康保三年十月七日、殿上侍臣ノ奏樂ノアリケルニ、二人奏此曲、兼、家、朝、昔、ハ、

〔教訓抄〕

無舞曲樂物語 越天樂  
如此上臈モ、舞曲ヲアソハシケル也、抄、同、源、

〔續教訓抄〕

名物等物語  
康保三年侍臣奏樂、退出音聲奏此急、拍、子、六、拍、ハ、コ、ノ、下、拍、子、リ、平、調、曲、ト、ス、

〔續教訓抄〕

此大筆築近來ハタエタリ、康保三年十月七日、殿上侍臣舞御覽ノ日ハ、大筆

康保三年十月七日

七三九



侍臣舞ノ  
濫觴ノ

康保三年十月十日 二十日

築吉水清真、少筆築良峯行正ト云リ、○教訓抄、體源抄、異事ナキヲ以テ略ス、

〔濫觴抄〕下 侍臣舞 同十月七日、丁卯、有之、公卿奏樂、

十日、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學豎義次第〕三年、丙 講師湛照昭イ年五十八、藤廿六、左京 法相宗宗、去年十二月廿八日宣、同日請 東大寺人寬

〔三會定一記〕一 同三年、去 宣講師湛昭五十八、東大寺、法相宗、 豎義東院、次、基贊、

射場始、

〔西宮記〕五月十日 射場始 康保三年十月十日御記云、申刻御弓場殿、左中將藤

原伊尹、重光朝臣、延光朝臣等參候、仰令射、又分前後令射、限以五度云々、

二十日、大宰大貳藤原佐忠、赴任ノ由ヲ申ス、

〔西宮記〕臨時入 大宰帥大貳赴任事 康保三年十月廿日、大貳佐忠申赴任之由、召

御前仰、云々、畢仰令卽座、東又庇南一 又令召公卿、座同廂南一二間、侍臣給肴、

公卿侍臣遞行酒、五六巡之後、令右中將元輔給御衣云々、

〔禁祕抄〕下 國領赴國 諸 又於夜陰、不召御前例也、康保 例保

射場殿出  
藤原伊尹  
等ヲシテ  
射シム  
公卿ヲ召  
ス酒ヲ賜  
フ佐忠ニ御  
衣ヲ賜フ

忠、大宰大貳ニ任ズルコト、二年正月三十日ノ條ニ、召還セララル、コト、  
天祿元年三月二十三日ノ條ニ見ユ、

二十三日、大納言藤原師尹、病ニ依リ、遍敷ヲシテ、修法セシメンコト  
ヲ請フ、

〔延喜天曆御記抄〕百三十一所 柳原家記録 御修法事付七高山

康保三年十月廿三日、右大將藤原朝臣遣濟時、申依身病、以遍教法師令修法、  
而在石清水御讀經請僧之内、○本月二十五 請免其假事、令仰請遍教替之由、  
令仰民部卿藤原朝臣、

二十五日、石清水八幡宮ニ於テ、大般若經供養ヲ行ハセラル、

請僧六十  
口、勅使藤原  
爲光

〔日本紀略〕村上天皇 十月廿五日、乙酉、公家於八幡宮、供養大般若經、請僧六十

二十八日、延曆寺諸院、諸堂、諸樓、僧房等燒亡ス、尋デ、同寺ニ綿ヲ賜フ、  
〔日本紀略〕村上天皇 十月廿八日、戊子、夜天台山惣持院講堂、鐘樓、文殊樓、四王

院、延命院、常行堂、僧房卅宇有火、  
卅日、庚寅、公家賜綿於彼院、

康保三年十月二十三日 二十五日 二十八日

總持院  
四王院  
延命院

遍敷石清水  
御讀經  
請僧ニ入



康保三年十月二十八日

〔西宮記〕

○十四 前田家本 (真書) 同二 鈔本、三 = 作家大、永年十月廿九日、叡山諸堂燒、(辨カ)

〔扶桑略記〕

村上天皇下 十月廿八日、延曆寺講堂、鐘樓、文殊樓、常行堂、法花堂、四王院、延命院、并故座主喜慶等七人房舍合三十一宇、拂地燒亡、(實稱)

廿九日、己丑、左大臣令濟時奏曰、去承平五年叡山中堂燒亡時、日 = 同年三月六、不見遣官使之由、若准崇福寺燒亡時、遣檢非違使如何、令仰云、崇福寺雖爲皇御願、比延曆寺、頗不相合、去延喜十七年、東大寺講堂火災之時、遣辨官、兼施綿僧等、須勘彼例、准行云々、講堂草創以後、歷百八十二年、始有此災、(天カ)

〔叡岳要記〕

上 講堂祕錄

講堂者、故傳教大師建立、未拓伽藍、結界壇場之地域、其土中埋一鏡、○中義真和尚治山、天長年中、建立之時、以彼靈鏡、籠本尊腹中、(最尊)

〔天台座主記〕

百二十一 華頂要略 第十八 權律師良源 (定心坊) 十月廿八日

夜、講堂、四王院、延命院、法花堂、常行堂、文殊樓等燒亡、始自即日企造立計、廿九日、悲母長逝、十月、五堂一樓燒失、遺喪之間、彌增心勞、(哀)

〔僧綱補任〕

○二 興福寺本

今年十月廿八日夜、天台諸院、講堂、鐘樓、文殊樓、四王院、延命院、常行堂、故座主喜慶等七人房舍卅餘宇燒亡、公家綿千屯、注遭燒亡僧交名、各分給云々、

〔吾妻鏡〕

十八 元久二年十月十三日、丙寅、○中 村上天皇康保二年乙丑十月廿八日、戊子、亥尅、延曆寺講堂、文殊樓、延命院之本堂、東法華三昧、常行三昧堂、鐘樓及僧坊等卅一宇、一時燒失、火出於故座主喜慶坊、但四王院四天像、雖僅存、北方像自腰燒絕、頭足已別、見者拭悲淚云々、

○伊呂波字類抄、釋家初例抄、歷代編年集成等、異事ナキヲ以テ略ス、諸堂作料施入及ビ法華堂、常行堂建立ノコト、四年三月十一日ノ條ニ、總持院燒亡ノコト、天祿元年四月二十日ノ條ニ、講堂等諸堂落慶供養ノコト、同三年四月三日ノ條ニ、根本中堂供養ノコト、天元三年九月三日ノ條ニ、文殊樓供養ノコト、同年十月一日ノ條ニ見ユ、

康保三年十月二十八日

七四三

講堂 常行堂 法華堂 合計三十 一字 中堂燒亡 時ノ例 崇福寺燒 亡時ノ例 東大寺講 堂燒亡ノ 例ハシム 講堂草創 以後最初 火災

最澄藏ム 所ノ鏡

諸堂ノ佛 像ヲ取出 ス 講堂ノ本 尊燒亡ス

即日造營 ツノ計ヲ企

下賜ノ綿 千屯ヲ羅 災ノ僧ニ 頒ツ

故座主喜 慶ノ僧房 火ス



康保三年十一月一日 六日 九日 十二日 十三日

十一月 朔 辛卯 盡

一日、辛卯、旬、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月一日、辛卯、天皇出御南殿、依旬也、(本年親王)皇太子參上、

六日、丙申、平野祭、春日祭、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月六日、丙申、平野、春日祭、

九日、己亥、右大辨藤原文範ヲ藏人頭ニ補ス、

〔公卿補任〕康保四年 參議從四位上藤文範、五十同十一月九日補藏人頭、

〔職事補任〕村上天皇 右大辨從四位上藤文範 康保三十一、九補、

〔扶桑略記〕村上天皇下 十一月九日、己亥、以右大辨文範朝臣、爲藏人頭、

十一日、辛丑、園、韓神祭、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月十一日、辛丑、園、韓神祭、

十二日、壬寅、鎮魂祭、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月十二日、壬寅、鎮魂祭、

十三日、癸卯、新嘗祭ヲ神祇官ニ行フ、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月十三日、癸卯、新嘗祭、依御物忌不御中院、於神祇官

御物忌

紫宸殿出

藤原師氏  
等小忌ニ  
供奉ス  
參議ノ人  
供奉ノ例

大歌射場  
延喜十七  
年例  
親王不參  
仰言依リ  
奉納ス等  
供奉

還御供奉  
式ニ違フ

實頼内辨  
ノ事ヲ行  
ハズシテ  
著大内  
右大臣

行之、

〔西宮記〕六前田家本 新嘗祭事 (康保) 康保三年御記云、於神祇官、行新嘗祭、左

衛門督藤之、參議重信朝臣、延光之、供奉小忌、如官式參議一人可供、而二人  
供之、若有先例歟、

康保三年御記云、大歌候射庭、奏歌、此依物忌、延木十七年例所行也云々、

〔北山抄〕十一日神今食事 六月 (延喜) 同十六年、親王不參、納言一人、參議二人

卜食、依無親王、有仰供奉、後日外記勘申弘仁以來、無此例、事由、事已失誤、以後可  
改云々、○中 康保三年十一月、又有此例、康保三年、供夕膳後、彈

大忌近衛陣、還御時供奉例、○中

康保三年十一月、依違式被糺仰、

十四日、甲辰、豐明節會、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月十四日、甲辰、節會、

〔西宮記〕六前田家本 新嘗會 康保三十一、新嘗會、左大臣被聽不立朝列、  
不行内辨、昇殿著座、右大臣行内辨事、○年中抄同行、

康保三年十一月十四日



辨ノ事ヲ  
行フ殿出  
紫宸殿出  
御諸國司等  
座ニ預ル

五節帳臺  
試ナシ

官歴

經賀ノ弟  
子興福寺西  
室七八室  
住ス

康保三年十一月十五日 十八日 十九日

七四六

康保三年十一月十四日、未刻之紫宸殿、右大臣令文範朝臣奏諸國司等可預節會座文、仰依請云々、了王卿諸大夫等各著座、次左大臣參上、朝列之後、不行内辨、直昇著座、

〔西宮記〕殿試五節事 五日於常寧 康保三十一、舞姬一人不參、無試、

十五日、乙、東宮鎮魂祭、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月十五日、乙巳、東宮鎮魂祭、

十八日、戊、權少僧都祥延寂ス、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月十八日、戊申、權少僧都祥延卒、

〔僧綱補任〕二興福寺本 權律師祥延 天德二年十二月二十七日任、法相宗、興福寺六十八已講勞、和泉國人、珍氏、應和二年三月十六日轉正、康保元年

七月二十日轉任權小僧都、同三年十月十八日入滅、七十六

〔維摩會講師研學豎義次第〕三年、己、講師祥延 年五十九、萬冊二、珍氏、和泉僧都弟子、住西室第七八室、

十九日、己、賀茂臨時祭、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月十九日、己酉、賀茂臨時祭、

二十二日、壬、大原野祭、

〔日本紀略〕村上天皇 十一月廿二日、壬子、大原野祭、

二十五日、卯、彗星、見ハル、

〔諸道勘文〕四十 勘申彗星年々事略 中

康保三年十一月廿五日、乙卯、夜亥時、彗星見南方、

右依仰大略勘申如件、

長治三年三月四日 大外記中原朝臣師遠

〔一代要記〕村上天皇 十一月二十五日、乙卯、亥時、彗星見西方、

○中右記、長承元年九月、山槐記、治承二年正月、異事ナキヲ以テ略ス、

上野太守爲平親王、昭陽舍ニ於テ、嫁娶ノ禮ヲ行ハセラル、

〔撰集祕記〕二十七 臨時七 親 康保三年十一月廿五日御記云、此夜上野大守親王、於昭陽舍宿廬、娶右大臣息女、於禁中行婚禮、頗雖無便、予在藩之時、天慶年中、於飛香舍、納故中納言女、十九日、條參看、依有蹤跡、殊許之、

〔榮華物語〕一 宴 かゝる程に、后のみやも御門も、四の宮をかきりなきも

康保三年十一月二十二日 二十五日

七四七

高明ノ女  
ヲ娶リ給  
フ天慶ノ  
例依リ禁  
中ニ行フ



のに思ひ聞えさせ給ければ、そのけしきにしたかひて、よろつの殿上人、上達部なひきつかうまつりて、もてはやし奉り給程に、やう／＼十二三はかりにおはしませは、御元服の事おほしいそかせ給ふ、〇二年八月二十御むすめもたまへる上達部は、いみしうけしきはみ聞え給ふに、宮の大夫ときこゆる人、源氏の左大将、(高明)えもいはすかしつき給ひとりむすめを、さやうにとほのめかし聞え給ければ、みかとも宮も、御けしきさやうに覺しければ、よろこひて、よろつしとゝのへさせ給て、やかてその夜参り給、れいの宮達は、我さどにおはしそむることこそつねの事なれ、これは女御更衣のやうに、やかてうちにおはしますに参らせ奉り給ふへきためあれば、れいの女御、更衣のまいりはさる事なり、これはいとめつらかにさまかはり、いまめかしうて、御元服の夜やかてまいり給、みかときさきの御よめあつかひの程、いとおかしくなんみえさせ給ける、

ス、  
 ○榮華物語、御元服ト同日トス、今撰集祕記所載ノ御記ニ據リテ掲書

三十日、庚申、御庚申、

殿上侍臣  
 フ召ス  
 及ビ和  
 攤ノ興ア  
 歌ノ興ア  
 酒及ビ祿  
 フ給フ

〔扶桑略記〕

村上天皇下

十一月卅日、庚申、今夜召殿上侍臣於御前、聊打攤

給酒、及曉令詠和歌、以納殿絹給侍臣、

〔濫觴抄〕

下

侍臣給酒

同十一月廿六日、庚申、夜召御前給之、及曉天詠和

歌、以納殿絹給之云々、



康保三年十二月一日 二日

十二月辛酉朔

一日、辛酉朔御息所御名產養

使藤原爲光

〔西宮記〕十一前田家本皇太后養產事 同三十二一、息所產、遺絹、員如例、將爲藏人少

二日、壬戌中納言從三位藤原朝忠薨不、

年五十七

〔日本紀略〕村上天皇 十二月二日、壬戌、正三位行中納言藤原朝臣朝忠薨、年七十五

薨奏

廿二日、壬午、奏略中中納言藤原朝忠卿薨由、

官歷

〔公卿補任〕五 參議從四位上藤原朝忠 右大臣定方五男、母中納言山蔭女、

從四位下 延喜十年庚午生、延長二二一左近將監、昇殿 同三年東宮侍中、同

四正七從五下、東宮御給 同五十一十六侍從、同八九廿二昇殿、歌仙傳 東宮三十六人

十一月十八日藏人、同九三十三右兵衛佐、承平五二廿三左近權少將、同六正

七從五上、廿九日兼播磨權介、天慶四正七正五下、三月廿八日兼丹波介、同六

正七從四下、同十四日昇殿、同二月廿七日內藏頭、同九二七近江守、十一月十

九日從四上、悠紀會 天曆五正卅左中將、同六正十一兼伊勢權守、十二月一日

任參議、同七年正月廿九日兼備前守、同八年正月廿五日兼大貳、三月大貳辭

退、但辭日 同十年正月七日正四下、同廿七日兼讚岐守、天德元年十二月廿

土御門中納言又堤

五日兼右門督、爲別當、同二年正月卅日兼備中守、同四年正月廿四日兼伊守  
守、○守、同上、權 應和元年十二月二日從三位、造宮賞、同三年九月四日任中納  
言、右門督、別當如元、康保二年十月中風、不從事、十一月八日、辭右門督、別當、依  
中風也、同三年十二月二日卒、號土御門中納言、又堤、參議十二年、別當九年、中  
納言四年、

〔三十六人歌仙傳〕

中納言從三位藤原朝臣朝忠 延喜十七年十月廿四日

昇殿、○中 天曆二年三月九日昇殿、○中 同二月七日昇殿、天德元年四月任右

衛門佐、五月爲使別當、○中 同月十六日昇殿、○中 同十月廿八日昇殿、

〔尊卑分脈〕

藤原氏  
高藤孫

定方

朝忠 五藏 中納言、從三、別當、或說、定國子云々、康保三十二二

理兼 太皇太后宮權亮 攝津守、正四下、

女子 母出羽守忠舒女、

女子 母穆子左大臣雅信室、從五下、

女子 母左大臣重信室、相方辨母、

〔二中歷〕

名十三人歷 名臣 土御門中納言 朝忠

康保三年十二月二日

七五一

世系

名臣



三條中納言ト號ス  
駒御使ト爲ル

〔十訓抄〕

可庶幾才能事

村上御時、三條中納言朝忠御前に候ひけり、略下

〔權中納言朝忠卿集〕

少將にて駒むかへに、本院女御殿のおまへをひかせ

て、御前へまいる人々をわたる所によりて、望月のこま引わたる秋の夜は光あまねきものにそ有ける

朝忠ト藤原師尹

藤原師尹權大納言、ひは殿○ひは殿、歌仙家集本朝にかよひはしめ給て、四日と

いふに、

わきもこかねやのつまなる菖蒲草ねもあらはれて今朝はみゆらん

朝忠ト陸奥守

みちの國のかみ、しら河にてせんし給ふに、

別ることもまたあふ坂の關路にそしるもしらぬもまとはさりけり

行かへる物としるく、あやしくも別と聞はをしまるゝかな

朝忠ト侍

内侍督の御もとに、たのめてこねは、

よのほとは今やノゝとなくさめつさめての後そわさとなかるゝ

こないしのかみの御はてに、母君の御もとに、

あふことのみやつかへにとわひつるを今朝の袂そつゆけかりける

返し、大將、

人しれすうちはらひつる朝露にあやしく君もぬれにける哉

いつとなくぬるゝ袂は古を忍ふる雨にぬれにけるかな

かへし

人しれぬ野の下草となれる身も雨におとらぬ露を置ける

朝忠ト少貳

少貳○少貳、歌仙家集本朝命婦かよふに、つゝむことありて、

雲間にはいとゝなかめそまさりけるあまの岩戸（いよ）のひまやみ（な）ゆる（ら）こと

かくて久しくありてわつらひしに、とはてほどへていひたる、

露はかり思ひおくへき心あらは消ぬさきにそ人は問まし

〔後撰和歌集〕

戀十三 公頼朝臣のむすめにしのひてすみ侍けるに、わつ

らふ事ありて、しぬへしといへりければ、つかはしける、

朝忠朝臣

もろともにいさどいはすはしての山こゆともこさむ物ならなくに

〔後撰和歌集〕

戀十二 大輔かもとにまうてきたりけるに、侍らさりけれ

朝忠ト橋公頼ノ女

朝忠ト大輔



は、かへりて、又のあしたにつかはしける、

朝忠朝臣

いたつらに立かへりにし白浪の名残に袖のひる時もなし  
納言朝忠卿集二句ヲ立歸ニ作ル、四

返し

大輔

なに、かは袖のぬるらん白波のなこりありともみえぬ心を  
結句ヲ  
みえぬけし、  
きをニ作ル、

〔權中納言朝忠卿集〕

たいふかもとより曉にかへりて、

もろごもにをるとはなしに打どけてみえやしぬらん朝顔の花

同じ人 集 又歌仙家集本朝忠 集 又大輔ニ作ル、

古はおもひ出きや渡り河わたるてふなはなかれすや君

かへし

なかれての名に社有けれ渡り河あふせありやと頼けるかな  
撰和歌  
集同

又同じ人、

ぬれはつる水の下にもいかなればこひといふ魚の絶す住らん

又 〇後撰和歌集大輔かもとにつ

池水のいひ出る事のかたければみこもりなから年そへにける

世中のさはかしきころ、

人の世の花をはてにしせましかはけふかあすかと思はさらし

かへし 〇新古今和歌集題しら 権中納言朝忠ニ作ル、

心にもまかせさりける命かたのめもおかし常ならぬよに

ほかへやる文を、たいふか許にもてたかへたれば、  
〇後撰和歌集大輔  
かへたりけれは、つかはしける、大輔ニ作ル、た

道しらすぬ物ならなくに足引の山ふみまどふ人も有けり

返し 〇同上、作者ヲ敦 忠朝臣ニ作ル、

しらかしの雪も絶にしあし引の山路を誰かふみまよふらん

右近にはしめて、

よど河の汀におふる若草の根をし絶ねはそもしりなん

同じ人に、

朝忠  
ト右  
近



朝忠ト中納言

朝忠ト女藏人監

朝忠ト本院侍從

康保三年十二月二日

七五六

山城のうりのつらくはみゆれともおもふ心のなごさはらめや

中將にて、女と名たつ比、中納言といふ人に、

もろともに君とほさなんぬれ衣はかなき名をは我のみやたつ

女藏人けんといふ、あつまへくたるに、

別ちを惜む心そ、(のイ)櫻花あふ坂まてはちらすもあらなん

〔新勅撰和歌集〕

戀歌一

中將に侍ける時、おなし女につかはしける、

中納言朝忠

いはてのみ思ふ心をしる人はありやなしやと誰かとはまし家集本

同朝忠集

返し

本院侍從

しる人や空になからん思ふなる心のそのこゝろならては四〇同ヲ  
心のうち  
のニ作ル、

〔權中納言朝忠卿集〕

本院侍從、かねみちとねたるを立聞て、

よそにわか人(ハクニ)とく(ニ)を聞しかはあはれとも聞(思)あなうとも聞

本院侍從に、〇同上、本院ゆかうしのかはに書て、

うすけれどうすくもあらす山吹のやへの色にし思をむれは  
かへし

かさぬれどうすき心のやへなれはそむてふ色の數は物かは  
本院のせうさうしはふきするを聞て、

しもつけやしはふき(ハ)の(イ)白(ク)露(シ)のかゝる折にや色かはるらん

〔大和物語〕

上

あさたゝの中將、人のめにてありける人に、しのひてあひ

わたりけるを、女も思ひかはしてかよひすみけるほどに、かのおとこ、人の  
國のかみになりてくたりたりければ、これもかれもいどあはれとおもひ  
けり、さてよみてつかはしける、〇新千載和歌集、詞書ヲいと忍ひてかよひ  
は女もまかりけるに、つかはしける、〇新千載和歌集、詞書ヲいと忍ひてかよひ  
は女もまかりけるに、つかはしける、

たくへやる我玉しひをいかにしてはかなきそらにもてはなるらん〇權中納言

言朝忠卿集、上句ヲほとへつるわか玉しひは  
新千載和歌集、四句ヲはるけき空にニ作ル、

となん、くたりける日、いひやりける、

〔三中歴〕

倭歌歴

歌人 公卿 土御門中納言

康保三年十二月二日

七五七

人妻ニ通ズ

女夫ノ赴任ニ隨ヒテ下向ス

朝忠歌ヲ贈ル

歌人



康保三年十二月二日

七五八

歌仙人卅六人 朝忠卿

拾遺抄歌人 朝忠

〔和歌色葉集〕上 六名譽歌仙者

集打聞に入たる歌よみは多かれども、宗と覺たかきは四百五十七人なり、  
略○中

俗百六十人

後拾

中納言藤原朝忠卿 三條右大臣息門中納言

〔勅撰作者部類〕

自帝王至庶人之部 朝忠 從三位中納言三年中納言同大臣男天曆

後撰集 春中、戀五、位、四

拾遺集 春、戀一、賀一、言中 新古今集 戀一、賀一、戀

五、續後撰集 戀一、戀五、位、四

續古今集 哀、戀一、言中 玉葉集 春上 續千載集 春下、戀

後拾遺集 賀一、戀一、戀五、位、四

新千載集 春下、戀一、言中 新後拾遺集 戀四

〔深窓秘抄〕

文○公爵近衛所藏

讀人五十二人

朝忠中納言一首 戀

〔新撰朗詠集〕

春上 三月盡

花たにもちらて別る、春ならはいとかくけふをおしましやは中納言門

〔百人一首抄〕下

百人一首作者部類

中納言 朝忠

〔朝忠集〕

家○歌仙集本

借請右大辨入道之本

建長六年十二月廿四日 申刻 書寫之、同夜於燈下校合了、在判

〔池底叢書要目〕

卷之第八 朝忠卿集

こは流布の歌仙歌集に載るところの類本にして、群書類従本とは頗異なる、り、されど流布本とも又異同ありて、ことにまされる古鈔本の影寫なり、奥書云、右朝忠黃門家集、以道濟朝臣自筆本臨、行上加撰集名及墨點者、定家黃

〔勸修寺文書〕

二〇山一 勸修寺古事 一西堂長者次第

坊中納言 朝忠、自承平二年、勸修寺古事、從三位

〔勸修寺緣起〕

三條右大臣、一堂を建立せられたりける、威風すてになりて、ほとなくかくれ給にければ、朝成、朝忠など申御子たち、佛閣の莊嚴をそへて、八月ついたちよりおなしき四日、丞相の御忌日にいたるまで、南北の碩

康保三年十二月二日

七五九



康保三年十二月二日

七六〇

才をまねきて、一乘八座の講師（師）をはしめらる、○康保元年年末雜載、佛寺ノ條參看、

○朝忠、醍醐天皇ヲ悼ミ奉ル歌、延長八年九月二十九日ノ條ニ、駒牽ニ列スルコト、天慶元年九月七日及ビ同四年九月二十三日ノ條ニ、伊勢トノ贈答歌、同元年十一月五日ノ條ニ、成明親王御元服ノ理髮ヲ勤仕スルコト、同三年二月十五日ノ條ニ、藤原敦忠第ノ詠歌、同六年三月七日ノ條ニ、子日御遊ノ詠歌、天曆三年正月八日ノ條ニ、内宴ニ笙ヲ奏スルコト、同五年正月二十三日ノ條ニ、殿上ノ詠歌、同年年末雜載、文藝ノ條ニ、朱雀天皇ヲ悼ミ奉ル歌、同六年八月十五日及ビ十月二日ノ條ニ、同天皇御火葬ニ奉仕ノコト、同年八月二十日ノ條ニ、太皇太后穩子ノ朱雀院御馬獻上ヲ奉行スルコト、同年十月十七日ノ條ニ、東宮御著袴ノ詠歌、同年十二月八日ノ條ニ、例務ニ從ヒ、位祿ニ預ルコト、同八年四月九日ノ條ニ、長奉送使トナルコト、天徳元年八月二十九日ノ條ニ、清涼殿女房歌合ニ作者ト爲ルコト、同四年三月三十日ノ條ニ、上表ノコト、同年五月一日ノ條ニ、藤花宴ニ笛ヲ奏スルコト、應和元年閏三月十一日ノ條ニ、昌子内親王御著裳ノ御屏風ノ歌ヲ詠進スルコト、同年十

十日、庚午、御體御卜奏、

〔日本紀略〕村上天皇 十二月十日、庚午、御躰御卜、

十一日、辛未、月次、神今食祭、

〔日本紀略〕村上天皇 十二月十一日、辛未、月次、神今食、被加奉八社幣帛、

〔西宮記〕六月内行神事例 在 康保三年十二月御記云、依無小忌納言一人例、納言、參議各一人可供奉之由令仰、又卜食外記不候、仍以史令行事云々、

〔小野宮年中行事〕前十二月十三日點荷 康保三年十二月十日邑上御記云、○中今日神今食散齋也、舊說諸陵官人、齋月不入宮中、

〔北山抄〕十一日年中要抄下 六月 小忌次將代官例、康保三年十二月左中將博雅不參自餘不合

〔年中行事秘抄〕齋月諸陵官人不可參内事

見康保三年十二月十日御記、

康保三年十二月十日 十一日

七六一



十六日、丙子、荷前、

〔日本紀略〕村上天皇 十二月十六日、丙子、荷前使、

〔小野宮年中行事〕前使參議已上奏聞事 康保三年十二月十日邑上御記

云、左大臣令申云、今日定申荷前使如何、令仰云、今日神今食散齋也、舊說諸陵官人、齋月不入宮中、況定荷前使、

十七日、丁丑、中務卿三品式明親王薨、ゼラル、

〔日本紀略〕村上天皇 十二月十七日、丁丑、中務卿三品式明親王薨、

廿二日、壬午、奏中務卿三品式明親王略、中薨由、式明親王喪料絹卅匹、調布百五十段、商布二百段、

〔西宮記〕天皇服錫紵儀 凶事 前田家本 康保三、式明親王薨日、不量知除日、

復日除給、雖御物忌、出御簾外著給、

〔小右記〕 萬壽四年十二月七日、癸酉、中廢朝、依勘申可被行、三个且今日著

御錫紵、第四日除可宜歟、略、中御衰日除給、康保三年十二月二日、壬午、中務卿式

明親王薨奏、服錫紵、廿四日、甲申、御衰日除給、復日給也、

〔兵範記〕 嘉應元年十二月十五日、丙申、略、中

二品法親王薨逝間、可被准行雜事例

康保三年十二月十七日、丁丑、三品中務卿式明親王薨、帝兄、

廿二日、壬午、中納言藤原朝忠卿、著仗座行薨奏事、大納言在衡卿仰外記云、自今日三箇日可密奏之由、召仰內暨者、又同親王家絹卅疋、調布百五十段、商布二百段、以諸國所進年輪內可宛行之由、被仰辨官畢、略、中

右勘申如件、

嘉應元年十二月十二日

大外記清原真人賴業

〔一代要記〕醍醐天皇 式明親王 三品、中務卿、母同常明、延喜十一年十一月二十一日為親王、年五歲、康保三年十二月十七日薨、

〔本朝世紀〕 天慶八年七月廿七日、辛酉、略、中有召合事、略、中四品式明、有明親

王、略、中參入、

〔大嘗會御禊部類記〕家本 九條殿御記

天慶九年十月廿八日、乙酉、略、中有大嘗會御禊、略、中差仰大宰帥

〔御産部類記〕二利三十五所收 冷泉院

九條殿記 天曆四年閏五月一日、丁卯、略、中此日當第七夜、略、中中務卿式明

薨奏

御錫紵ヲ著シ給フ

喪料ヲ賜フ諸國年輪物ヲ充ツ

御官歴四品

大宰帥

中務卿



康保三年十二月十七日

七六四

昇殿ヲ聽  
サル

御世系

親王○中 來向、

〔西宮記〕

○四前 七月 田家本

御覽日

天德三年七月(二十八日) 節代事了、○中

〔式明親王〕 中務卿昇殿、

〔本朝皇胤紹運錄〕

醍醐天皇

式明親王

三品、中務卿、母同、和子女、御

源親賴

從四上、入道、母女、女、

〔尊卑分脈〕

醍醐氏

醍醐天皇

式明親王

三品、中務卿、母同、和子女、御

親賴

〔扶桑略記〕

二十六村上天皇下

應和元年五月十日、壬申、夜強盜入前武藏守滿仲之宅、○中弘重(食糧)指申中務卿親王第二男○中等所爲也、○中親王令申云、男親

繁日來重煩痲病、○下

○式明親王、御元服ノコト、延喜二十一年十一月二十四日ノ條ニ、駒牽ニ列シ給フコト、承平五年九月七日、同七年八月二十八日及ビ天慶七

年五月三日ノ條ニ、醍醐寺塔材ヲ曳カシメ給フコト、承平六年三月十三日ノ條ニ、豐明節會ニ小忌親王トナリ給フコト、天慶二年十一月二十五日ノ條ニ、極樂寺一切經供養ニ列シ給フコト、同四年八月二十六日ノ條ニ、相撲召合ニ貫首トナリ給フコト、同六年七月二十七日ノ條ニ、競馬ニ列シ給フコト、同七年五月五日及ビ六日ノ條ニ、左大臣實賴ノ大饗ノ尊者トナリ給フコト、天曆三年正月十一日ノ條ニ、憲平親王立太子儀ニ列シ給フコト、同四年七月二十三日ノ條ニ、殘菊宴ニ列シ給フコト、同年十月五日ノ條ニ、東宮大饗ニ列シ給フコト、同七年正月二日ノ條ニ、大江維時ニ史記ヲ受ケ給フコト、天德元年十二月二十八日ノ條ニ、左大臣實賴ノ大饗ニ列シ給フコト、同二年正月是月ノ條ニ、盜ヲ犯セル王子親繁ヲ進メザルニ依リ、罪ヲ科セラル、コト、應和元年五月十日ノ條ニ、廣平親王御元服儀ニ列シ給フコト、同三年八月二十日ノ條ニ見ユ、

十九日、己卯御佛名、

〔日本紀略〕

村上天皇

十二月廿一日、辛巳、御佛名始、(始カ)

康保三年十二月十九日

七六五



〔西宮記〕十二月 御佛名 康保三年十二月十九日、始御佛名、立春之後、當明年衰日、

二十六日丙戌、僧綱召、

〔日本紀略〕村上天皇 十二月廿七日、丁亥、任僧綱、

〔僧綱補任〕二 興福寺本 十二月廿六日轉任權小僧都六十八、寺門高僧、

師房算 十二月廿六日轉任權少僧都七十八、寺門高僧、

救世 同日轉任權少僧都七十八、寺門高僧、

安秀 同日轉任權少僧都七十三、寺門高僧、

權律師法藏 十二月廿六日轉正五十九、寺門高僧、

賀靜 同日轉正八十一、寺門高僧、

良源 十二月廿六日轉正五十五、天台座主、

昌矣 同日任、律宗、大安寺、大和國人、三宅氏、七十九、

定昭 同日任、法相宗、興福寺、已講勞、五十八、

行譽 同日任、天台宗、延曆寺、內供勞、靜觀僧正弟子、七十四、寺門高僧、

シナ、

内供奉補  
禪師ヲ補  
ス

〔僧綱補任〕乾 天 昭武三年 德 川 昭武氏本 權律師增恆 康保三年十二月廿七日補内

供奉十禪師、

阿闍梨ヲ  
補ス

〔僧綱補任〕乾 德 川 昭武氏本 權律師餘慶 康保三年十二月廿七日爲延

曆寺阿闍梨、

〔僧綱補任〕乾 德 川 昭武氏本 權律師乘惠 康保三年十二月廿七日爲延

曆寺阿闍梨、座主僧正良源奏、

〔僧綱補任〕乾 德 川 昭武氏本 權律師覺忍 康保三年十二月廿七日依別

當增恆奏、爲元慶寺阿闍梨、

〔西宮記〕臨時一 諸宣旨 康保三十二廿五、以祚倫被補興福寺釋迦堂十僧、安秀

〔扶桑略記〕村上天皇下 十二月廿六日、丙戌、召大臣於御前、定僧綱等、以律

師房算、安委、救世爲權少僧都、定昭、昌矣、行譽爲權律師、智興、餘慶等爲阿闍梨、

延曆寺六月會ニ廣學堅義ヲ加ヘ、總持院ニ阿闍梨三人ヲ加ヘ置カシム、

〔西宮記〕九月 季御讀經 康保三年十二月三日、左大臣令奏、延曆寺座主良源申

請雜事十箇條之内、廣學堅義一人、明年春季御讀經、被召預最初闕請者云々、

仰云、請阿闍梨之次、預件堅義者云々、

興福寺釋  
迦堂十僧  
於給於

御前ニ  
テ定メ  
給

良源十箇  
條ヲ申請  
ス



康保三年十二月二十六日

七六八

〔僧綱補任〕

〇興福寺本 十二月廿六日始廣學立義宣旨被下、

〔天台座主記〕

〇慈嚴注進紙背 第十八權律師良一 同月日、六月會可

加廣學堅義之由宣下、

宣旨

左辨官下 延曆寺

應六月法華會加廣學堅義者一人事

右得彼寺座主內供奉十禪師權律師法橋上人位良一去九月十日奏狀傳、  
、、左大臣宣奉勅依請、但先阿闍梨者、然後請其撰定也、

康保三年十二月廿六日

左少史坂合部宿禰

〔天台座主記〕

百二十一華頂要略 第十八權律師良源 同日六月會可加廣

〔僧綱補任抄出〕

康保三年十二月廿六日、始天台廣學堅義宣下、

〔伊呂波字類抄〕

官職 堅者 年十二月初六日、始天台山廣學立義宣

總持院阿闍梨十六人  
廣學堅義者稱之、  
廣學堅義者稱之、  
廣學堅義者稱之、

〇始メテ、六月會ニ廣學堅義ヲ加ヘ行フコト、安和元年六月四日ノ條ニ見ユ、

信正王等ヲシテ、省試ヲ奉ゼシム、

〔西宮記〕

裏書 一 康保三年十二月廿五日御記云、仰民部卿藤原朝臣、信正

親喪中登省ノ例ヲ勘ゼシム  
假限ヲ半減スルノ例ニ依ル

王申親喪內登省事、可准例宜令勘申、同廿六日、令仰左大臣、學生信正、平美、信令登明日省試事、信正王依故中務卿親王喪假未滿、令勘先例、忽無所見、而准半減假限、依召參入之例、令仰下文、

〇式明親王、薨去ノコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、

二十七日、內藏頭正四位下小野道風卒ス、

〔日本紀略〕

村上天皇 十二月廿七日、丁亥、〇中是日正四位下行內藏頭小野朝

年七十三

臣道風卒、

〔新札往來〕

從四位上木工頭道風朝臣、寬平五年誕生、弘法大師御入定以後

〔藏人補任〕

非藏人小野道風 延喜廿年五月五日、具能書之撰也、延喜廿一

官歷人  
非藏人  
右兵衛少尉

〔扶桑略記〕

醍醐天皇下 延長三年八月廿三日、癸未、〇中令少內記小野道

康保三年十二月二十七日

七六九



康保三年十二月二十七日

七七〇

〔官職祕抄〕

諸道官

少內記

以能書輩為最、道風自兵衛尉任之、○中是也、

〔小右記〕

天元五年正月十日、癸卯、○中被加奏略○中少內記奉忠申榮爵申文、

內記勞七年、少內記預榮爵例、父道風例者、

〔慈覺大師傳〕

令內藏權助從五位下小野道風書之、○上略

天慶二年十一月三日、○下略

〔本朝世紀〕

天慶五年四月廿七日、庚辰、○中今日被奉遣宇佐宮神財并幣帛

右衛門佐

等、使右衛門佐從五位下小野朝臣道風、

〔政事要略〕

議請減贖事、八十二、  
紀彈雜事二十二

太政官符刑部省

應徵納右衛門府贖銅拾貳斤事、○中略

從五位上

佐從五位上小野朝臣道風、贖銅貳斤、○中略

〔九曆〕

天慶九年八月七日、○全文、八、同日、  
條、收、

〔扶桑略記〕

天德元年正月十八日、喚木工頭道風朝臣、  
村、上、天、皇、下、天德四年十月九日、乙亥、木工寮頭小野朝臣道風

木工頭

內藏權頭

昇殿

世系

為內藏權頭、以散位藤原滋望為木工頭、道風朝臣病後言語不通、無便急作行事、○天德四年九月二日、仍任其替也、

〔諸家系圖纂〕

小野三系上圖

葛玄(葛力)

道風 從四位下、康保三卒、六十三

奉時 兵庫頭、從五位下

長範

奉忠 內藏頭、內記大夫

奉明

〔諸家系圖纂〕

小野三系上圖

葛絃

道風 內藏頭、正四位下

奉時 大內記、從四位上、兵部大輔、兵庫頭、

奉忠

康保三年十二月二十七日

七七二



康保三年十二月二十七日

奉明修理大夫、

〔系圖纂要〕

號外十臣姓

葛紋

道風

母正四下、內藏權頭、木工頭、寬平六年生、康保三年十一月卒、七十三、

道丸

奉時兵庫頭、

〔魚魯愚鈔〕

公卿二執筆申息子、

有文章生任大納記之例、野道風申任息

子例云々、

〔小野道風筆屏風土代〕

御物

已上詩等、延長六年十一月內裏御屏風等詩也、

于時略中

小內記小野道風書之、年月是月、全文ハ同年、

〔本朝文粹〕

申官爵奏狀中

從四位下行木工頭小野朝臣道風誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩被遷山城守、兼任近江權介狀

年齡

七七二

十二時皇七奉皇時  
醜醜ルニ仕醜醜天  
七廻子賢  
障子聖  
書シ兩度  
大嘗會ノ  
屏風ヲ書  
ス  
名唐國ニ  
傳ハル

賢聖障子  
七廻執筆  
ノニ就キテ  
ノニ就キテ  
下能書ノ預御  
ル問ニ預御

小野道風文三

右略○中道風從加爵級、數移星灰、每見除書、頻漏渙渥、輸忠貞於奉國、積夙夜之

勤公、春秋一十二歲之時、初奉龍顏之聖主、勞積五十四年之日、已爲鶴髮之衰

翁、少藝少能、非神非妙、然而紫宸殿之皇居、七廻書賢聖之障子、寬平年中及

月是月ノ大嘗會之寶祚、兩度贖畫圖之屏風、承平二年十一月十三日及

條參看、臨時奉勅、不可勝計、方今微功之下、日月彌深、薄効之中、恩慈未至、觀三朝之

德化、身猶雖沉本朝、隔萬里之波濤、名是得播唐國、中略、道風ノ書ヲ唐朝ニ

條十一日ノ

天德二年正月十一日

從四位下行木工頭小野朝臣道風上

〔花園天皇宸記〕

元弘元年十月十二日、中略未剋許御幸歷覽之處、南殿賢聖

伊尹上色紙形被切取、中略仍續絹采色、而行迹皆被書、略註一人不書之條、無

念之間、俄召行房朝臣令書之、其次被尋何比以後無此儀乎之由、申云、中前

例多名許書之、而道風一度書行迹、七廻書之由不見道風申文在世遇造內裏七

度也云々、行

〔江談抄〕

雜事

天曆皇帝問手跡於道風事

康保三年十二月二十七日

七七三



康保三年十二月二十七日

七七四

天曆皇帝召道風朝臣、勅云、我朝上手誰人哉、申云、空海、敏行、時人難云、於大  
師御名可奏音讀也、敏行ヲハ、猶止志由岐止奈牟可奏云々、  
道風、朝綱手跡相論事

天曆御時、野道風與江朝綱、常成手書相論之時、兩人議曰、給主上御判、互可  
決勝劣云々、仍申請御判之處、主上被仰云、朝綱カ書劣於道風事、譬如道風  
劣朝綱之才云々、

〔眞俗雜記〕 十四 道風點御扇事

道風十才時、始延喜聖主被召、白打輪給、物カキタリケルヲ、御門御覽、不被思  
食シテ、スコシ逆鱗アリケルニ、誤右軍團扇樣習參、忝白圓御扇面點（讀方）怠狀書  
タリケレハ、御門一期恥シトコソ被仰ケレ、

〔日本紀略〕 天皇 天德二年四月八日、己未、略、中抑當時能書、木工頭道風朝

〔天德三年八月十六日鬪詩行事略記〕 文庫本 木工頭小野道風者、能書之

絕妙也、義之再生、仲將獨步、施其屏風、書彼門額、處々莫不靈、家々莫不珍者也、  
仍爲一朝之面目、爲萬古之遺美、競其清書、左右謁望、左右相定之日、左者卑詞

大江朝綱  
劣ヲ爭ヒ  
勅裁ヲ奏  
請ス

十歳ニシ  
テ醍醐天  
皇ト召サ  
ルトノ説

當時ノ能  
書

能書ノ絶  
妙

詩合ニ左  
右清書ス  
ル

コト急

左右ノ詩  
ヲ清書ス

世道風ノ  
書ヲ賞美  
ス

世人一行  
バ得ザレ  
トス

高名能書

篤禮、請以消息之書、右者差行事衆、殊含丁寧之詞、左右逐電、一時到門、方今欲  
寄左、則右使先詞、欲寄右、亦左書入手、持疑之間、未有一定、而十五日朝、左方送  
消息之間、家人稱物忌、不通事由、爰右頭右兵衛督延光朝臣、藏人頭左近中將  
伊尹朝臣、左中辨文範朝臣等、強排門戶、突入家内、主人不堪、已以相謁、四人相  
携、一車同乘、到枇杷家、引入座上、盃酌頻巡、歡娛無極、丁寧詞中、清書已畢、于時  
左方適得此聞、上奏道風朝臣乖于先日約之由、可召仰之綸言已畢、而使牛頻  
到、門戶固閉、通宵宴飲、曉更相分、十六日巳時許、參入於内、蒙仰之後、更書左詩、  
然則左右之詩、或真或行、垂露之文、向日彌耀、秋風之體、映燈猶遺、可謂乾坤一  
物在於斯人、下略上

〔榮華物語〕 月宴 左大臣に源の兼明ときこゆるなり給ぬ、中略御てをえ

もいはずかき給ふ、道風などいひける手をこそはよにめてたき物にいふ  
めれど、これいとなまめかしうおかしけにかゝせ給へり、

〔今鏡〕 五つふちなみの中 道風のぬしのいますかりける世にこそ、ひと

くたりもたぬ人ははちに思ひ侍けれ、

〔河海抄〕 十二 掌中曆云、高名能書、中略道風、木工

康保三年十二月二十七日

七七五



〔河海抄〕

八 繪合 繪はこせのあふみ、手はきの貫之かけり、  
略○上 紀貫之、道風共以能書也、見惟宗直本勘文、

〔三中歴〕

一十三 能歴  
道風、文勢并佐理、

野歟 說云、○中 李頭道風

〔弘法大師書流系圖〕

伊衡 三木、正四位下、

道風 正四位下、  
木工頭、

兼明親王

村上天皇

舉時 從四位下、兵  
庫頭、道風子、

時文 加賀守、

佐理 行成

和漢相承之書流、以五筆和尚爲祖、近代小野道風、尤得其骨、  
（全傳）

〔權記〕

長保五年十一月廿五日、辛亥、略○中 此夜夢逢野道風、示云、可授書法、言  
談雜事、

〔十訓抄〕

可庶幾才能事 行成は道風か跡を繼て、めてたき能書なりけり、  
（敦道親王）

〔權記〕

長保二年二月三日、辛亥、略○中 詣帥宮、略○中 又借給道風飛白書一卷、  
（藤原親通）

〔愚祕抄〕

上 或人の筆體の事を書て侍る物に、皮肉骨の三體といふ事を  
（藤原公任）

たて、申たるに、古の三跡に此三體をよせて、三得三失をあて、侍り、三跡  
とは、野跡、道風、行跡、行成、佐跡、佐理、の三也、野跡は骨をかきて、皮肉の二をか

ゝす、略○中 それ道風は筆勢えもいはすつよく、またゝかにして、やさしく愛  
あるかたをかゝす、

〔夜鶴書札抄〕

一三賢之聖跡と申事  
弘法大師 此御手跡、聖 道風 此手跡を、聖  
是を三賢の聖跡と申也、

天神 此手跡を、賢  
（菅原清公）

〔筆法才葉集〕

一文字ノ始ノ事、略○中 和國ニハ、二聖三賢ノ御筆ヨリ筆法始  
レリ、二聖トハ、嵯峨天皇、弘法大師ノ筆跡ナリ、三賢トハ道風、行成、佐理ノ  
筆法是也、

書ヲ藤原  
伊衡ニ學

其弟子

藤原行成  
夢ニ道風  
ノ書法ヲ  
受ク

飛白書

假字書

三跡ノ一  
野跡

聖跡ト稱  
セララル

三賢ノ一



佐理ノ勝  
ルトノ評

行成ニ勝  
ルトノ評

佐理行成  
ハ道風ヲ  
學ブ

野風後代  
ヲ風靡ス

三跡ノ稱  
ハ道長ノ  
ハ物起  
ノ起

康保三年十二月二十七日

七七八

〔重之集〕

三位大貳は、○中宰相をかへしたてまつられて、大貳になられて下給へるを、道風はなちては、いとかしこき手書なりとて、公も下されたることを悔しきことに仰せられて、○下略、歌仙家集本源

〔江談抄〕

二兼明、佐理、行成等、同手書事

〔入木抄〕

一入木道の一流、本朝は異朝に超たる事

略○上 聖廟以後小野道風相續す、此兩賢は、筆跡相似たり、佐理、行成は、道風か跡をうつしきたる、野跡、佐跡、權跡、此三賢を末代の今にいたるまで、此道の規模としてこのむ事、面々彼遺風を模也、仍本朝の風は不相替者也、一本朝筆法一跡なれども、時代に付て、筆跡分明事

〔槐記〕

享保十二年丁未八月十二日、○中不圖仰ラル、ハ、大事ノ故實アリ、教ユベシ、世ニ佐理、道風、行成ヲ三跡ト云、此三跡ノ字ハ、モト御堂殿へ渡御ノトキヨリ、初テ云習ハセシコト也、此トキ御堂殿ノ献上ニ、佐理ト道風ト

ノ筆跡ノ卷物ヲ獻セラレシカ、今一卷ヲ行成ニカ、セテ、梅ノシモトニ付テ上ラレシヨリ、世ニ此ヲ三跡ト云シコト、御記録ニアリ、

〔政事要略〕

二二十二年、○中行事、二八月、上 余寛弘四年出爲河内守、五年九月五日、住大縣郡普光寺、僧幡慶語云、爲无依怙、欲住高野、未遂本意之間、夢詣彼高野之處、有一宿德僧、居倚子曰、吾弘法大師是也、○中菅丞相者我違世之身、野道風者我順世之身、○中大師才智勝世、草隸得功、丞相足才智、道風善草隸、稱於後身、是尤有感者、

〔歷代編年集成〕

十五醍醐天皇、（延喜五年）同年、小野道風生、太宰大貳 遍昭金剛示曰、我依好文、生菅丞相、我依好筆、生小野道風、

〔本朝神仙傳〕

○中 弘法大師、○中 帝都南面三門并以應天門額、大師所書也、○中 朱雀門額又有精靈、小野道風難之曰、可謂米雀門、夢有人來、稱弘法大師使、○中 弘法大師、○中 踏其首、道風仰見、履鼻入雲、不見其人、

〔古今著聞集〕

大内十二門の額、南面三門は弘法大師、○中 勅をうけ給て、垂露の點をくたしけり、○中 まことにや、道風朝臣、大師のかゝせ給たる額を見て、難していひける、美福門は田廣し、朱雀門は米雀門と略頌につ

康保三年十二月二十七日

七七九

道風ハ空  
海順世ノ  
身ナリト  
ノ説

空海筆道  
ヲ好ムニ  
依リテモ  
風ニ生ル

道風空海  
筆朱雀門  
ノ額ヲ難

美福門  
ノ額ヲ難  
トノ説



中風ニ羅  
ズトノ風  
ノ變說

空海筆大  
極殿ノ額  
ヲ難ズト  
ノ說

顛筆自ラ  
一ノ體ヲ成  
ストノ說

書蹟  
内裏ノ額

康保三年十二月二十七日

七八〇

くりて、あさけり侍ける程に、やかて中風して手わなきて、手跡も異やうに成にけり、

〔源平盛衰記〕四 大極殿燒失事

嵯峨帝ノ御時、空海僧都勅ヲ奉テ、大極殿ノ額ヲ被書タリ、小野道風見之、大極殿ニハ非、火極殿トソ見エタル、火極トハ火キハマルト讀、未來イカ、有ヘカルラン、筆勢過タリトソ笑ケル、去ハニヤ、(安元三年四月二十八日)今カク亡ヌルコソ淺増ケレ、

〔太平記〕十二 大内裏造營附北野天神事

略上(空海)高祖大師是ヲ鑒テ、門々ノ額ヲ書セ給ヒケルニ、大極殿ノ大ノ字ノ中ヲ引切テ火ト云字ニ成シ、朱雀門ノ朱ノ字ヲ、米ト云字ニソ遊ハシケル、小野道風是ヲ見テ、大極殿ハ火極殿、朱雀門ハ米雀門トソ難シタリケル、大權ノ聖者未來ヲ鑒ミ書給ヘル事ヲ、凡俗トシテ難シ申タリケル罰ニヤ、其後ヨリ道風筆ヲ執ハ、手戦テ文字正シカラサレトモ、草書ニ妙ヲ得タル人ナレハ、手戦テ書ケルモ、却テ筆勢ニソ成ニケル、

〔夜鶴庭訓抄〕一内裏額書たる人々略中

又内の額書人々、

道風内藏頭

皆有勸賞、

〔榮華物語〕はつ花 かくて、かんの殿(皇子)春宮に參らせ給はん事もいとちかうなりて、急きたせ給にたり、略中その御くどもの屏風は、ためうち、つねのりなとかききて、道風そしきしかたはかきたる、いみしうめてたしかし、

そのかみの物なれど、たゞいまのやうに、ちりはます、あさやかにもちゐさせ給へりしに、略下

〔玉蘂〕御所藏 曆仁元年三月十四日、己丑、晴、攝政姫君百日也、於予亭可有此事、略中

垂母屋御簾、立亘四尺屏風、件重寶也、予案此事、時代頗相違若、(傳孝)筆數

〔藤原行成筆白氏文集〕御所藏 御所藏宮  
保延六季(別筆)庚申十月廿二日、辰刻、物賣女自蓬門入來、賣手本二卷、一卷野道風

宮内權大輔定信本也、

件女人宅、自鹽小路北、自町尻西、町尻面之辻内有、在俗經師云々、件經師之妻也、

康保三年十二月二十七日

七八一

屏風色紙

屏風土代



康保三年十二月二十七日

七八二

位記本

〔山槐記〕

永曆元年十二月五日、己酉、天晴、未刻、向<sup>(公鹿)</sup>右大臣亭、○中被取出手本、一合被見予、神妙物等也、道風銀泥經、位記本、○中也、○中道風位記本、<sup>(補仁親王)</sup>本云々、<sup>(中)</sup>略、○中覽申請了、令寫取也、

慈覺大師傳

〔慈覺大師傳〕

奉送<sup>(崇孝)</sup>慈覺大師御傳一卷、○中略、

右傳、故寬平入道親王所撰也、○中筆削未畢、奄然寂滅、遺誠右近中將從四位上兼伊豫權守源朝臣英明日、○中汝須成吾所志、奉附座<sup>(尊意)</sup>主閣梨蒙教之後、艸藁早就、即令內藏權助從五位下小野道風書之、○中敬以奉送如件、

天慶二年十一月三日

從四位上右兵衛督源朝臣庶明

〔榮華物語〕

御著裳<sup>(賴子內親王)</sup>

一品宮の御をくり物に、しろかねこかねの御はことにも、貫之かてつからかきたる古今廿卷、<sup>(兼明親王)</sup>みこひたりの書給へる後撰廿卷、道風かかきたる万葉集などを、たてまつらせ給ける、世になうめてたきものごと也、

萬葉集

〔萬葉集〕

文永三年本奥書

○上愚老年來之間、以數本比技之處、異說且千也、其中於大段不同、有三種差略、

別、○中次歌詞高下不同者、○中道風、行成等手跡本、同以詞舉歌下、○中三假名離合不同者、○中道風手跡本、假名歌別書之、○中略、

文永三年歲次丙寅八月廿三日

權律師仙覺記之

〔安元御賀記〕

六日<sup>(安元三年三月)</sup>けふは後宴なりとて、

○中<sup>(平徳王)</sup>中宮の御方の送り物に、道風か書たる古今<sup>(かんた)</sup>を奉らせ給ふ、

古今集

新樂府

〔爲房卿記〕

寬治元年五月廿一日、壬申、○中<sup>(白河)</sup>院午後還御、○中<sup>(藤原)</sup>殿下被奉御送物、<sup>(中)</sup>道風樂府本二卷、納銀<sup>(略)</sup>、

〔參語集〕

古今凡聖物語等、覺寬法印事

承久之比、或人道風カ手跡ノ樂符ヲ、不思懸賣テ來ヲ、圓樂寺覺昭買取之テ、祕藏シテ持タルヲ、覺寬様々ニ懇望シ取テ、美麗ナル箱ヲ結構シテ、摺螺リ詩繪ヲシ、金ノ口ヲ置テ、彼樂符ヲ此箱ニ納レテ、進持明院法皇、定預勸賞アランスラント思儲タル所ニ、法皇御覽シテ、無一言之御叡感シテ、覽アリテ、此ハ朝ノ寶也、何ニシテ直也人ハ可持ソ、累代ノ寶藏ナント破リテ、盜取物也、尤爲傍輩向後、可有罪科之由、有御沙汰ケレハ、人々種々ニ申諫テ、無爲無事ニナリニケリ、向後可有留意事也ト云々、

康保三年十二月二十七日

七八三



康保三年十二月二十七日

七八四

〔寬永行幸記〕

十日、（寬永三年九月）中御馬引畢而御手本、道風新樂府、入梨地、打枝、中院中納言（中納言）略、於南之簾外披露之、

〔新樂府〕

○文化十年撰勒本

本邦之善書者、弘法大師以降、以野公爲翹楚、惜乎真蹟之存者幾乎亡矣、坊間所刻、贗者十八九、獨新樂府帖、先輩以爲法書第一、然摹手不一、運筆每失真矣、余見華山藤公（安徳）所藏雙鈎極精妙、嗚呼真蹟不可見、幸存此本、足以窺撥鐙之妙焉、屬者村上生懇請公左右、將上之梓、屬余摹勒、因書梗槩、以跋其尾、

湘南源易（源易）

〔集古帖〕

四 小野道風書

玉泉南澗花奇恠

○中略、白氏文集三十一所載ノ詩四首ヲ書ス、

以是不可爲褒貶緣、非例體耳、

（草名）

○草名、御物原本ナシ、後人ノ攙入シテ、道風ノ草名ニ擬セシモノナラシ、

玉泉帖、龍君王既勒而行之、其跋曰、得摹本於坊間、未知原本所存、

〔玉葉〕

文治三年八月廿一日、己丑、晴、此日長者以後、始參平等院、○中略故殿保元度、被納道風香爐峯本、

〔看聞日記〕

應永廿四年五月二日、晴、（田向經良）三位出京、鹿苑院爲使參、室町殿進物御

玉泉帖

香爐峰本



...  
...  
...

冷  
...  
...

宿天竺寺迴

野寺經之宿都城

...  
...  
...

...

如  
...

...  
...  
...

...



玉泉南沼老亭地不

是仙志氣似火堆今日

多情止我封年

無之故

寧辭辛苦行三

里更占領連飲

查初

下

舞

山

采及燕平泉回

早夏日初長南風

草木香肩興願

極潤路甚清涼



蘇詩看稼

柱橋

凱

冷

宿天竺寺迴

野寺經之

家

娘姑

湖

沈

中

道

侍中

詩



四初有結了世佳  
真之氣結書白

昔蒙師母化地

道之妙結之潭

占初氣數但無

中身見之之榮積

安敢道相且勿集

名途才也人

功會山結之集

至中院風結之集

力出如初破之集

如回

此世心方不物北

結



手本一卷、野跡、時表紙青絹雲淡、水精軸、後光副愚狀鹿苑院遣之、

〔實隆公記〕延德二年閏八月十五日、乙丑、天霽、竹園古筆橫一合返上之、目錄

注左、隨分至寶也、○中

一裹 野跡十卷、此內寫古文字一卷、○中

以上

此內權跡二卷、野跡二卷、爲寫置申預之了、

十一月七日、乙未、○中今日權跡二卷、野跡古文字一卷、以上三卷、令返上竹園了、

〔慶延記〕三下醜酬雜事記三 一三昧堂一字、○中

又帝御筆金泥法花經員四卷、又御持經法花經一部、道風自筆、同奉安置之、

〔殿曆〕康和五年三月三日、壬午、○中橫川禪子覺澄道風自筆妙法蓮華經一

部奉渡、神妙第一者也、

〔台記〕久安四年八月三十日、乙酉、寅時有最吉之夢、記別紙定知春日及南圓堂

祈靈驗、○註因之獻道風手跡妙經於春日、

〔百練抄〕八高倉院 安元二年八月十一日、高倉主上始令寫妙經給、○中御本道風

筆、色々色紙墨字云々、



康保三年十二月二十七日

七八六

〔實隆公記〕延德二年八月十六日、丙申、今日竹園古筆諸經共、先日可拜見之由、被仰下之、借預之間今日返上之了、目錄如左、

諸經目六略○中

法花經一卷道風不足

同 一卷 道風、寫本、

〔玉葉〕文治三年八月廿一日、己丑、此日長者以後始參平等院、○中次余實余施入

道風筆金光明經四卷、加映其上以檀紙二枚卷之、件檀紙聊注付施入之由了、

略○中 件經臨期召取之、宗賴朝臣持參之

文治三年八月廿一日、初參平等院、開經藏之次、施入小野道風筆金光明經一部四卷了、

攝政 在御判

金光明經

〔殿曆〕嘉承二年十月十一日、癸亥、天晴、今朝依召、道風自筆經一部進院、白河但經非

似實道風殿、不御堂本、

〔叡嶽雜記〕前唐院

第一御厨子寶物實錄略○中

小宮一合略○中

道風消息一通

〔御堂關白記〕寬弘元年八月廿三日、乙亥、○中 春宮女一宮御著袴、○中 事了

賜祿物、○中 余本宮二合、入道風手跡、

十月十八日、戊戌、右大辨借々名本七卷、道風二卷、

寬仁二年十月廿二日、辛亥、此日土御門行幸、○中 次獻御送物、藤原教通左大將取本御

筥、入道風二卷、皆裏村濃薄物、付銀枝

〔小右記〕寬弘二年二月九日、丁亥、大貳藤原高遠隨身愛子九歲、被過、志與道風手跡一卷、

一卷、

三月廿一日、己巳、○中 左兵衛督藤原兼平隨身愛子小童、助命、與道風手跡一卷、

四月十七日、甲午、○中 左金吾愛子金石送之、○中 與道風手跡一卷、

〔權記〕寬弘三年正月九日、壬子、拂曉自寺參左府、行幸送物料六帖、道風書

二身奉之、

五年十月七日、癸亥、○中 又參東宮居貞親王權大夫奉書二卷、一野道風奉書

八年八月十二日、癸丑、○中 殊獻○中 書法六卷、納言沉宮二合、書三卷、

康保三年十二月二十七日

七八七

消息

雜蹟



廿三日、甲子、○中亥刻小童（藤原家忠）加首服、○中尊者祿予取之、劔并本筥左馬頭、相尹、權左中辨（經通）取之、○中書法二卷、（一卷道風手）以青羅爲表紙、唐組紐、紫檀軸、納沉木螺鈿筥、

〔榮華物語〕

十一み花 ○上略藤原穆子、禎子、内親、御をくり物には、○中又みちかせか本（つほ）なごいみしきもの、しろかねこかねのはこに入たるなどを奉らせ給へる、

〔帥記〕

承曆四年八月廿日、庚戌、○中別當參會、見參之次、申云、○中爲開仁和寺倉、所罷向也、有頃別當相共向寺、○中使恩紹先開南倉、取出鑑筥并寶倉目錄等、○中僧都云、此目錄中、有道風書、（菅家被加御名字、已以紛失歟）

〔後二條師通記〕

寛治二年正月廿一日、己巳、○中參前齋宮御方、中門申慶畢、贈物御文一卷、道風本也、

〔永昌記〕

長治二年正月五日、甲戌、天晴、行幸太上皇宮、○中御送物右大將取之、（道風手、入銀筥、以錦裏、自簾中女房被出之、筥裏、浮線綾、持參御前、）

〔殿曆〕

天仁二年九月六日、丁未、天晴、今日上皇御幸高陽院亭、○中次御送物、○中御本、（道風、納沉地螺鈿筥、付銀菊、枝新藤、中納言宗忠取之、）

〔玉葉〕

承安二年七月廿一日、戊子、○中今日攝政若君被參女院、○中有贈物、手本、（道風手、入銀筥、以錦裏、自簾中女房被出之、）

〔玉藥〕

曆仁元年正月廿日、是日小童（攝政）始入別當僧正室、○中小童贈物手本、（道風、三位僧都賢信取之、）

〔園太曆〕

貞和三年正月廿六日、○中抑今日東宮御書始也、○中事了於總角、（東宮御書始事）所有御手習事、○中兼居御硯文臺、其上續高檀紙二枚置之、又御本同置之、件御本野跡也、（兼事）傳被進之、（通冬、卿記）

〔大乘院寺社雜事記〕

三十 文明元年六月十九日、○中西屋經藏二行向、令開寶藏了、○中拜賀寶物者、○中道風筆、

〔實隆公記〕

大永七年三月廿八日、乙巳、○中唐墨一廷、野跡真本一昏、遣清澤願得寺、

〔徒然草〕

或者小野道風の書る和漢朗詠集とて持たりけるを、有人御相傳うける事には侍らしなれども、四條大納言撰れたる物を道風かゝん事、時代やたかひ侍らん、覺束なくこそといひければ、さ候へはこそ、世にありかたき物には侍りけれとて、いよく祕藏しけり、



庚保三年十二月二十七日

七九〇

〔台記〕 久安三年五月廿七日、己丑、中略 召大外記師安、仰可見所在外記局之神筆、北野之由、

六月十二日、甲辰、中略 入外記局、中略 先之、自文殿出神筆、納函、以函納厨子、乍師安申曰、略、中又曰、古人傳曰、此神筆不異道風手跡、但文書無所見、余問似否於定信、 々々曰、頗似、于時公親朝臣曰、道風手書相具參入者、即校之、相似、就中彼此共有高字、校之全同、余問定信曰、似生存御手書乎、答曰、不似、師安曰、尹良謂、北野者弘法大師後身、道風者北野後身云々、定信曰、神筆出現正曆四年、見府是則道風死後及五十年也、

〔吉部祕訓抄〕

四院令渡取給事 自

建久二二廿一經房記云、先參院、中略 棟範

朝臣談云、在外記局北野天神御筆、昨日奉渡、令留御畢、伴御筆者、暗以飛來詩也、爲道風之手跡、奧兩三字爲他筆、若是天神御筆、歟、誠希代之表示也、納相小辛櫃、彼時御位記等納加之、仍彼御神筆、納文箱、厨子中構棚奉置之云々、去治承之比、被奉置蓮花王院寶藏、而依非禮有沙汰、被返納彼局畢、重猶被召之條、神慮有恐、尤以不便也、

〔北野天神緣起〕

一條院御宇に、正二位從一位左大臣の官位をは送り奉り

天ノ神託宣  
神道風  
詩道風  
筆跡風  
同ノ

天ノ神衆合  
地獄ヨリ  
道風ヲ  
出シテ  
文ヲ書カ  
シムト  
説ム

給、かの位記、詔書等、勅使菅原幹正、正曆四年八月十九日（明七）に、太宰府に下付、廿日未時、安樂寺に参りて、御位記の箱を案上に指置き、再拜してよみ給しに、ひとつゝの絶句の詩の化現し侍りしを、第一の不思議とおほへておそろし、忽驚朝使排荆棘、官品高加拜感成、雖悦仁恩覃邃窟、但羞存没左遷名、件正文は、外記局に納られて、けふまで侍るなり、道風か筆跡に少もかはらさりけり、弘法大師の菅丞相は我違世の身なり、野道風は我順世の身なり、と示し給たるも、是にてを實事と覺ゆる、○古事談、歴代編年集成等、異事ナシ、

〔北野天神御緣起〕

同五年、相連正一位太政大臣賜給、略、中 此書天神御意和

御坐、衆合地獄冥官被召出小野道風、御請文被書、昨爲北闕被悲士、今作西都雪恥尸、生恨死歡其我奈、今須望足護皇基、爾被遊在、内裏候在女房被見夢者、菅丞相贈大相國請文、爲撰手跡、自衆合地獄道風召出書進也、略、中 疇昔道風之書、靈物共引合、叡覽有一字一點、墨色不違、哀事共哉、御衣袖瀾計也、内藏寮被仰付、爲一具、御庫被籠置在、

〔撰集抄〕

八 直幹流罪、依天神勅有御優免事

庚保三年十二月二十七日

七九一







強ケレド  
モヤ、俗

屏風書法  
筆ニ任セ  
テ書ス

初重ノ一  
霞

愛敬ノ點

貫花文

康保三年十二月二十七日

七九四

失有也、道風は強く書て少し俗道なり、強きは徳、俗道は失也、佐理はやさしくしてよはし、やさしきは徳、よはきは失也、行成は打付に愛敬有て、手の少し正念なき也、愛敬は徳、無正念は失也、略中  
一 屏風書寫などは、子細有事也、道風の筆をみしか、綾の屏風に、大きらかなる下點をしたりしに、頭をさしつとへて、只行草に筆に任せて書りと見ゆ、大躰此躰無有なり、

〔筆法才葉集〕

一 略中 消息ヲハ、三霞ニ三重ヲ能々意得テ可書也、三重トハ、

一ニハ道風、二ニハ行成ノ筆跡、三ニハ佐理ノ筆法、已上三人末代ノ鑑ニテ、此三人ヲ上中下ニ當習也、是能々可祕々々、凡道風ハ極テ俗ニ近クシテ、文字體ニクケニ、而モ強ク書レタリ、譬へハ鎧著タル武者、心剛ニシテ、何ニ當テモ更ニ退クマシキカ如シ、是初重ノ一霞ニ當レリト、是ヲ上ト云、略中 サテ道風、佐理、行成三賢ノ筆法ハ、教長ノ傳也、略中  
一 略中 道風ハ愛敬ノ點ナリ、行ノ物ノ中ニ真行アリ、草ノ物ノ中ニ、或ハ行ヲ書給ヘリ、

〔新猿樂記〕

大郎主者、能書也、略中 道風之貫花文、略中 皆悉莫不習傳、

〔集古浪華帖〕

二 小野道風朝臣書

逆風下草名同シ

謹言、彼位祿符、若被賜貴署歟、亦今日參法性寺たまふらん、位祿符いかて早催賜らん、依此不遣使者也、諸自以聞、忿々不具、謹言、

八月十五日

内藏權頭ノ(草名)狀

謹上 右中辨殿 政所

瀧口平恆  
倫ノ男ノ  
元服ノ料  
辨某ニ乞  
フ

道風ノ消  
息  
右中辨  
ノ位祿符  
署ヲ請

(草名)謹言、候瀧口平恆倫相知侍、其子大和御靈會奉仕侍けるを、極辱御服元しゑ、さて、宿御衣、下襲、表袴等若有恩願乎、他童達依駒牽、可無閑暇、其期今月廿七日者、此事極無心、悚恥々々、諸自以啓、忿々不具、謹言、

九月廿七日

内藏權頭ノ(草名)狀

謹上 右中辨殿 政所

(草名)謹言、夜部所勞侍、不能參入、今朝營參間闕怠、悚恐無涯、心神如春、萬事啓無益、以貴息賢郎爲證、千万恥辱、(草名)謹言、

十二月廿三日

内藏權頭ノ(草名)狀

康保三年十二月二十七日

七九五



康保三年十二月二十七日

七九六

謹上 播磨介殿 政所

家中重病者有リ

(草名)謹言、從去月重病者提歎侍、經數日甚以慾烈、不覺他事、日夜歎悲侍、昨今頗似散病氣、のれと猶無頼、平損たたくを侍る、辱枉恩問、甚慰愁腸、諸自以啓、恐々念々謹言、

即日

內藏權頭(草名)狀

老身無常ヲ歎ズ

世間はゐなま乎承侍る、まいて極老身、曉夕いとあやしくなん侍、謹言、

(草名)謹言、昨適參入内之比、奉御假由、鬱懣申給侍、甚候近程不聞承、返々恐言侍、深□被恩顧、不能參謝、日夕悚歎申給侍、伏賜悉之、幸甚々々、委曲自啓、謹言、

五月廿八日

老末(草名)狀

謹上 頭殿 政所

近江返抄

(草名)謹言、久不能奉拜、悚鬱々々、但祭御料遣江州返抄、被勞給如何、惣今月料同以勞賜、依難參拜、所修達也、恐々恥々、謹言、

十二月九日

老末(草名)狀

謹上 頭殿 政所

左京亮某ヨリ馬ヲ贈ラシ、ヲ謝ス

(草名)謹言、一夜欲參候之間、早承歸駕之由、悚鬱罔彊、伏賜恩察、幸甚々々、亦御馬恐悅、非拜難謝、竄垂照悉、尤所望已、諸在參謝、不宣謹狀、

二月廿日

右衛門佐(草名)狀

謹々上 左京亮殿 政所

(草名)謹言、今朝他行之間、辱賜御馬、恐幸兼半、抑承所勞之由、不能參聞、悚鬱々々、醫家所申如何、念劇之比、自致缺懈、戰慄々々、諸在參謝、不具謹狀、

八月十五日

右衛門佐(草名)狀

謹々上 左京亮殿 政所 謹言

官符ニ依リ下向ノ亮某ニ馬ヲ乞フ

(草名)謹言、適官符出來、仍以十日拂曉、可罷下、彼御馬給及深所望也、辱達細事、悚恐自察、諸念々不具、謹狀、

康保三年十二月二十七日

七九七



康保三年十二月二十七日

七九八

九月六日

右衛門佐(草名)狀

謹々上 左京亮殿 政所

大宰大貳  
某ニ物ヲ  
贈ル

(草名謹言、此物所充如此、且爲令御覽、謹以奉入、令求遺賜、諸不詳啓、恐々謹言、

二月廿八日

老僕(草名)狀 上

謹上 大貳殿 政所

追言、此事若有物聞者、極可不便、謹言、

(草名謹言、伏奉恩命、幸甚再拜、慈念之深、不可奉忘、見世後生、筆墨流俗也、自以  
參謝(草名)謹言、

即日

下(草名)狀 上

〔勅撰作者部類〕

自帝王至  
庶人之部

道風 四位大貳小  
野葛絃男

後撰集 秋上、一、戀四  
戀五、四

〔後撰和歌集〕

戀十二  
戀四

うつまさわたりに大輔か侍けるにつかはしける、

小野道風朝臣

限なく思ひいり日のともにのみ西の山へをなかめやる哉

歌什  
大輔ト贈  
答ス

道風しのひてまうてきけるに、おやき、つけてせいしければ、つかは  
しける、 大輔

いごかくてやみぬるよりはいなつまのひかりのまにも君をみてしか  
しのひてまかりけれど、あはさりければ、

道風

なにはめにみつとはなしにあしのねのよのみしかくてあくるわひしさ

物いはむとてまかりたりけれど、さきたちてむねもちか侍ければ、は

やかへりねといひいたして侍ければ、

かへるへきかたもおほえす涙河いつれかわたるあさせなるらん

返し 大輔

涙河いかなるせよりかへりけんみなる、みをもあやしかりしを

〔古今和歌集註〕

○十三 戀歌三  
京都帝國大學所藏

ラ歟

ヤヨヒノツイタチニ、シノヒニ人ニモノヲイヒテノチ、アメノソヤフリ

ケルニ、ヨミテツカハシケル、

略○上 道風カヲンナノモトニツカハセルフミニ、イアユフサリアイリコン

女ニ消息  
ス

康保三年十二月二十七日

七九九



康保三年十二月二十七日

八〇〇

クハシキコトラハ、アノアタリニナソモトカキタリ、

〔本朝書籍目録〕

傳記 道風

一卷

〔看聞日記〕

應永廿三年十一月一日、

略中繪書僧在此邊之間、小野道風影本

筆法橋壽云々、令寫之、脇繪山水一對、同令書、馳筆書之、無相違筆者也、

〔小野道風畫像〕

太郎男爵益田所藏

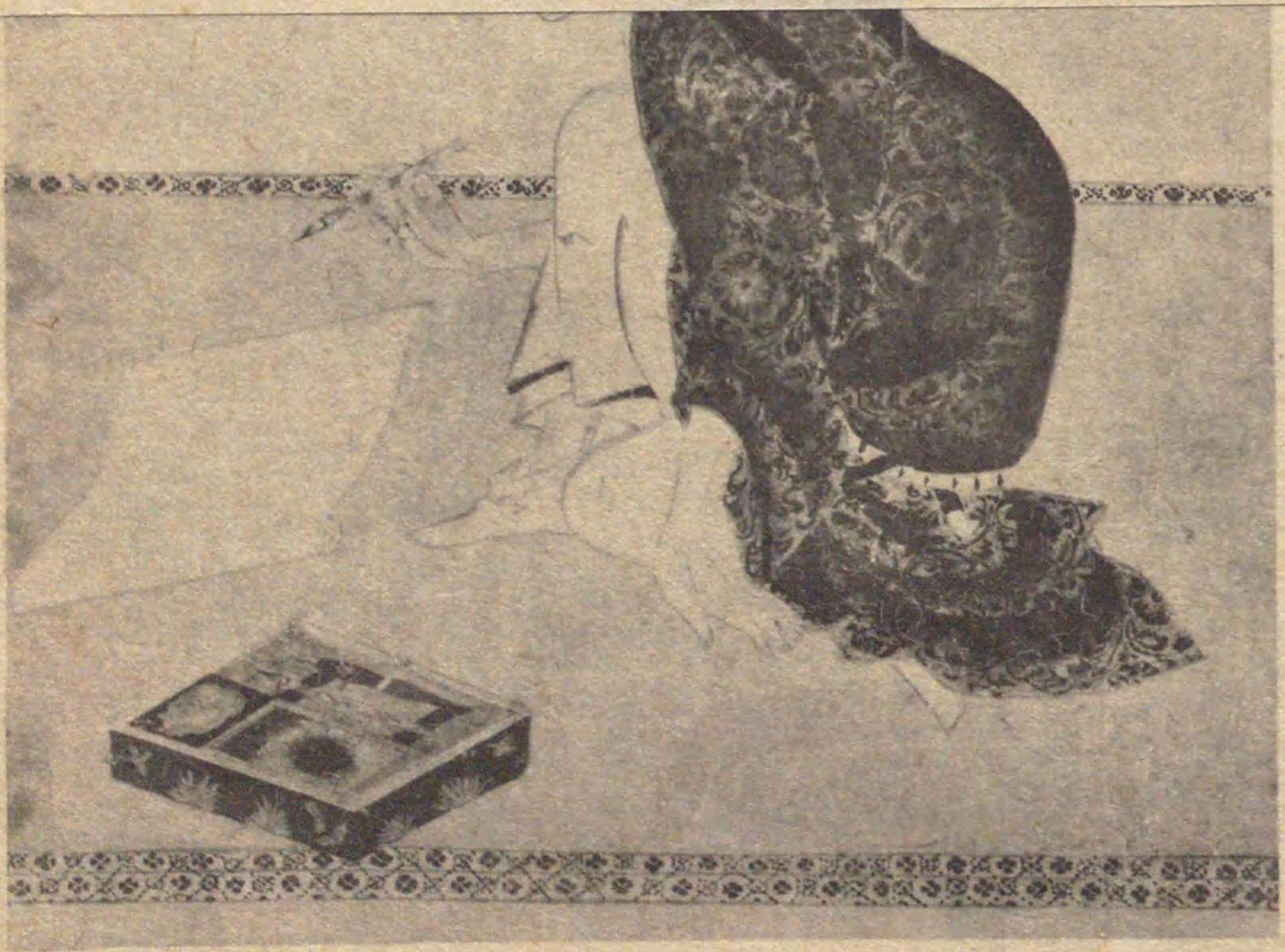
小野舉時  
筆ト稱ス  
ル道風肖  
像

木工頭會小野朝臣道風之肖像、父大内記小野朝臣マ舉時所拜寫之也、故以曾祖  
父道風朝臣之詠詩書之、安于當院、

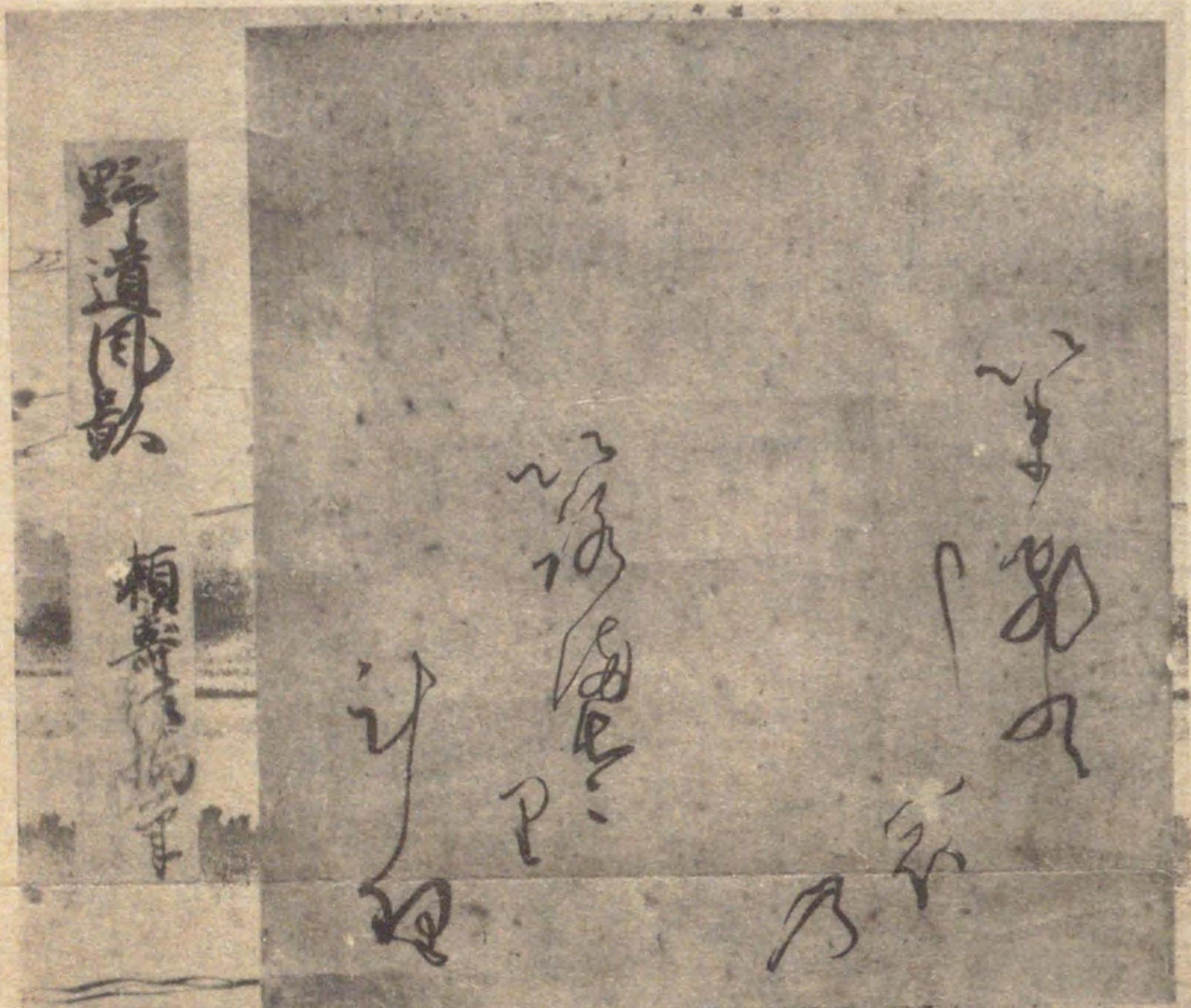
于時永承三年十一月十一日

天台座主、明尊花押

○道風、醍醐寺ノ門額ヲ書スルコト、延喜七年是歲ノ條ニ、贈皇太后胤  
子ノ御爲メノ御法會ノ御願文ヲ清書スルコト、延長三年八月二十三  
日ノ條ニ、醍醐寺釋迦堂ノ額ヲ書スルコト、同四年十二月二十八日ノ  
條ニ、藤原清貫六十賀ノ經文ヲ書寫スルコト、同五年二月二十五日ノ  
條ニ、圓珍ニ賜フ謚號勅書ヲ清書スルコト、同年十二月二十七日ノ條  
ニ、增命ニ賜フ謚號勅書ヲ清書スルコト、同月同日ノ條ニ、賢君明臣ノ  
德行ヲ清涼殿南廂ノ壁ニ書クコト、同六年六月二十一日ノ條ニ、醍醐







頼壽筆小野道風肖像 御物

御物

原寸

縦 〇七二  
横 〇二九



康保三年十二月二十七日

クハシキコトラハ、アノアタリニナソモトカキ

〔本朝書籍目録〕

傳記

道風

一卷

〔看聞日記〕

應永廿三年十一月一日、

略 中 繪書僧

壽法橋

筆云々、令寫之、脇繪 山水、一對、同令書、馳筆書之、無

〔小野道風畫像〕

太郎男爵益田所藏

木工頭

小野朝臣道風之肖像、父大内記小野朝臣

父道風朝臣之詠詩書之、安于當院、

于時永承三年十一月十一日

天

○道風、醍醐寺ノ門額ヲ書スルコト、延喜七

子ノ御爲メノ御法會ノ御願文ヲ清書スル

日ノ條ニ、醍醐寺釋迦堂ノ額ヲ書スルコト

條ニ、藤原清貫六十賀ノ經文ヲ書寫スルコ

條ニ、圓珍ニ賜フ謚號勅書ヲ清書スルコト

ニ、增命ニ賜フ謚號勅書ヲ清書スルコト、同

德行ヲ清涼殿南廂ノ壁ニ書クコト、同六年

小野舉時  
筆下稱ス  
ル道風肖  
像

道風傳  
頼壽筆道  
風肖像



康保三年十二月二十七日

クハシキコトラハ、アノアタリニナソモトカキタリ、

〔本朝書籍目録〕

傳記 道風

一卷

〔看聞日記〕

應永廿三年十一月一日、

略中繪書僧在此邊之間、小野道風影頼本

筆壽法橋云々、令寫之、脇繪山水一對、同令書、馳筆書之、無相違筆者也、

〔小野道風畫像〕

太男爵益田郎氏所藏

木工頭小野朝臣道風之肖像、父大内記小野朝臣（マ）時所拜寫之也、故以曾祖  
父道風朝臣之詠詩書之、安于當院、

于時永承三年十一月十一日

天台座主、明尊（マ）（花押）

○道風、醍醐寺ノ門額ヲ書スルコト、延喜七年是歲ノ條ニ、贈皇太后胤  
子ノ御爲メノ御法會ノ御願文ヲ清書スルコト、延長三年八月二十三  
日ノ條ニ、醍醐寺釋迦堂ノ額ヲ書スルコト、同四年十二月二十八日ノ  
條ニ、藤原清貫六十賀ノ經文ヲ書寫スルコト、同五年二月二十五日ノ  
條ニ、圓珍ニ賜フ謚號勅書ヲ清書スルコト、同年十二月二十七日ノ條  
ニ、增命ニ賜フ謚號勅書ヲ清書スルコト、同月同日ノ條ニ、賢君明臣ノ  
德行ヲ清涼殿南廂ノ壁ニ書クコト、同六年六月二十一日ノ條ニ、醍醐

道風傳  
頼壽筆道  
風肖像

小野舉時  
筆ト稱ス  
ル道風肖  
像

像 御物 原寸 縦〇七一二 横〇二九一



相傳  
道風  
筆  
道風  
肖像



自署

天皇皇子ノ御著袴料ノ屏風ヲ書スルコト、天慶元年十一月五日ノ條  
ニ、忠平大饗ノ祿使ト爲ルコト、同二年正月四日ノ條ニ、橘直幹ノ申文  
ヲ清書スルコト、天曆八年八月九日ノ條ニ、坤元錄ノ屏風ヲ書スルコ  
ト、同十年是歲ノ條ニ、右大臣師輔ノ大饗料屏風ヲ書スルコト、天德元  
年正月十四日ノ條ニ、藻壁門ノ額ヲ書スルコト、同三年五月七日ノ條  
ニ、師輔ノ障子ニ書スルコト、同年年末雜載、諸家ノ條ニ、内裏殿舍諸門  
等ノ額ヲ書スルコト、應和元年三月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔集古浪華帖〕

二

小野道風朝臣書

十二月二十三日消息

内裏障子ノ  
海女

康保三年十二月二十七日

八〇一



康保三年十二月二十七日

有以之... 提款... 乃... 侍... 之... 何...

〔麒麟抄〕

康保三年十二月二十七日

六 一道風者尾張國土條ニシテ生レ給ヘリ此人ハ右京大夫葛

賜... 乃... 昔... 乃... 乃...



同胞皆能  
ノ書ナリト

康保三年十二月二十七日

八〇四

河内道明  
ノ寺ニ墓アリト

王羲之  
ノ筆法ニ肉  
ヲ加フト

綾子息也、嫡子道風、次男元風、三男伊風、女子一人アリ、何モ手書也、其中以道風爲第一、其故ハ、夢ニ菅大臣ヲ見奉テ、道風カ筆藝者既ニ叶ヘリトソ、佛説ニ虚空ニ聲アリテ、天人來テ告給ヘリ、爰延喜ノ御門之御時、右京大夫ヲ被召、汝カ子手ヲ書之由聞食、是ニ一筆カ、セヨトテ、團ヲ一本給テ、道風ニカカス、其文云、我遣三聖化彼震旦、禮義先開大小乘經、此團我獻帝、叡覽後、打置給、右京大夫我宿所へ歸ル、何成叡覽ソト親ニ問ヘハ、何ト云御愛モ無ト云、其團ヲ申出シテ給ラント云、父申出シテ子ニトラス、其團之裏ニ書ク、其ニ云ク、我ハ晉ノ王羲之カ筆ヲ傳テ學ヘリ、恐ハ帝何ソ達筆藝乎ト書テ進上ス、或時ニ御門ハ此團ヲ叡覽アツテ、御涙ヲ流シ、大ニ恥給フ、河内國ヲ給テ、既殿上ノ交ヲ免シ給、而ニ日本ノ山河草木ノ姿ハ和ナル故ニ、其ニ似タルアイタ、羲之カ手ニ肉ヲ懸テ、道風ハ書給ヘリ、雖然羲之カ所定ノ筆法ニ不替也、名ヲハ野公共、野道風共云、彼道風ハ記文云、前身者聖德、聖武、後身者野道風、菅大臣、鎮西天神御詫宣、爲弘佛法、現弘法大師、爲弘手跡、現野道風、爲弘文書、現菅丞相、皆是三身一體也、○中略一菅丞相未被流給前ニ、河内國道妙寺ニシテ、申狀之爲清書、道風之墓ニ向

二生三  
ノ説

テ、道風ヲ呼給、其時童子一人ヲ具シテ、冥途ヨリ來テ、申狀ヲ清書云々、瓦硯ヲ持來、菅大臣不思議ニ思食テ、頻ニ此硯ヲ乞留メ給フ、是ハ爲末ナリ、或人ノ云、菅丞相ハ延喜三年二月廿五日、生年五十九ニシテ、安樂寺ニシテ薨シ給フ、道風ハ延喜四年ニ生給、前後相違如何、按、道風、別書、寛平五年卒、七十一トアリ、一説、延喜五年生、云々、諸書皆康保三年卒、與、答云、道風ハ二度出世也、異本者三度也、二度ノ時者、始ニハ吉里、後ニハ野道風、三度ノ時者、小野大臣、中比ニハ篁吉利道妙ト云、後ニハ道風ト云、是其故ハ宇治ノ寶藏ニ三形ノ御影アリ、

〔鹽尻〕十五 小野道風 ○中略春日井郡松河戸村の村民傳云、松河の里は道風の生れし地なりと云云、

〔梅園叢書〕上 學に志し、藝に志す者の訓

○上小野道風は、本朝名譽の能書なり、わかゝりしとき、手をまなべども、進ざることをいとひ、後園に躊躇けるに、臺の泉水のほとりの枝垂たる柳にとびあがらんとしけれども、とどかざりけるが、次第く高く飛て、後には終に柳の枝にうつりけり、道風是より藝のつとむるにある事をしり、學

康保三年十二月二十七日

八〇五

慕ノ著クニ  
跳ビテ發  
ヲ見テ



てやまず、其名今に高くなりぬ、

〔曼殊院文書〕〇六 山城 手跡習學系圖

義之

道風

奉時

〔增補新撰古筆名葉集〕筆道流儀分

大師流空海

上代流貫之、道風、

法性寺流忠通公、

〔玉章祕傳抄〕下 一 略 〇 中 血脈ニ云、本□漢周義之、蒼頡、梵雲入、大日所生、釋

字々々、阿、日本、理、小野道風、佐、卿、行、成、卿、以上十一人、奉加弘法大師、號十二人也、

〔遊學往來〕下 日域聞仁者、天曆年中、村上天皇御宇、木工頭小野朝臣道風

者、成十八形圖、所謂鳥相、蛇形、枯松立、獅子尾、垂露、下藤上、雲出、雨足、鷹飛點、仁

足、龍走、木折點、高峰墜石、亂草、落玉點、月輪、方丈、人頭等點也、往來ヲ以テ校ス、

安和冷泉院之御代、正三位兼左兵衛藤原佐理卿者、於永一字、成五形之圖、中

書道系圖

上代流ノ祖

十八形圖ヲ作ルトノ説

略寛仁之朝、（略記）一條院御宇、權大納言藤原行成卿者、成十六形圖、〇中 以斯爲三

師圖、號筆法得傳、

〔玉章祕傳抄〕下 一 於我朝、奎頭小野朝臣道風者、十八形圖、所謂鳥相、羽、蛇

形、枯松立、獅子尾、垂露、下藤上、雲出、雨足、鷹飛點、仁頭、龍走、折木、高峯墜石、亂

草、落玉點、月輪、方丈、神頭等ノ點也、是者村上天皇御宇、

〔麒麟抄〕六 一 顯生類品者、六十四篇、道風十八形、佐理ノ十二樣等ノ、家々

ノ手書得物可口傳也、

〔麒麟抄〕四 一 筆使事、道風曰、筆ヲ墨ニ湛々ト染テ、筆ノ腰ヲ折、軸ノ頭ヲ

強、取テ、筆ヲ平メ可書儀有、

〔麒麟抄〕七 一 道風手跡、筆ヲ堅ニ堅ク取テ、筆崎ニテ、以（削）剋筆書樣ニ、圓ク

緩々ト可寫（筆也）ヲ以テ校ス抄

〔曼殊院文書〕〇六 山城 野跡經事

行尹卿云、野跡經有口傳祕事也、聞此字中ニ月ヲ書也、是ハ大略每度ノ事也、

復ヲ復ト篇ヲ三水ニ書也、是ハ兩樣相交也、筆跡難辨時、任此口傳可見之也、

〔麒麟抄〕一 一 春、躑、殖、折、勾、廻、捨、筆、仕、事

康保三年十二月二十七日

運筆法

野跡經ノ口傳祕事



康保三年十二月二十七日

横堅打立點、皆春筆也、道風春筆者是云也、

〔麒麟抄〕

六

一手本見様之事、手本見口傳者、四聲之文字アリ、去聲、上聲、入聲、平聲ノ字也、平聲ハ少平字也、大師、道風之手如此、（カケテアヨク書也イ）肉ヲ少シ點而書也、

〔麒麟抄〕

八

一團ニ物ヲ書事、設雖有人所望、無左右不可書之、若又有書事者、義之カ書タル銘文、道風之書タル銘文、朗詠（定ル詩イ）如此物ヲ可書、

〔觀鶯百譚〕

二

第二十三 李重光張體顫掣勢

南唐の李后主、（重光）顫掣筆とて書給ふ、ふるひ筆也、金錯刀の法とも稱す、

略 中和朝に、小野道風たま〜此法あり、弘法を誹しゆへにふるひ出たりといふは、俗論のみ、

〔類聚名物考〕

二百七十五

文史部五

小野道風ふるへ筆の事 今考る

に、世に傳ふ空海法師（弘法）が大極殿の額書しを、道風朝臣のそしりて、火極殿なりといはれし故に、さる高僧を誹謗たるによりて、手のふるひて、もの書れしに不自由なりといひ傳ふこと（大略カ）なる誤なり、それは後世の釋氏の徒しひて我道を執していひ出し事なり、道風卿の書法は、貫花の體とて、一流

の書ざまなり、くせにはあらず、思ふに、その貫花とは、稱美たるはもとよりなれども、古へ人のたはふれに、花ふさを糸に貫きて長くして、念珠のさまつくりて翫しと見ゆ、萬葉集の歌に、花を玉にぬきたること多く見えたり、今も小兒のかくする事有り、椿花、躑躅の花などを糸に長くつらぬきてもたるなり、そのさまに似たるをいふなるへし、

〔安齋隨筆〕

二十

道風かふるひ筆

俗に道風かふるひ筆といふは、道風

は能書なりし故、病にて手ふるへたれども、夫に拘らずして善く書きたる故、道風かふるひ筆と云ひ傳へたりと、貞丈云く、是誤りなり、筆をとりて文字をかく事を、揮毫とも揮筆とも云ふなり、揮はフルフとよむなり、文字をかく時に、筆を動かす事を揮ふと云ふなり、能書の筆つかひは、健にして軽くはたらく故、揮ふとは云ひたるなり、されば、ふるひ筆は道風一人に限らぬ事なり、病にて手のふるへたる事には非ず、

〔古筆家祕書〕

小野道風朝臣（字多寛平六生、村上康保元薨、七十一）

奈良切經（下四寸、七寸、十六字一行）

經 金銀ケ六寸四分、柿色地、十七字一行、上下砂子金、

康保三年十二月二十七日



康保三年十二月二十七日

本阿彌切

本阿彌切 四寸八分

六半、古今、淺黃、白地、又ハ淺黃、

歌 四首 九行 布目有、

二枚續 九寸五分 廿一行、歌二行書、伺細字、

百八字形

百八字形 九寸七分 行字、一行六字、

上濃淺黃、四行、書半首、  
下箔萌黃、五行、下ノ句半首、

此切、往昔、札者、不知、代金、三枚、ト札有、

近代、道風、ト筆、札見、申候、間、此段、ニト出ス、

四半 七寸二分 飛雲、雲母、

經ケ 六寸二分 泥下繪、箔葉、蝶青、金銀、金交、

四半 七寸四分 歌二行書、九行、

經ケ 六寸九分 十七字、

經ケ 六寸一分 十七字、

一經 六分五厘 墨書、ヲコト點、茶、六寸六分、

了泉、了伴、筆意、ヨク、字形、筆畫、ツマリ、

詩文切

詩文切 絹地、綾地、

半首切

紺紙金字經 文化十二、八三拜見、牛庵極也、

半首切 色帛二枚、或一枚、半繼合、歌一首、シタルシ書、帛ニ五

〔古筆名葉集〕 小野道風朝臣

本阿彌切 六半、唐紙、淺黃、白、古今集、

半首切 色紙二枚、或一枚、半次合、歌一首、シタルシ大書、紙ノ色

紺帛金字經

奈良切 香色紙、眞書、墨字、經

百八字經

卷物切

詩文切

四半切 飛雲、青紫、漢砂子、

〔增補新撰古筆名葉集〕 上 小野道風朝臣

本阿彌切 小四半、古今歌、二行書、

小島切 四半、歌仙家集、ノ歌、二

愛知切 丁字、吹更、行紗、地、七字、

康保三年十二月二十七日

四半切  
小島切  
愛知切



奈良切 香番、銀卦、眞字、墨字、經

百八字形 卷物、凡文、字一寸許

卷物切 艸書、詩文、章、絹綾、地

經切 白番、墨字、白番、金卦、砂子、香番、ウ、ス、香紙、紺番、金字、等アリ

〔妙法蓮華經〕

二 侯爵前田利爲氏舊藏

此法華經第二卷金銀者、野蹟之眞書、絕代之奇觀也、當世翫翰墨輩祕之者不  
過十數行、而今此一弓在小松中納言倉庫多年云々、蓋は無量珍寶不求自得  
之謂乎、  
槐陰散木通村印

〔好古小錄〕

書上 道風朝臣書

白詩

白居易ノ詩ヲ寫ス、模本一卷殘缺ヲ集一ヲミル、絶妙二王ノ體ヲ得、實ニ奇

〔三國筆海全書〕

十四 小野道風

琵琶引

琵琶引略ス、本文

百八字形略ス、本文

〔群書一覽〕

法帖類 安幾破起帖

一帖

秋萩帖

道澄寺鐘  
銘

道澄寺鐘銘

一帖

小野道風の假字なり、和歌二十二首のうち、脱文十六字、衍文二字あり、奥の  
歌下句を脱せり、天明乙巳秋、中井積善漢字の跋に云、帖の眞本、府下清光僧  
院に藏す、相傳ふ、小野内藏頭道風の書なりと、明徴なしといへども、筆法の  
妙、高く二王に攀、卓絶倫なし、舊傳蓋謬らざるなり、往歲吾社友長者院に就  
て摹搨す、心を用ゆること周密にして、幾毫差なし、遂に鑄して以てこれを  
布、今を距こと已に三紀、中間故有て鏤版散逸す、歎惜するもの久し、乃者篆  
工虚舟、舊雙鈎を請て、ふたゝび不朽を圖る、刻就てこれを覽れば、精巧實に  
加ふることありと云、天明五年十月、前川虚舟家に刻す、○原本高松宮御所藏

此帖は左板なり、小野道風の楷書にして、浪華の三宅正誼摸寫して刻する  
ところの本世に行はる、又寺僧に請て手搨するものあり、城州道澄寺の鐘、  
今は大和國宇治郡榮山寺にありといふ、集古十種に曰、凡鐘銘、道澄寺、神護  
寺鐘銘、及南圓堂銅燈臺銘、尤爲殊絶、今皆以數本校合之云々、○延喜二十年六月十七日ノ

條參  
看

七德帖

一帖

八二三

入

七德帖

康保三年十二月二十七日



康保三年十二月二十七日

八一四

小野道風朝臣の行草書なり、七徳舞云々、一接各八行、廿二接なり、勢州の人の藏刻といふ、

〔帝室御物目録〕

ノ帖卷部

- 一道風古今集掛圖 近衛忠熙獻
- 一小野道風書 泉帖 近衛忠熙獻
- 一道風春日山居 土屏風 二品貞愛親王獻
- 一大乗本生心地觀經觀心品第十八 一帖

傳道風筆

〔集古十種〕

扁額

- 小野道風朝臣眞蹟 〔靈山華嚴院〕
- 同 〔塔見門〕
- 攝津國丹生山田明要寺額 小野道風朝臣眞蹟 〔丹生山〕
- 參河國瀧山寺仁王門額 同 〔瀧山寺〕
- 山城國乙訓郡西岡向日社額 同 〔正一位向日大明神〕
- 播磨國極樂山淨土寺額 同 〔淨土堂〕

傳道風筆  
扁額

嵯峨青龍寺釋迦堂樓門額 同 〔愛宕山〕

山城國山崎八王子社額 同 〔天神八王子〕

上野國群馬郡竝榎護國寺什物 同 〔天龍護國寺〕

西山大原野勝持寺本堂額 同 〔勝持寺〕

筑前國太宰府觀世音寺額 同 〔觀世音寺〕

小野道風朝臣眞蹟 〔法然寺〕

尾張國熱田社東門額 小野道風朝臣眞蹟 〔春敲門〕

大和國奈良長樂寺額 同 〔長樂寺〕

越後國柏崎永徳寺額 同 〔永徳寺〕

小野道風朝臣眞蹟 〔流芳樓〕

讚岐國白峰頓證寺額 小野道風朝臣眞蹟 〔頓證寺〕

大和國金峯山第三鳥居額 同 〔等覺門〕

丹後國天橋立籠社額 同 〔正一位籠之大明神〕

丹波國井原石龕寺額 同 〔石龕寺〕

小野道風朝臣眞蹟 〔正式位勳八等高野大神〕

康保三年十二月二十七日

八一五



康保三年十二月二十七日

八一六

大和國唐招提寺藏 小野道風朝臣眞蹟 〔弑切經藏〕  
大和國釜口山長岳寺塔頭普賢院藏 同 〔治國亭〕

〔能書事蹟〕

下 諸王能書家筆扇額

攝津國四天王寺 或曰、聖德太子筆 小野道風朝臣

釋迦如來轉法輪所當極樂土東門中心 ○以下、上掲ノ集古十種同

同長田社 同

長田神社

河内國觀心寺 同

觀心寺

北野經成就寺 同

經王堂

〔山城〕同寶積寺 同

寶積寺

岩屋山金峯寺 同

岩屋山

嵯峨二尊院藏古額

二尊院

〔國阿上人繪傳〕

二三

〔國阿〕聖は、○中靈山寺の佛閣へそまいられる、○中

それより本堂華嚴院へ参りたり、○中正面の額は小野道風か筆跡、

〔播磨鑑〕

六佛閣 加東郡

極樂山淨土寺 眞言宗、大部莊

寺記云、○中

建久八年八月廿三日、請笠置解脱上人、爲落慶導師、仍號極樂山淨土寺、掛小

野道風筆之額、此額本東大寺淨土堂額也、

〔雍州府志〕

五乙訓郡 寺院門下

勝持寺 有小野道風所筆勝持寺之額、筆法俊

逸也、

〔厚覽草〕

〔熱田神社〕

此春敲門ト云額ハ、小野道風カ書ケル也、今祝師田嶋丹波カ家ニ

有、近キ頃マテ門有シカ、今ハ礎而已也、

〔四天王寺名跡集〕

衡門 世俗鳥居ト稱ス、○中衡門ニ表曰、釋迦如來轉法

輪所當極樂土東門中心ノ十六字ヲ鈹ム、是則世ニ太子ノ翰墨ト云ヒ、或ヒ

ハ道風ノ筆跡也ト云ヘリ、亦弘法大師ノ書スル所トモ云ヘリ、

康保三年十二月二十七日

八一七

靈山寺華嚴院額

淨土寺東大寺淨土堂額

勝持寺額

熱田神社春敲門額

四天王寺額



道風筆二  
靈蛇額ヲ  
トノノ紙  
ノ説

〔觀鷺百譚〕四 第七十八 和朝額字佐理神妙略○中  
和朝の古額、知愼あまた影書して藏め侍る中に、天王寺の鳥居の額、神妙に見ゆる者なり、世に道風といふ、

〔二尊院縁起〕 當院の額は、二尊教院とあり、小野道風筆勢をふるへり、四ありし門ありけるに、此額をうたれけり、しかるに夜々に門前の池より靈蛇あかりて、門柱をまつひ、額をねふりけり、さるほどに、後には字形もうすくなり、額のさいしきも消ける程に、かれか障礙をふせかむかために、額の一方にくりからをかゝせられけれども、そのおそれもなく、いまた舐る事やまさるに、正信上人かの蛇の執をすくはんかために、戒法をさつけ、血脈を池にしつめられけり、そのしるしとおほしくて、かの池より千葉の蓮華一もと生したりしを、これをまことに龍女成佛の證據とて、すなはちかの花をとりてそをかかれける、いまにこれあり、殊勝のことゝを人みな申せし、

〔高野山通念集〕

一大勢至菩薩

五 往生院谷 小坂坊略○中

〔皇朝名畫拾彙〕

一

小野道風略○中 亦作畫圖、見便覽、多武峯護國院藏、大織録是

録是

冠神像、高野山小坂房藏勢至像、并稱所畫、

筆

〔麒麟抄〕

七

一筆ノ毛ノ事、略○中 道風ノ好ハ、紫毫筆ト云、末代難有、和成所

ヲ薄ク懸テ、以上五重迄緩々ト懸テ、姿ハ柳葉ニ結テ、眞ノ物ニ可使、行ニ

ハ秋毛ヲ心ニ立テ、上ニハ冬毛ノ和成ヲ懸交テ、姿ハ如箏、草ニハ妻鹿ノ夏毛ヲ以テ可結也、

硯

肖像

〔安齋隨筆〕

十二

小野道風畫像 二幅あり、一幅は青蓮院御門跡にあり、

畫工の名不知、甚古き畫なり、其の冠服の體、後代の衣文の體に非ず、又一幅

は高良山月光院其の所不詳所藏なりと云ふ、其の畫大體青蓮院の通に似て、人かた小さく、道風口を明きたる所は似て、舌を出せり、袍の裾より裾を出たせり、紙を文臺に置きて書く體なり、是ら異なる體なり、是は青蓮院の畫をみたる人見覺えて、そらに似せて畫きたるものなるへし、畫體右に劣れり、青蓮院の畫の冠服は、悉く古様に叶へり、録云く、この畫、予も藏せり、付きて見るへし、

〔好古小錄〕

上畫

五十一

小野道風畫像

信實

信實本



其容貌、其衣服、實ニ當時ヲ想像セシム、此像模本ニ、裾アル者アリ、俗工ノ猥ニ添ル所、論スルニタラス、

〔古畫類聚引用畫目錄〕

小野道風朝臣像

右京權大夫信實筆、青蓮院宮御藏

〔集古十種〕

古畫

小野道風朝臣像

瀨尾某藏、〇圖略ス

〔閑田次筆〕

二

〇上 右の装束の制度につきておもしろきことは、小野道

風朝臣の肖像、即小野社の眞影の寫しなるよしの物ありて、誠に馬面といひつたふることき容貌にして、その装束は、重もなき衣冠にて、畢竟うちうちのみさまに見え、右の手に筆をもち、もの書んどのおもむきながら、硯箱はかへりて左にあり、即左にうつす、此装束のさまなへくとして、袖狭少に見ゆ、これ、〇中 古儀なるへし、〇圖略ス

〔本朝畫圖品目〕

小野道風朝臣像

畫信實

同紺絹泥金像

畫兵庫頭舉時

色紙形書天台座主明尊

賴壽本

追加云、道風像、京師中立賣妹尾彌兵衛、薩州出入の町人持てり、此像青蓮院宮にもあれごよろしからず、彌兵衛所持古くして第一なり、

〔訂正増補考古畫譜〕

十一部

小野道風朝臣像

一幀

賴壽法橋筆畫上貼道風朝臣眞蹟一葉、近衛家御藏、

躬行曰、此畫、容貌衣服、信實朝臣筆といふものと、全く相同じといへり、予未是も親展せず、

補、眞賴曰、黒袍を著たり、此の畫今は宮内省の御物となれり、

補同

補、京都畑柳平藏、

同

一幀

大内記小野舉時畫、紺色絹上、以金泥畫之、長四尺餘、潤一尺七、讚天台座主明尊、ほにはいてぬいかにかせまはなす、きみをあきかせにまかせはて、む、木工頭小野朝臣道風之肖像、父大内記小野朝臣舉時所拜寫之也、故以曾祖父道風朝臣之詠歌書之、安于當院、于時永承三年十一月十一

舉時本  
讚明尊



庚保三年十二月二十七日

八二三

日、天台座主明尊、押此記文有像、躬行曰、此歌後撰集、秋上に載たり、普通本、結句まかせすて、むとあるは誤なり、○中略

又曰、○中略、天台座主記、明尊、内藏頭道風孫、兵庫頭奉時男、古今著聞集、志賀僧正明尊、道風孫、兵庫頭奉時子也、○中略、諸本かくありて、明尊を、○中略、道風朝臣の孫とするは、此記文と不合、○中略、また諸本舉時を泰時或は奉時と作るものは、いづれも字形の似たるより誤たるなり、○中略、此畫奇世の珍なり、攝津伊丹人故山川真清族人藏、今東京青木信寅所藏、或云、原和州法隆寺什物、

補、真頼曰、此の像、荻野竹洲の所藏なりしが、今は青木信寅の所藏となれり、摹本博物館にあり、摹本にもとは法隆寺の什物なりしよしを記せり、

〔帝室御物目録〕

ノ掛幅

一道風畫像

近衛忠熙獻

法橋頼壽筆

小野道風社

〔雍州府志〕

三葛野郡社門下

小野道風社 在同處、○鷹峯北小野庄杉坂村、土人稱瀑社、

吉田家道  
風武明神  
授極位ヲ

瀧社

社前有池水、雖炎旱水不涸、嗜筆法人、以斯水爲研滴、欲倣道風之筆法也、

〔小野道風社文書〕

○山城

宣旨 正一位道風武大明神山城國葛野郡小野郷杉坂村

宗源 右奉授極位者、神宣之啓狀如件、

寶永六年十二月一日

神部伊岐宿禰(花押)奉

神祇道管領勾當長上從二位侍從卜部朝臣兼敬(花押)

〔諸社一覽〕

○四山城

瀧社 同○葛野郡杉坂村ニアリ、祭神 小野道風靈也、

〔山城名跡巡行志〕

三葛野郡一

道風武大明神 在杉坂村路傍、鳥居、長向拜殿、社、巽向、所祭小野道風靈、例祭九月十五日、當村産沙神也、

〔神社啓蒙〕

七靈社

瀧社

在山城國葛野郡小野庄杉坂村、所祭之神一座、

小野道風○中略

當社前有小池、旱澇不變也、洛陽好草隸之輩、盈蟾蜍而爲研滴云、

〔日次紀事〕

十一月十五日 小野道風忌

忌日

八二三

庚保三年十二月二十七日



康保三年十二月三十日

大叔ノ詩

〔文明易然集〕 道風

大叔上

八二四

古今書屬二王家、法帖聞君學得誇、昔日御屏揮翰處、想應新樣似梅花、三十日、庚寅追儼分配告知ノ法ヲ定ム、

〔西宮記〕 十二月追儼事

晦日差定殿上藏人所追儼事

殿内 四角

已上殿上人、依員分配、午時押西小壁知之、

南殿 仁壽殿

已上藏人所人、依員分配、午時已上押壁知之、

康保三年月

○本書、月日ヲ闕ク、姑ク恆例ニ據リテ、茲ニ掲グ、

殿上人ノ分配  
藏人所人ノ分配

是歲、石清水八幡宮修造成ル、

〔小右記〕

長元元年十月十三日、甲戌、關白御消息云、石清水宮御殿改造、先造假殿、奉移之後、可造御殿歟、邑上御時、不奉移假殿修造之、（殿上ノ）部等昇御上非無事、（急カ）○中是宮寺司依舊記所申也、

正御座ヲ動サズ  
繩ニテ釣上グ

十九日、庚辰、○中邑上御時記云、天德四年九月取損色、康保三年造了、但不動

正御座、以繩釣上貫替御坐木、虹梁四枚用舊、須造（實カ）如（實カ）改御造作之

間、御體（實カ）抑宇佐宮例、奉移假殿、至礎改替者、○中余云天德例、被取損色

之月、内裏有事、火、康保三年造了、明年又有事、帝崩、彼例不穩、○本書同年九月

テナキヲ以

○石清水八幡宮正殿造立ノ日時ヲ擇ブコト、應和三年正月二十日ノ

條ニ見ユ、

御乳母肥後、出羽ニ赴クニ依リテ、御餞ヲ賜フ、

〔西宮記〕

受臨時赴任事

康保三、天皇御乳母下出羽國、給酒肴、御衣、或有和歌、

〔續古今和歌集〕

離別歌

御乳母の遠き所にまかりけるに、裝束給はずと

て、

天曆御歌

康保三年是歲

八二五

和歌アリ  
御製



飛香舎ヨ  
賜フ  
リ裝束ヲ

〔拾遺和歌集〕

○六前田家本

天曆御時、御めのと肥後か、いてはのくに、く

たり侍けるに、せむたまひけるに、ふちつほより、さうそくたまひける  
にそへられたりける、  
よみ人えらす

ゆく人をと、めかたみのから衣たつより袖の露けかるらん

殿上人等  
歌ヲ詠ズ

おなし御めのと、のせむに、殿上のをのことも女房などわかれおし  
侍けるに、  
御めのと、の少納言

おしむともかたしやわかれ心なる涙をたにもえやはと、むる

女藏人三  
河ノ詠ゼ  
ル歌

女藏人參河

あつまちの草葉をわけん人よりもをくる、袖をまつはつゆけき

〔一條攝政御集〕

備後のめのと、いてはのくに、くたりけるに、うへのせ、

させたまひけるに、殿上の人もうたよみけるを、いかてかき、けん、

ひとしれすおもふこ、ろのふかけれはいはてそしのふやそしまのまつ

藤原高光  
歌ノ詠ゼ  
ル

〔高光集〕

ひこのめのと、の出羽にくたるに、饑たふとて、人、歌よむに、  
後撰和歌集旅に罷りける  
人に遣はしけるニ作ル、

旅を行草のまくらの露けくはをくる、人の涙をしれ和歌集

同

加賀守藤原後生卒ス、

〔延喜式裏文書〕

○二公延喜式卷第二十  
八條道秀氏所藏

○本文略ス、全文八年末  
雜載、公家ノ條ニ收ム、

康保三年五月十七日

藤原（目下同シ）権

三世清胤王

追言上京中案内、○中

賀加守後生朝臣死去云々、不聞

洛下案内大略如此、○下

〔尊卑分脈〕

藤原氏  
末茂孫

是房

後生加賀介  
母

○後生女少納言命婦ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

〔拾遺和歌集〕

雜十賀

左大將濟時かあひしりて侍ける女、つくしにまかり

康保三年是歲

八二七

世系

少納言命  
婦ノ傳



康保三年是歲

くたりけるに、實方の朝臣うさの使にて、くたり侍けるにつけて、とふ  
らひにつかはしたりければ、  
藤原後生か女

けふまてはいきの松はらいきたれど我身のうさになけきてそふる

〔勅撰作者部類〕

女部

少納言

加賀守  
後生女

拾遺集雜賀

○少納言命婦、内裏歌合ニ念人ト爲ルコト、天徳四年三月三十日ノ條  
ニ見ユ、

外從五位下多修正卒ス、

〔系圖纂要〕

號外十一  
多朝臣姓

脩文

脩正 一者十四年、  
外從五下、將監、康保三年卒、

公用 一者廿年、  
外從五下、右將監、伯耆介、寛和二年卒、

公高 一者二年、

武文 一者四年、  
右將監、寛仁四年死、

〔樂家系圖〕

○音伏見宮御所藏文書四所收

多氏

歌什

世系

府掌  
樂所右一  
者

神樂歌ノ  
相承

右近將監〔第三〕一者、  
良常〔本〕一者、  
〔本〕一者、  
大夫將監〔第四〕一者、  
脩文 一者、  
脩正 一者、  
武文 一者、  
大夫將監〔第五〕一者、  
右近將監〔第九〕一者、  
武文 一者、

伯耆權介  
大夫將監〔第六〕一者、  
公用 一者、  
〔本〕一者、  
大夫將監〔第七〕一者、  
公高 一者、  
武文 一者、  
イ本如此、

〔九條殿記〕

荷部類

年中行事家本

同六年十二月十六日、庚子、○此日有荷

前事、○中還宅後、隨身等給祿、○中府掌多脩忠三端、

〔東寺文書〕

○甲山號外二十八號

樂所右一者次第

修正 天曆元年任、  
治十七、

〔樂家錄〕

十六 絃管系圖

第一 神樂歌多氏相傳之統

脩文

〔本〕

脩正 外從五下、將監、  
康保三年死、

康保三年是歲



舞曲ノ相承

舞曲ヲ藤原保忠同佐傳

康保三年是歲  
公用 外從下、兵衛尉、長和四死、  
公高  
武文 右將監、寬仁四死、

第十 舞曲多氏相傳系圖

脩文

脩正

好用

外從下、將監、  
康保三死、  
長和四死、  
第十 舞曲傳他之說

脩正

相傳、右大將保忠、大納言恆佐

○修正、右近衛府競馬ニ乘人ト爲ルコト、天慶七年五月六日ノ條ニ、右近府生ニ任ゼラル、コト、同八年十月十九日ノ條ニ見ユ、

年末雜載

天文、

〔日本紀略〕

村上 二月廿四日、己未、虹立淑景舍北庭、六月廿六日、己未、丑時暴風、大雨、雷電、

神社、

〔春日中臣社司補任記〕

神宮預補任次第 吉理 有影 延喜十二年申、任神宮預、治五十六年、康保三年寅、正月、生年、廢職畢、

佛寺、

〔日本紀略〕

村上 四月六日、辛丑、天台山舍利會、  
〔東寺灌頂大阿闍梨名帳〕 二〇三寶院舊記 三年、寅、律師救世 十月卅日、

灌頂行之、

〔多武峰略記〕

下 華頂要略 六十五所收 彌勒堂 柿葺、元檜皮、後記云、一間四面、檜皮葺、法花堂、三昧堂、一字、戶二具、連 伴堂、元三間、一面也、安置彌勒慈尊并脇仕井等、即號彌勒堂、而大師實性僧都、以天曆五年八月廿二日、於此堂始修法花三昧、仍改號法花堂、建立年久、柱朽損也、爰以檢校千滿供米宛其祈、僅

康保三年雜載

虹淑景舍北庭ニ立ツ暴風雷雨電

春日社神宮預退職

延曆寺舍利會

東寺灌頂

多武峰法堂改築



雖採少々材木、未始造之間、大師僧都入滅、其後康保二、三兩<sup>(行方)</sup>三年之間所造立也、大工修理職長上大中臣遠貫云々、<sup>○中略</sup>

安置

尺迦如來像一軀 金色、居長一尺、

多武峯法華堂釋迦如來像  
大佛師延祚

後記云、依大師僧都本願、僧泰善以康保三年奉造、大佛師東大寺僧延祚云々、

〔正倉院文書〕

東南院文書 壹櫃第三卷

東大寺三綱補任

太政官牒東大寺

應補三綱等事

寺主千宗

傳燈大法師位千宗 年五十三 薨卅六

宗忠死闕ノ替

右補任寺主宗忠死闕之替、

都維那長興

傳燈法師位長興 年卅一、

右補任都維那慶藝無故不上之替、

以前得彼寺去二月十日解僞、件千宗等、依例可被補任之狀、言上如件者、<sup>(高明)</sup>右大臣宣、宜補彼寺三綱、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

康保三年閏八月廿九日

右大史正六位上井原宿禰<sup>(自署下同シ)</sup>連扶牒

從四位上行右中辨源<sup>(榮光)</sup>朝臣

〔奉行〕同四年正月一日、

別當律師

都維那

少別當威儀師

上座<sup>○本書太政官印ヲ踏ス、顆數詳ナラズ、</sup>

〔正倉院文書〕

東南院文書 壹櫃第六卷

太政官牒東大寺

應補造寺所專當知事等事

造東大寺所專當及任  
知事補

傳燈大法師位慶纂 年五十二 薨卅六

右補任專當之職、

知事承日

傳燈法師位承日 年卅八 薨卅五

右補任知事千宗轉寺主之替、

同仁覃

傳燈法師位仁覃 年卅七 薨卅六

右補任知事賀算無故不上之替、

同聖濟

傳燈法師位聖濟 年卅五 薨卅五

康保三年雜載



同延遠

右補任知事忠信無故不上之替、

傳燈法師位延遠年卅三、  
藤廿六

右補任知事圓鑒無故不上之替、

以前得彼寺去二月十日解僞、件法師等、依例可被補之狀、言上如件者、右大臣宣、宜補彼造寺所專當等者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

康保三年閏八月廿九日

右大史正六位上井原宿禰(自署下司)連扶牒

從四位上行右中辨源朝臣

(別奉)奉行 同四年正月一日、

別當權律師法藏

都維那

少別當威儀師

上座

寺主

權寺主○本書、太政官  
印十顆ヲ踏ス、

〔正倉院文書〕東南院文書  
壹櫃第三卷

太政官牒東大寺

東大寺權  
寺主補任

應補任權寺主傳燈大法師位千官年五十六、  
藤卅五

右得彼寺去二月十日解僞、件人權寺主仁信無故不上之替、可被補任之狀、言上如件者、右大臣宣、奉勅、依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

康保三年十月一日

右大史正六位上井原宿禰(自署下司)連扶牒

從四位上行左中辨源朝臣

(別奉)奉行 同四年正月一日、

別當律師法藏

都維那

小別當威儀師

上座○本書、太政官印  
踏ス、顆數詳ナラズ、

公家、

〔西宮記〕

○十前田家本事 康保三年三月六日、令左衛門小尉藤原宣雅進過狀、

暫令候藏人所客座、於左大臣家、糺左馬允坂上仲理所禁物事、大臣令申、仍勘

問、給過狀於大臣、

〔延喜式裏文書〕

○二公 爵延喜式卷第二十  
八條道秀氏所藏

一奉分黑作御贄事

黑作御贄

康保三年雜載

藤原宣雅  
ノ過狀



右件黑作如國定奉分已了、長嶋、仲河、小江、竈門四箇御厨持來已了、大嶋未持來、可被召勘之忽之、

一可追進上藏人所黑作返抄事

右以今明日令進上、可奉其返抄藏大主、彼贄殿別當者無事□歎之、

□令漂夫多仁村官米殘米九十一石直錢

□從室泊、大嶋、多仁兩村船、他船□枝船立前罷去已了、而輪与河尻間、吹伐

船帆懸波、而間荷取棄卅余石者、以去四月十二日參著河尻、即五百井有材

來向申此由、乍驚召取挾抄勘問之間、河尻邊人々定直俵別百冊文分行、是

即有材共所殘計米九十一石、殘者即有材隨申分行云々、件挾抄召捉、件直

錢令返、申左□早不進、非本國人、是備中國船人云々、因之付使件錢所勘領

也、以先日此由申上已了、

一未抄帳事

右抄帳依不具日收未勘者、至于只今、先催日收、未辨之物辨入抄帳、且可令

勘之由、召仰雜掌、

一可被召仰公眞、福茂所預置佃事

攝津河尻  
俵別百四  
十文

周防多仁  
村官米運  
送ノ途上  
漂失ス

黑作返抄

佃

右在國之日、多仁、都乃兩村田、件人々預已了、而爲人々被妨取云々、被召問、可給一勢之、

以前雜事、且大底如此、所々御書返事、追以進上□々結解未被勘定、因之□申子細、謹辭、

康保三年五月三日

清胤王

脚力

追申、脚力昨日午上參著、御書□令分、奉所々、子細勘文付延正奉、以明後

日、必可令下向、勘返之物大□此數也、御交替之間、件物可用意□稅長可

成用殘云々、公事勘濟□晚可有年內云々、是即依□營也、又在國牛不侍

鞍□調鑑□侍、其乘物不調也、早令上給、清胤弊牛一頭□以一昨日斃已

了、如同宿侍□之用仕、而只今煩侍、早々錢隨候、令上給□用不分其數、

亦公用數已不足云々、謹言、○本文書及ビ次ノ文書ハ、日附ヲ闕クト、雖モ、姑ク原本ノ次第ニ據リテ、茲ニ收ム、

所被上未勘定其預人々結□勘定之後、可言上用殘之由、且大底□三百石許、此內未下之物有數云々、然□所殘殊給還迹、謹言、



清胤謹言、付贊綱丁春茂、奉入返抄□、抑所被上錢、棄仕米直并所在錢八□<sub>冊</sub>□<sub>冊</sub>  
 □<sub>五カ</sub>貫六百廿二文也、所被雜用錢百六十七貫□<sub>三カ</sub>百卅四文、其殘六百七十八貫  
 二百七十八文、可用九百十貫七百六十文、不足二百卅二貫四百八□<sub>二カ</sub>□<sub>文カ</sub>、件  
 勘文等付延正奉入、此男依先參□<sub>所カ</sub>間違也、佐出納先後勘文可用之□定也、  
 又藏人□<sub>所カ</sub>布直并修理職勘返白□代等、勘返物粗千六百石、穎七万余束也、  
 因之主稅（案カ）原助早可進堪文、其□<sub>勘カ</sub>可勘公文者、彼隨仰可令進堪文、□勘文付延  
 正可奉上、以明後日可下向、調大帳勘畢已了、但未成官符、近日之○以下

○前文

□也、早可勘糺者也、但先年自辨濟所下行者、同借書一枚奉入之、  
 一可被上東對新檜皮事

右屋雨降時、不可人居、其材木往可朽損、元輪專□堂葺之、不可有云々者、可  
 被上、是大事也、

一可成內藏司錢返抄二百貫文事

右佐出納被申云、彼司所收錢二百貫文、而御任□<sub>新</sub>已以有餘物、已公納

內藏司錢返抄

不可請返、須後司新□<sub>御新</sub>可成返抄者、件返抄追以進上、且以此可察之  
 者、慥造勘文可言上之、

以前雜事、大底言上如件、抑參上之後、依勘文□<sub>行カ</sub>調庸不足新之後、漸出來、其  
 返抄四箇年新、一年之物不究下、且不勘抄帳之旨是等也、又無日收寮新、因之  
 造解文令奏問之間、未下其宣旨、率分之事、未被定、是右中辨依不被同渡也、頻  
 雖催申、且及兩年未渡給者、佐出納（源保光）以此由被申、以今明日可渡給云々、錢使返  
 抄、未出來一年新者、因之令進勘文、奉右中辨殿如件、

康保三年五月十七日

藤原（自署下同シ）権

三世清胤王

追言上京中案内

賀茂御社鳴事 今月十一日地震事

□<sub>鎌カ</sub>殿權助大友貫之死去事 天變屢現事

疫癘赤痢間發事

右近藏人少將、四月廿七日駒牽日、行幸於武德殿、發給御病、彼以後十余日  
 間、煩給赤痢、昨□<sub>藤原助信</sub>日卒給了、賀加守後生朝臣死去云々、不聞

疫癘赤痢流行

康保三年雜載

八三九



洛下案内大略如此、先藤帶出家之事、前日申了、頓首謹啓、

〔別紙〕  
〔康保三六月六日到來〕

長嶋贊使

清胤謹言、雜掌連並申文一枚奉入、早被啓事由、返所及諸事付延正、長嶋贊使進上如件、早所言上之事、一々可蒙處分、謹言、

五月廿日

清胤狀

謹上前周防前司御館侍主達

〔別紙〕  
〔七月十一日卯時到來〕

清胤謹言、

言上事七箇條事

一 勘始以去月廿二日二箇年抄帳事

右以彼日始勘已了、而依無日收寮料、付藤藏人、申下宣旨、而可勘申諸司返

抄案者、因之件抄帳勘畢、諸司之勘文請之間、暫可延行者、

未返抄日  
收勘文

一 奉送未返抄日收勘文事

公事勘濟  
料錢

右件日收雖催責、事廻左右、未濟進、事有之、爲勘文奉送已了、

一 可被早上公事勘濟料錢事

右以先日付延正、造勘文奉送已了、早錢四百貫許可被馳上、二箇年抄帳勘

料下行已了、今二年新依無勘濟本〇

書、此處ニ繼目アリ、恐ラクハ脱文アラシ、推量之、

一 奉送運上米用殘勘文事

右件米依辨濟所下文散用、事旨見勘文也、

一 可被定下今二年抄帳雜掌事

右檢案内、連並請二箇年之使未勘畢、預年抄帳至于今二箇年者、隨國定可進退者、早可定遣者也、於後年有料物者、此間筭師請始勘者、然而依無料物、

暫間遲引、早可定之、

一 奉送米結解二枚事

高材預一枚 清胤一枚

右件結解、爲國覽進上、但於他人者、各隨身參向已了、

一 勘濟寺豐穗米代錢廿貫文事

米結解

運上米用  
殘勘文  
辨濟所下  
文



〔石カ〕  
〔遣カ〕者〔單カ〕勘納也、但豐穗申云、〔石カ〕石米内、且可辨申五十石之代  
錢卅五貫、今於十五貫文者、追以月内可進送者、其殘五十石、長官御京上之  
時、可給米□申補□之、

以前雜事、言上如件、

康保三年六月十一日

清胤王

關〇端  
夕

〔別筆〕  
康保三年八月廿六日

件古錢者、人所□其代殊給恩給□、可被執啓、謹言、

清胤謹言、以今月二日安行到來□仰旨、抑以先日未出來日收勘文、其後所出  
來日收、長殿返抄、元〔年カ〕分返抄、内藏櫛子代油返抄、官厨〔返カ〕抄等也、未出來綿代  
錢七十貫文□〔預カ〕者、又雲林院宣旨錢八十三貫文、官□未進米六斗、大膳職返  
抄、主殿寮□〔返カ〕件返抄近日之間、催請可□抄帳、所給之物、安行等所申頗有相  
□、而不辨其事之間、不問案内、於公文者、□勸殿用途帳被下之後、未下承知  
官符、□内可出來者、相待件官符之間、自□者、公事案内、且如此子細追以可

内藏櫛子  
代油返抄  
官厨返抄  
雲林院宣  
旨錢

大膳職返  
抄



清胤王書狀

延喜式卷二十八紙背  
公爵 九條道秀氏所藏

原寸

縦 〇二七七  
横 〇六四一

清胤王書狀  
 延喜式卷二十八紙背  
 公爵 九條道秀氏所藏  
 原寸  
 縦 〇二七七  
 横 〇六四一

此書乃清胤王所書之書狀也。其文曰：  
 延喜式卷二十八紙背。公爵九條道秀氏所藏。原寸。縦〇二七七。横〇六四一。











卷又... 述... 不... 士...

後不... 亦... 取...

... 向... 於... 取...

... 指... 向...

... 術... 諸...

... 諸... 狀...

... 諸... 狀...



□<sup>(書カ)</sup>上之、二條殿日來米已絕、廻左右□盡術、更無他計、諸事追執啓如此、清胤謹言、

八月三日

清胤狀上

謹上遷替院侍主達御中

〔別紙〕  
康保三年九月十六日到來、

主計權助清用意極、以駒□以此由可被問主稅頭連茂之□屢々被申者、  
早可返給、非返給、可轉送

清胤謹言、

請去八月十三日御書、後八月九日到來并言上雜事等事

一調庸事

件調庸料物、依員究進、更無未進、其後未出來返抄、雲林院錢一枚、主殿寮油一枚、官厨家米一枚雖相催、□抄事怠有之、公事之體、自然如此、以之爲歎、心神不安、与不事未承一定、祈禱佛神御、与否之事自然定歟、

一抄帳事

康保三年雜載



件抄帳四箇年料、且始勘覆勘已了、而依無主計寮□寮案六枚、不勘會抄帳、因之申下宣旨、勘申諸司、□其後經日、不下宣旨、僅被下今月十一日宣旨、所司勘<sup>(申力)</sup>□有相違、今明日之間、相計令勘直、可勘會抄帳、但□來於返抄者、日々相催、更以不怠、徒送日月、霖霖<sup>(歎之)</sup>□抑爲御覽宣旨案二枚奉送勘畢、抄帳請惣返<sup>(抄力)</sup>□、早可參下之、

一年々公文事

件公文新物、依員究行已了、其後依藏人所布直并□觀殿用物官符、于今未勘公文、而布直宣旨許<sup>(申力)</sup>□出來又了、至于官符、今明日之間、令成承知符、其間□晚、以之爲歎、同相催、更以無懈怠之、

一鑄錢司用途帳事

件帳日々相催使々、而稱不請料物之由、頻以愁申、此□見安來等、預錢返抄未辨、請自以煩之、就中豐生□料物無愁者也、而預公文二箇年帳未勘申、頻雖<sup>(召力)</sup>□更以無益、仍錢借給五貫文、僅以令勘、錢收於出<sup>(來力)</sup>□、更有何妨乎、  
一可葺修二條寢殿并東對等事

鑄錢司用途帳  
二條寢殿

件屋無仰以前、申事由修理進、因之以去夏之比、文□所檜皮可運上之由、

度々差遣使者、即可上之由申諾、□米先立用駄賃、其後寄事左右、迄今日更不上、□頗爲水流失者、所申無理、縱雖有檜皮、不可修理、□盡更廻何計、就中寢殿降雨滴濕、不可人居、何□對非可滴云、宛雨如降、已依國定寄宿之間、更<sup>(無力)</sup>□方、不可修理、爲之如何、如此事可推量者也、

一公實、福茂預田事

件田事、承悅無極、但於福茂預方、爲人々被妨作、□可召糺者也、兼又給爲正仰事、可勘納其糶米、即□上之、

一請被糺返郡司禮茂預鹿毛馬一疋事

右依禮茂愁狀、以先日言上事由、而未被裁定、早被□、彌知國恩貴之、

一藏人御方用物事

件御方用物者、有數無物、隨有令奉、更不可申多少、□<sup>(難)</sup>退、今有此仰、彌以勤仕之、<sup>(關)</sup>以下

藏人方用物

關○前文

件米從去應和三年可春充者也者、然而且以御□內奏隨成敗耳、若不被免



者、自三年稅帳可□、主稅助以此由被申了、爲之如何之、

一可被早令料物隨身追(進力下向シ)上雜掌晴延事

件晴延棄預公文、寢以逃去、而間預公文稱不入□(之カ)由、未成之、此即預公文與

安所申也、傍人可爲□、可被召勘之、

一可被早追上郡司久見預御贄事

件御贄、以先日被追上者、而送日月不運進、如此□事之間、要望之人已有其

數之、早可被追上□、

一被召仰(藤原朝成)右衛門督殿主稅寮官人稅帳事

右以今月廿八日、被召仰云、右衛門府大糧二箇□(能カ)未下行、是前司可辨濟者

也、件大糧未辨之□勘稅帳者、定可有公文勘濟之煩、且以此由□之、是前遠

江權守所相傳也、其次被仰□□有相談事、至于今、更以無音、如此被仰云□、

一大糧御申文內奏已了、未被仰下之、

以前雜事、言上如件、

康保三年九月一日

清胤□

右衛門府  
大糧

淡路守ノ  
宅

○前文  
ク

件輪依先日仰、轆轤引一具、只輪一具、直給已了也、□內催取金塗一具、即可具橫上之、

一淡路守宅事

件宅直自伊与國忠許、借錢百六十貫持來、即充□(行カ)直、本直三百五十貫者、

猶以未下百余貫也、件屋被□更無雜屋、只今屋不可立、是依無料物也、此由

屢□修理進、清胤參上之後、用物勘文度々奉入、用殘之□勘文也、

一吉正、滋忠等預物事

件船道間平安著岸、即米錢依員散用已了、在□米等須如送文分行者也、而

或依國定分行人々、或□(前カ)手官人等、例物可請者所充行也、但抄帳勘畢之□

解以請之日、頭、助、并勘手之外官人物志者、而遣□更無他術、如此之間、必有

事怠歟、以之爲歎、爲□、○以下、開ク、本文書、ハ日附ヲ以テ、姑ク茲ニ收ム、

正稅、

〔延喜式裏文書〕

○一公爵延喜式卷第十條道秀氏所藏

主稅寮解 申正稅返却帳事

康保三年雜載

出雲正稅  
返却帳



出雲國延久貳年正稅帳壹卷

從去延長元年至于延久貳年并佰沫拾沫箇年

帳別返却

同三年勘出穀穎貳萬沫仟佰玖拾陸東伍把貳分五毛

穀貳仟陸佰捌拾參斛捌斗陸升貳合伍勺

穎參佰伍拾沫東玖把陸毛陸厘

依太政官康保三年三月廿八日符、從伍位下小野奉持(時力)當年位祿新貳佰

拾肆斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年三月廿八日符、從五位下藤原頭猷當年位祿新貳佰拾肆

斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月廿八日符、從五位下惟宗公方當年位祿新貳佰拾肆

斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月廿八日符、從五位下在原義行當年位祿新貳佰拾肆

斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月廿八日符、從五位下藤原元轉去(備之)天德三年位祿新貳

佰拾肆斛沫斗肆升壹合、

康保三年  
勘出ノ穀

小野奉時  
惟宗公方  
等ノ位祿

天德三年  
位祿料

依太政官同年五月廿九日符、從五位下藤原遠里當年位祿新貳佰拾肆  
斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月廿八日符、從五位下平朝臣忠時當年位祿新貳佰拾

肆斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月廿八日符、從五位下藤原朝臣清高當年位祿新貳佰

拾肆斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月廿八日符、從五位下源朝臣隆重當年位祿新貳佰拾

肆斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月廿八日符、從五位下藤原朝臣恆利當年位祿新貳佰

拾肆斛沫斗肆升壹合、

依太政官同年五月十六日符、從五位下橘時春當年位祿新貳佰拾肆斛

沫斗肆升壹合、

依太政官同年六月十六日符、國覓(伊之)美吉位祿料貳佰拾肆斛沫斗肆升

壹合、

依太政官同年四月五日符、從五位下藤原朝臣楚姬子位祿新佰沫斛參



權醫師出  
雲清明ノ  
季祿

源順駿河  
名合テ馬  
フ合テ行

康保三年雜載

八五〇

斗沫升伍合、  
依太政官同年四月七日符、權醫師出雲清明當年秋冬季祿參佰伍拾沫  
東玖把、○中

以前附件人所進延久貳年正稅帳、依例勘畢、但應填納穀類爲徵物勘出、即附  
返却以解、

承曆貳年拾貳月參拾日○連署

學藝

〔和歌合抄〕

九 士大夫家付女  
公 爵近衛文曆氏所藏  
源順宅歌合十番馬名合、康保五年五月五月

〔歌合〕

十 圖書寮所藏  
あるひとあつまにて、五月五日、つれくくなるに、む  
まのなあはせたるうた、源順所爲云々、

左 やまのはのあけ

ほのくどやまのはのあけはしりいて、このしたかけをすきてゆくかな（見てもゆかなん）

右 このしたかけ

やまのはのあけてあさひのいつるにはまつこのしたのかけそさきたつ

左 あまのかはらけ

ひさかたのつきけそらよりわたるらんあまのかはらけかけこめてん（さも）

右 ひさかたのつきけ

くもまよりわけやいつらんひさかたのつきけそらよりかちてみゆるは

左 あしはらのつるふち○夫木和歌抄、源順家馬毛名歌、合、足はらのつるふち馬作ル、

くもまよりどふあしはらのつるふちになにはのあしけおひつかむやは

右 なにはのあしけ

いてかたみどふあしはらのつるふちをなにはのあしけかへりみてゆく（な）

左 あさちふのどらけ

あさちふのどらけのみたるけしきにはあなよりかたのいどのくりけや

右 しらいどのくりけ

しらいどのくりけひきて、みるからにふすあさちふのどらけなりけり

左 ぬはたまのくる

かたきまつみどりのあけにくらふれは神とそみつるぬはたまのくる（ゆ）

右 みどりのあけ

康保三年雜載

八五一



みねのまつみどりのあけはなたかきをよるぬはたまのくろやなからん

左 神人のかくるゆふかけ

ゆふかみのなりてわたらはおくれつゝどりめはくものよそにこそみめ

右 あふさかのゆふどりめ

ゆふかみはとくもあらしをなにしおはゝかけるどりめをあはせさらまし

左 むめの花のかすけ

にけなくもくらふめるかないちしるくにほひすくれしはやきかすけに

右 一くるしき二け

ちりにけるはなのかすけもいろまさるにけにしあへははかなかりけり

左 あまのつむいそなくさ

すまのあまのあさりなゝつむいそなくさけふかちふちはなみそうちつる

右 あめなるひはりかけ

なになかくふりてあめなるひはりかけいとゝあらくそまさるへらなる

書類從本源順馬名合九番左無底井淵たくなはのためてもやみねそふひ  
なきふちにはかつくあまもあらしを右海乃多久奈者返留淵ちねはふひ  
乃神のくろとはいへとわみくろはら白雲わたつみらしすてきくもるのそら多都す美  
乃腹白ちはやふるかみくろはら白雲わたつみらしすてきくもるのそら多都す美

新抄格勅符抄書寫

〔新抄格勅符抄〕

新抄格勅符第十卷抄、神事諸家封戸、大同元年

神封部 略 中

一 寺封部 略 中

一 諸王諸臣封戸 略 中

康保三年十一月二日寫了、

〔拾芥抄〕

上名物樂器部三十五 琴 龍門 聖上恩拜納了、夏依

賣買

〔光明寺舊記〕

五攝津

謹辭

沾奉治田壹段參佰步事

直米捌斗伍升

在管答志郡二條上鴨里十六竹依東九船功西 枯不見

康保三年雜載

琴龍門ヲ

伊勢答志郡伊勢田賣券

直米



副奉本券文案文、依載他坪田留正文、  
右件治田、先祖所領遺財得分之内也、而依有急用要、定永地、沽却内豎伊福部  
利光不見、件、仍進券文、以辭、

康保參年伍月拾日

答志郡少領島實雄

件治田直米依員請、實雄、

件田沽奉實也、仍進名、不見、

少領  
稅檢

稅檢敢在名

物部在名

大神宮擬  
檢非違使

太神宮擬檢非違使宗岡在名

主稅

主稅丹羽在名

郡判

郡判

國目代

國目代大領島直在印判

安和二年十一月五日

此本公驗、竹依田之也、近年尋得也、故永遷取出也、

康保四年丁卯

正月庚寅朔盡

一日、庚寅小朝拜、節會、

〔江次第〕元一正月宴會

先奏諸司奏、次奏外任奏、

〔兵範記〕嘉應元年十二月十五日、丙申、略○中

二品法親王薨逝間、可被准行雜事例○中

康保三年十二月十七日、丁丑、三品中務卿式明親王薨、略○中

同四年正月一日、庚寅、小朝拜并節會也、略○中

右勘申如件、

嘉應元年十二月十二日

大外記清原真人賴業

〔西宮記〕正月上

太子參上謝座、略○中

二日、卯辛卯杖、

〔北山抄〕上一年中要抄上

不出御時、上卿仰外記、令付内侍所、先可

令奏事之由、見康保四年御記、

康保四年正月一日 二日

諸司奏  
外任奏

御服ニ依  
座ヲ立テ

出御ナキ  
侍ニ依リテ



東宮大饗

〔日本紀略〕村上天皇 正月二日、辛卯、東宮大饗、

〔西宮記〕東宮臨時五院宮事 康保三年十二月廿五日御記云、右大將藤原朝

東宮御服依リ大饗ノ行否ヲ奏請ス  
勸和六年  
天長十年ノ例  
勸文ヲ東宮ニ啓ス  
承和ノ例ハ不吉

臣令濟時奏、延長五年正月二日、有中宮、東宮大饗由、（皇太子）其條敦固親王薨時例也、申云、皇太子依年來例參上者、用輕服裝束、頗可無便、若元日參上、可著吉衣、（皇太子）歟、又延長五年被行大饗、此太子幼稚、無服歟、爲之如何、令仰云、承和五年可有如此例、宜令勸申、廿九日、右大將藤原朝臣令濟時奏、承和六年正月二日外記云云、乙卯、是日、依卯杖奏、可御紫宸殿、而依芳子內親王薨月之近、不御南方、辰三刻東宮傳右大臣及春宮大夫文室朝臣、亮藤原貞守等令賚御杖、入日華門、置殿上、取引而退出云々、于時內侍執而奉清涼殿、（依芳子）內親王服儀式已訖、公卿共參嵯峨院、次參淳和院、次參東宮、無拜禮、但召東陣、聊給白散、賜祿有差、（依芳子）○以上、本書正月上二宮大饗條所引ノ御記ヲ以テ校ス、天長九年十二月廿五日外記日記云、此日春日內親王薨云々、無天長十年日記者、申云、以件勸文啓東宮、々々申云、承和太子頗不宜之例也、饗事依例行之何、又以爲不御坐別宮歟、仍無禮、至于饗祿、承和

大饗ヲ行ヒ拜禮ヲ行  
停ム

六年已被給、然則於此廊行饗、無殊妨歟、但參觀事、（依力）依暇不被行可宜、仰依定申、依延長五年例、行東宮大饗、准承和舊蹤、不行太子拜禮可宜、

〔小右記〕

寬仁二年十二月廿五日、癸丑、（藤原實家）宰相來、傳大殿命云、東宮大饗有無未一定、（中略）欲聞所言者、明日可令申也、（中略）中大略就康保四年例可申歟、

廿六日、甲寅、昨大殿被命東宮大饗有無事、今朝以宰相申云、（中略）康保三年十月廿二日、有式明親王薨奏、（十七日薨）猶有東宮大饗、彼時被尋前例、承和依芳子內親王薨、無大饗、承和太子不宜、（例之）延喜五年有中宮、東宮大饗、舊年十二月敦固親王薨、延長東宮幼少、不可著御服、然而如康保定者、不因承和例、似被因准延長例、深忌避承和例歟、康保太子已成身給、異延長例、只以傍親薨時被行大饗之例、偏所被行歟、

六日、乙未、敍位、

〔日本紀略〕村上天皇 正月六日、乙未、敍位議、

〔公卿補任〕安和二年 非參議從三位藤濟時、廿九、（康保）同四正七從四下、廿七

〔敍位除目執筆抄〕康保四正六敍位、執筆、

七日、丙申、節會、



諸司奏  
外任奏

結願  
行香者不  
足依リ  
大外記等  
立テ加ハ

康保四年正月八日 十日 十一日 十四日

〔日本紀略〕天村上 正月七日、丙申、節會、

〔江次第〕元一 正月 宴會 先奏諸司奏、次奏外任奏、

康保四年正略〇中七、

八日、丁酉、御齋會、

〔日本紀略〕天村上 正月八日、丁酉、御齋會始、

十四日、癸卯、御齋會竟、

〔西宮記〕正月 幸儀 御齋會 左右行香、有不足者、大外記、式部

後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一 長者僧正寬空 法務、後七日法行之、〇後七日御修法、阿闍梨名帳同

十日、己亥、左大臣實賴、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕天村上 正月十日、己亥、左大臣家饗、

十一日、庚子、右大臣高明、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕天村上 正月十一日、庚子、右大臣家饗、

十四日、癸卯、權律師昌矣寂ス、

〔日本紀略〕天村上 正月十四日、癸卯、〇中 今日權律師昌矣員卒、

官歴

大安寺別  
當

東大寺戒  
和上

敘位

〔僧綱補任〕〇二 興福寺本 權律師昌矣 康保三年八月廿七日任、律宗、大安

寺、大和國人、三宅氏（宋書下冊シ）七十九、戒壇和尚、同四年正月十四日入滅、八十一

〔東寺文書〕〇甲 號外 二十八號 大安寺別當次第

律師 昌矣 專寺、律宗、

〔東大寺要録〕別當 章第七 附上次 戒和上次第

廿三昌矣 承平九年任、大安寺、七十九、律師、（在成之）

二十日、己酉、除日、

〔公卿補任〕五

大納言從二位源兼明、四、五 正月廿日任、權大納言、

權大納言從三位藤伊尹、四、十 正月廿日任、權中納言、元參議、左近權中將、伊

即敘從三位、

中納言從三位橋好古、五、七 正月廿日轉正、

參議從四位上源延光、四、十 左權中將、正月廿日兼播磨權守、

藤文範、五、十 同四正廿任參議、右大辨

〔公卿補任〕六、安和元年 非參議從三位藤兼家、四、十 康保四正廿兼美乃權守、

康保四年正月二十日



〔公卿補任〕 安和二年 參議正四位下藤兼通五、四十 康保四正廿內藏頭、

〔公卿補任〕 天祿三年 參議從四位上藤元輔七、五十 康保四正廿左中將、

〔公卿補任〕 天元元年 參議正四位下藤佐理五、三十 同四正廿兼近江介、

〔公卿補任〕 永觀元年 參議正四位下橋恆平二、六十 同四正廿尾張守、

〔外記補任〕 二

大外記外從五位下雀部有方 正月廿日任大、

少外記大藏弼邦 正月廿日任、

坂上望城 正月廿日任權少外記、

〔源順集〕 察〇圖書 源順（康保）四年正月廿日任和泉守、〇三十六人歌

〔公卿補任〕 寬和二年 非參議從三位藤懷遠四、三十 康保四正マ右衛門シ權少

尉（實賴）祖父左大臣二合

〔除目大成抄〕 京官二合 康保四 左兵衛少尉正六位上藤原朝臣懷遠實賴

〔魚魯愚別錄〕 任三下院宮已下諸當年給

本抄此尻付年不見云々、而私勘康保四年正月除目、左兵衛尉藤原懷遠所

實賴當年給二合

任尻白也、

入眼

〔敍位除目執筆抄〕 康保四正十八日縣召廿日入眼、執筆、

〔公卿補任〕 五 參議從三位源重信六、四十 修理大夫、正月廿三日兼播磨權守、

〇源重信ノ任官、便宜合敍ス、

二十一日庚具平親王ニ巡給ヲ給フ、 康保四年正月廿一日御記、具平親王可預

〔魚魯愚鈔〕 五 藏人方丙諸未給 巡給之由、令文範朝臣給左大臣、

二十五日甲寅藏人頭及ビ藏人ヲ補ス、

〔職事補任〕 藏人頭天皇 村上天皇

內藏頭從四位下藤兼通 同四正廿五補、〇公卿補

右中辨從四位下藤濟時 康保四正廿五補、〇公卿補

〔職事補任〕 五位藏人 村上天皇 右少辨從五位上大江濟光 康保四正廿五補、〇公卿補

任異事

權律師定昭ヲ東寺長者ニ補ス、

〔東寺長者補任〕 一 權律師定昭 一乘院、眞言宗、東寺、正月廿五日加任、五

藏人頭  
藤原兼通  
藤原濟時



寬靜ヲ超拜堂

仁遍ヲ凡補別當ニ

三長者

冷泉院ニ御退出ハ東宮ハ御退出シ給ハズ

良源ノ天台座主ニ越任セシメテ死ス

康保四年正月二十九日

六 超上薦寬靜第三十一月十九日拜堂仁和寺諸院家記異事ナシ

八六二

正月廿五日、仁遍大法師補凡僧前卷、定照任律師替、

〔三寶院文書〕

四十 東寺長者年薦上首次第宣下事略○中

康保四年正月廿五日補三長者、定昭律師、後七日御修、法阿闍梨名帳同シ、

二十九日午、輕服ノ親王等、神事ニ依リテ、退出シ給フ、

〔西宮記〕

臨時五 院宮事

康保四年正月廿九日、今夜親王等退出冷泉院、

神事之間、依輕服不可候内裏也、東宮不出陣外、依前例、輕服之時、不見出時之由云々、

律師賀靜寂ス、

〔扶桑略記〕

二十六 村上天皇下

正月廿九日、律師賀靜卒去、

〔師資相承〕

三種悉地 賀靜

下臘良一蒙座主宣旨、七年八月二十日仍心勞死去云云、

〔歷代皇紀〕

村上天皇裏書

律師賀靜 康保四年正月廿一日九カ、爲良源天台座主、心勞死去、道長和四年六月十九日、贈僧正法印大和尚位、其條アリ

官歴

贈僧正

法性寺座主

法系

護念院律師ト號ス

仁觀ニ三種悉地ヲ受ク

弟子覺忍

素昭ノ弟子

〔僧綱補任〕

二 興福寺本

權律師賀靜 康保二年十二月廿八日任、天台、延

曆寺、内供勞、仁觀律師弟子七十九、法性寺座主、同三年十二月廿六日轉正、同四年正月九日并脱カ入滅、八十一、長和四年贈僧正位、是依靈氣云々

〔門葉記〕

八十一 山城 雜決六

法性寺座主次第

〔師資相承〕

三種悉地古印信

仁觀

賀靜法性寺座主、仁觀入室、護念院律師、贈僧正、

〔師資相承〕

三種悉地

仁觀

賀靜權律師、贈僧正、

覺忍、其彼重隨法性寺座主賀靜、授先所學了、賀靜師可尋之、中

賀靜、律師、左京人、安部氏、仁觀弟子、法性寺座主、被越座主慈惠取了、贈僧正法

印大和尚位、西塔素昭入室、

〔三院記〕

三院所藏

康保四年正月二十九日

八六三



護念院ニ住ス

仁觀ヨリ付屬セラレ醍醐村上御兩帝ノ御願處ハ大江齊光賀静ノ光

平惟仲

試題

康保四年正月是月

護念院 延喜天曆二代之御願處

菖檜皮五間堂一字 菖檜皮回廊一字

菖檜皮五間大衆屋一字

右伴堂地者、故律師仁觀房也、便付屬入室授法弟子故律師贈僧正賀静、件房、延喜聖主并皇太子太皇太后、村上天曆主上代々爲勤仕御願之處也、光者賀静、天明也、賀静門徒中戒行具足、堪其事者相傳別當云々、

○右大臣師輔、賀静ノ阿闍梨ノ事ニ關シテ奏聞スルコト、天曆二年二月二十六日ノ條ニ、賀静、毘沙門天法ヲ修スルコト、天德四年十月二十八日ノ條ニ、御本命元神供ヲ修スルコト、同年十二月二十一日及ビ應和元年二月二十二日ノ條ニ、降三世法ヲ修スルコト、同年閏三月十七日ノ條ニ、太白星供ヲ修スルコト、康保二年正月十一日ノ條ニ見ユ、

是月、文章生ヲ補ス、

〔公卿補任〕

六正曆三年

參議正四位下平惟仲、四十同四年正月日補文章生、

字平昇花雪降

〔桂藥記〕

○柳原家記錄 九十九所收

一文章院初參之時、有吉書事

裏云、平惟長

康保四正月日、補文章生、字平昇、題花雪降、

康保四年正月是月

八六五

八六四



康保四年二月四日 八日 十日 十一日

二月 庚申 朔

四日、癸亥、祈年祭、

〔日本紀略〕村上 天 二月四日、癸亥、祈年祭、

八日、丁卯、釋奠、村上 天 二月八日、丁卯、釋奠、

十日、己巳、伊賀守源超及ビ若狹守季明、姓關 御國忌物ノ麤惡ニ依リテ、過狀

ヲ進ム、  
〔西宮記〕十二 臨時已事 凶事 前田家本 康保四二十、伊賀守超、若狹守季

明進過狀、依御國忌、  
十一日、庚午、小除日、

〔魚魯愚鈔〕受四 領舉事 以秋田城介任出羽守例

康保四年二月十一日、即召大臣、前任物六人之中、以散位大江澄景爲右衛門  
權佐、散位實忠爲出羽守、實忠前任出羽介、爲秋田城司、造立數十字官舍、委任上

〔公卿補任〕安和元年 非參議從三位藤兼家、四十、(康保四年) 二月五兼春宮亮、

秋田城介  
實忠官舍  
造立不功  
實納及

御惱心四  
月ニ及

十七日、丙子、東宮御惱、藤原兼家ノ任官、便宜合斂ス、

〔日本紀略〕村上 天 二月十七日、丙子、皇太子始惱心、非尋常、自今日及四月、

〔扶桑略記〕村上 天 二月、東宮有病、

〔山槐記〕治承二年正月七日、壬寅、 略、中

彗星年々、略、中

康保三年十一月廿五日、見南方、アリ、其條

四年自三月至四月、東宮有病、(二カ)

○東宮御惱ニ依リテ、加持僧ヲ召スコト、三月一日ノ條ニ見ユ、

十八日、丁丑、園、韓神祭、

〔日本紀略〕村上 天 二月十八日、丁丑、園、韓神祭、

十九日、戊寅、御願ニ依リ、阿闍梨念覺ヲシテ、延曆寺大日院ニ、延命法ヲ修  
セシム、

〔延喜天曆御記抄〕百三十一所 柳原家記錄 天供事付星

康保四年二月十九日、於大日院、令阿闍梨然覺修延命法、限百个日了之、依去

康保四年二月十七日 十八日 十九日



康保元年  
ノ御願

康保四年二月二十日 二十一日 二十二日 二十六日

八六八

康保元年願也、遣藏人右衛門少尉源通理仰事旨、

二十日、卯、巳檢非違使廳政、

〔政事要略〕六十一 檢非違使雜事上 一 私案、略、○中 近代之例、至于祭月、諸祭以前

不行廳政、未得其意、尋古勘問日記、神事之月、神事以前、有行政例、○中 康保四

年二月廿日右政、

二十一日、辰、庚內宴、

〔河海抄〕十二 藤裏葉 小左記云、康保四年二月廿一日、內宴、(實題) 左丞相著赤白異袍、

二十二日、巳、辛仁王會ニ依リテ、大祓ヲ行フ、

〔日本紀略〕村上天皇 二月廿二日、辛巳、大祓、依明日仁王會也、

二十六日、酉、乙花宴、

〔日本紀略〕村上天皇 二月廿六日、乙酉、於清涼殿有櫻花宴、題云、日照花添色、奏

絃歌、

〔北山抄〕三 花宴事 拾遺雜抄上 清涼殿東又庇北第二間立御倚子、置物御机等、

供御硯、三 略、○中 康保四年、第 吳竹坤角設樂所座、御殿砌下給侍臣絃歌者座、略、○中 康保

四年、東砌下鋪樂所座、時剋出御、○中 次仰侍臣召文人、略、○中 天德二年、康保四

侍臣同候其座云々、

殿上獻詩  
者、王卿文人  
賜等、祿ヲ

南上、康保四年、雖南上著、獻序畢、次將取文臺宮、置御前、講詩儀如常儀例、略、○中 康保

自仙華門參入、○中略、 康保四年三月、賜親王御下襲、大臣下襲表袴、納言白樹袴、參議白樹、四位、五

位白絹、六位赤絹、文人等綿、須退出給之、而乍在本座給、違例云々、

是月、有勞ノ諸司、每年臨時ノ闕國ニ、遷任セラレンコトヲ請フ、

〔本朝文粹〕六 奏狀中 請被特蒙天恩、以有勞、格勤諸司、遷任遠江、駿河等

平兼盛

諸司連署  
ノ舉狀

領司ハ受  
領ナシ、期ナシ、

一國ヲ拜  
スル者ハ拜  
金帛藏ニハ  
滿チ酒肉  
案ニ堆ム

右去康保四年二月、村上先帝聽政之日、有勞諸司連署申請舉狀、備謹檢案内、  
有勞諸司遷任受領之例、其來尙矣、而頃年之間、拜除如忘、蹤跡已絕、徒積日月  
之光陰、久漏雨露之渥澤、藏人、外記、官吏、式部、民部、大藏丞、織部正、檢非違使等、  
皆有年限、拜任受領、爰諸司積歲、採用無期、身逐年而老、家隨日而貧、偏憑奉公  
之節、空忘顧私之慮、妻子漸倦裁縫之苦、僮僕長厭奔走之役、方今或弱冠承恩、  
或壯年蒙賞、父子同竝專城之任、兄弟俱居分憂之職、拜一國者、其樂有餘、金帛  
滿藏、酒肉堆案、況轉任數國乎、老諸司者、其愁無盡、荆棘生庭、煙火絕爐、況窮苦  
多年乎、見樂以增悲、對榮以歎悴、若以功勞蒙賞、則諸司皆成其功、若依職役承

康保四年二月是月

八六九



橋忠信  
加賀守  
阿波守  
任波守  
ニラニ

康保四年二月是月

八七〇

恩則誰人亦超其勤、功勞是一、採擇何殊、今對鷹揚之人、各慙鵠退之身、大陽之耀、不照何處、厚載之德、不長何物、幸逢堯年、當受比屋之封、久趨舜日、獨抱積薪之歎、臣等聞鷄參闕、行步鎮踏春冰之薄、待月歸家、鬢髮皆梳秋霜之嚴、老者少遺日、弱者有餘年、懸車不幾、看形骸而揮淚、携杖在近、計年曆以銷魂、望請特蒙天恩、以有勞諸司、被遷任每年臨時之闕國、各盡奉公之節者、依彼舉狀、縫殿頭橋朝臣忠信、任加賀守、掃部頭橋朝臣高臣、任阿波守、已畢、○中略

天元二年七月二十二日

從五位上行大監物平朝臣兼盛等在連署

三月小庚寅朔

一日、庚寅東宮御惱ニ依リ、加持僧ヲ召ス、

〔西宮記〕

御燈

御記云、○中略康保四年三月一日、春宮大夫藤原朝臣（兼家）兼家

御燈齋中  
ノ佛事ヲ  
忌マズ

朝臣申、東宮所煩猶不平復、御燈齋不見忌僧之由、況依御卜不被奉、若召加持僧如何、仰依請之、抄ヲ以テ行事秘

〔北山抄〕

三月

年中要抄上 三日御燈事、廢務件齋間、不可必忌僧

〔江次第〕

三月

三日御燈事 御燈間行佛事、康保四年三月一日、春宮召御持僧、御記、不可必忌僧云々

○東宮御惱ノコト、二月十七日ノ條ニ見ユ、

二日、辛卯東宮御惱ニ依リ、度者ヲ賜フ、

〔日本紀略〕

村上天皇

三月二日、辛卯、○中略今日勅賜皇太子度者卅人、依御惱甚

度者三十  
人、御惱甚  
重シ

重也、

〔日本紀略〕

冷泉院

康保四年三月日、賜度者三十人、救御惱、

○東宮御惱ニ依リ、長勇ヲシテ、凝花舍ニ修法セシムルコト、本月四日ノ條ニ見ユ、

康保四年三月一日 二日

八七一



康保四年三月二日

入道式部卿一品敦實親王、覺薨ゼラル、

〔日本紀略〕村上天皇 三月二日、辛卯、入道式部卿敦實親王薨、年十五

六日、乙未、奏入道式部卿親王薨由、又喪料緋五十匹、調布二百段、商布五百段、

〔小右記〕寬仁二年六月十六日、丁未、中(藤原實信)大納言書云、一日源大納言書云、中(敦實)

〔大鏡裏書〕一條左大臣雅信公 式部卿敦實親王三男、中康保四年三月

二日服解、父、同五月復任、

〔大鏡裏書〕一品式部卿敦實親王事 宇多天皇皇子、母皇太后宮胤子、贈太

政大臣、高藤公女、寬平五年癸丑誕生、同七年七月十五日、庚午、爲親王、延喜七年

十一月十三日、元服、任式部卿、(脱アラシ)敍一品、天慶二年十一月七日聽輦車、天曆四年

二月□日出家、法名覺眞、康保四年三月二日薨、年十五

〔西宮記〕臨時入延喜七年十一月廿二日御記云、敦實親王加元服參入、殊

敍三品、給之

〔亭子院歌合〕延喜十三年三月十三日、中右のとう女七宮、かたのみこ御

せうごのかむつけの八宮、(敦實親王)

御年七十  
薨奏ヲ賜  
喪料ヲ賜  
御骨ヲ粉  
ト爲シテ  
散ズ  
男雅信服  
解

御官歴

三品

上野大守

中務卿

二品

式部卿

大歌所別  
當

一品

式部卿上  
辭表ヲ上  
ラル

〔北白川宮御所藏文書〕

天台座主少僧都法眼和尚位圓珍

右可贈法印大和尚位、號智證大師、略ス、文

延長五年十二月廿七日

三品行中務卿敦實親王宣略下

〔主上御元服上壽作法抄〕外記々 承平七年正月五日、戊午、中但二品敦

實親王從陣座昇殿、

〔日本紀略〕朱雀院天慶二年三月廿七日、己巳、式部卿敦實親王供養仁和寺

內改造八角堂、

〔政事要略〕二十六年中行事二十六事 吏部記略中 天慶三年十一月十

九日、中右大將陳云、大歌別當式部卿及僕也、(重明親王)

〔西宮記〕臨時一同五年十二月宣旨、一品式部敦實親王如舊云々、

〔貞信公記抄〕天慶八年十二月六日、中中使敦敏將來式部卿辭職表、

〔日本紀略〕村上天皇天曆元年正月廿三日、己酉、天皇於綾綺殿行內宴、式部卿

敦實親王、中候殿上、

〔本朝皇胤紹運錄〕

康保四年三月二日



康保四年三月二日

宇多天皇

敦實親王 一品、式部卿、號入條宮、又號仁和寺宮、天曆四二三出家、法名覺眞、康保三二二薨、母同天皇、内大臣藤原公胤女、

源雅信 從一位、左大臣、平女、車、牛車、贈正一位、皇太子傅、號一條左大臣、又鷹司、

源重信 左大臣、正五位、皇太子傅、號六條左大臣、長、

源寬信 正四位、左京大夫、

僧寬朝 號廣澤僧正、又遍照寺、法務、大僧正、東寺長者、

僧雅慶 法務、大僧正、東寺長者、勸修寺別當、東大寺別當、號勸修寺僧正、

〔尊卑分脈〕 源氏多

宇多天皇

敦實親王 一品、式部卿、天曆四二三出家、法名覺眞、號仁和寺宮、康保三二二薨、母同醍醐天皇、后宮藤原子太

雅信 母左大臣時平公女、

重信 母同雅信公、

寬信 左京大夫、正四位、一男云々、

雅慶 或爲敦實親王子云々、

〔寬朝〕 母、事蹟略ス、

〔石清水祠堂系圖〕 貞延 第三檢校、朱雀院御宇、○中

或記云、敦實親王御子云々、

〔西宮記〕 七月十六日相撲式 同記云、延長五年七月卅日、○中 余因中務卿女喪、  
(史部十部) (實明親王敦實親王)

著輕服云々、

〔僧綱補任〕 貞元二年 小僧都寬朝 式部卿敦實親王二郎、母時平大臣女、

臣女、

〔公卿補任〕 天德四年 參議從四位上源重信、三十 延喜廿二年壬午生、入道

式部卿敦實親王四男、母同雅信、

〔尊卑分脈〕 藤原氏 北家

時平

女子 敦實親王室、雅信、重信等母、

〔扶桑略記〕 醍醐三十三 延喜七年十一月廿二日、乙未、○中 敦實親王、○中

親王、寬平第八皇子、

〔大鏡〕 下 侯爵德川義親氏所藏 六條式部卿の宮と申しは、延喜の御門の

康保四年三月二日



康保四年三月二日

ひとつ腹の御兄弟におはします、

〔類聚〕諱名訓抄 親王 敦實<sub>宇多</sub>子

〔性空上人傳記遺續集〕一上人俗姓事略中

又其母源氏者何源氏哉、源氏有五流、略中敦實親王末、號敦實源氏、宇多帝子

〔拾要集〕敦實親王者、宏才博覽人也、

〔石清水八幡宮記錄〕十山城八幡宮寺緣事抄 一同外殿御躰事

延喜十四年八月廿二日、式部卿敦實親王造立三所木像御正躰奉安置之、保延燒失之、白檀云々、

〔石清水八幡宮并極樂寺緣起之事〕利爲氏所藏 石清水八幡宮御事

敦實親王造立御躰木造、白檀云々、

俗躰 法躰 女躰二躰

中尊僧形、頭載日輪、手持持鬘給云々、行幸時、此物有之歟、

供精進、魚味御供、但精進御供御箸立之、延喜十四年八月廿三日造進之、是内大臣通親記在、可一定

〔古事談〕五神社佛寺 敦實親王奉造立大菩薩御影二體、一體僧形、奉備御供、

被致祈請之後、被奉拜見之處、僧形ノ御供ニ被立御箸云々、依之以法體爲御

木造四體

中尊僧形ノ儀相

僧俗二形ヲ造リテ何テ神慮ヲ給フ

外殿ニ安置ス田園ヲ寄進セラル

體、奉安置外殿、多被寄進田園云々、件御體保延炎上之時、不奉取出燒失云々、件御體、權俗別當兼貞不堪不審、供御供之次奉禮、白檀、僧形、首戴月輪、御手令持鬘給云々、兼貞此事之故不運而止云々、

〔石清水文書〕四田中家文書 抑外殿御座等者、略中

元者奉居巖形御輿、入道式部卿 敦實親王御造立之御躰、乎、被鎮座彼御輿内歟、而保延炎上之後、件御輿不奉見之由、御殿司等申云々、略中

一品式部卿宮者、宇多法皇御子、醍醐天皇御弟、寬平五年御誕生、延木十四年八十四歟外殿御躰御造立、被備精進、魚味御供之處、精進御供、爾被下御箸、天曆四年二月御出家、覺眞、法名、康保四年二月薨、御年七十

〔東大寺八幡驗記〕炎上等事 中御門右大臣宗忠記云、略中文治四年五月

廿四日、己丑、略中石清水火事之時、敦實親王奉造立法躰、阿彌陀三尊云々、燒失給、其後有議定、不被改造之、

〔高雄山神護寺緣起〕又保延六年正月廿三日、男山炎上之時、延喜帝の勅に

より、宇多天皇第九の皇子敦實親王造らせ給ひし僧俗二體の外殿の御神體失させ給ふ、略下

康保四年三月二日

阿彌陀三尊形ナリトノ説  
醍醐天皇ノ勅ニ依リテ造ラセラル



石清水八幡宮十ヶ度  
幡宮十ヶ度  
創度幡石  
メ大宮水  
給節十ヶ  
フヲケ八

康保四年三月二日

〔石清水八幡宮記録〕

○六山城寺縁事抄 佛神事次第

八七八

宮寺

定明年諸節行事所司等事

正月略○中

元節御節行事略○中

二月略○中

上卯御神樂略○中

三月大節

三日御節行事略○中

四月略○中

大節 八日御節行事略○中

五月大節

五日御節行事略○中

六月大節

晦日御祓御節行事略○中

七月大節

七日御節行事略○中

八月略○中

大節 十五日導師儲略○中

九月大節

九月御節行事略○中

十一月大節

上卯御神樂略○中

寬喜三年十月日略○中

頭付大節ハ在公祭土カ伴十ヶ度大節ハ敦實親王、寬平年中、造外殿御聖躰、所

始行御節也、

土御門内府道通一説延壽十四年造御躰、十ヶ度始神事云々、

〔石清水八幡宮記録〕

○十山城八幡宮寺縁事抄 一二期御神樂始

寬平年月日敦實親王始行、勅節十ヶ度内也、

〔勸修寺文書〕

○二十山城

勸修寺古事

康和四年八月三日記云、左大辨筑前

康保四年三月二日

八七九



勸修寺入  
講なげら  
リヲ申請  
セラル

御出家後  
仁和寺に  
住ミ給フニ

仁和寺に  
於ケル御  
詠

御弟子

諸藝ニ長  
ジ給フ

和琴ヲ醒  
和天皇給  
受ケテ

源博雅勅  
命ニ依リ  
テ親王ノ  
説ヲ受ク

康保四年三月二日

前吏敦憲語云、御八講者、是三條右大臣御遠忌也、中自藏人所遣瓜、是式部卿敦實王申請朱雀院也、御八講多々見實料三十駄分遣云々、彼親王大臣甥也、

八八〇

〔勸修寺縁起〕

朝成、朝忠など申御子たち、中八月ついたちよりおなしき四日、丞相の御忌日にいたるまで、中一乘八座の講肆をはしめ行はる、式部卿敦實の親王と申は、寛平法皇の御子におはします、高藤の大臣には外孫なり、三條右大臣の御むこにてそおはしける、この御子の申をこなひ給けるとかや、八月四日かほとは、殿上の儀式を勸修寺にうつされて、なけりなど申事までも、此寺にわたされて、いまに至までたえず、

〔大鏡〕

下太政大臣道長所藏 一條殿六條殿の左大臣殿達は、六條の一品式部卿の宮の御子ともにおはしますさふ、中父宮は出家せさせ給て、仁和寺におはしましたし、

〔後撰和歌集〕

十五京極のみやす所、尼になりて、戒うけむとて、仁和寺にわたりて侍ければ、  
あつみのみこ  
ひとりのみなかめてとしをふるさとのあれたるさまをいかにみるらん

〔僧綱補任〕

乾永祿元年德川昭武氏本 法橋上人位觀教 故入道式部卿親王覺眞入室弟子、中覺眞者是敦實親王法名也、

〔尊卑分脈〕

源氏系圖略 敦實親王 郢曲、笛、比巴、和琴、箏、後撰一作者、歌、上字ハ後撰ノ鞠、馬、鷹、音樂長也、和琴自此親王傳于世、

〔和琴血脈〕

醍醐天皇

權中納言敦忠

從三位博雅

敦實親王

左大臣雅信

從三位博雅

絲管要抄

式部卿敦實親王

一條左大臣雅信公

〔河海抄〕

十三若菜上 心にまかせて、たゝかきあはせたるすかゝきに、

康保四年三月二日

八八一



康保四年三月二日

夫和琴者、略中延喜聖主、極絃管之妙、其中和琴尤長、更傳賜左兵衛佐藤原

敦忠、○此間恐ラカハ博雅、敦忠ニ就キテ傳習、即習得其名、朝臣薨後、天慶

聖主勅命云、詣式部卿敦實親王許可習、兼又左大臣雅信卿、爲彼親王家督、

深傳此曲、尉略中已上右兵衛尉高注進公家、

〔體源抄〕之十一 親王管絃沙汰之事

敦實親王 笛

〔北山抄〕內三 拾遺雜抄上 同十年、○中春鶯囀曲欲吹、笛聲誤吹序二聲、式

部卿答之、

〔今昔物語〕本二十四 源博雅朝臣行會坂官許語第廿三

略○上其ノ時ニ會坂ノ關ニ、一人ノ盲庵ヲ造テ住ケリ、名ヲハ蟬丸ト云ケ

ル、此レハ敦實ト申ケル式部卿ノ宮ノ雜色ナムテ有ケル、其ノ宮ハ宇多法皇

ノ御子ニテ、管絃ノ道ニ極ルケ人也、年來琵琶ヲ彈給ヲケル常ニ聞テ、蟬丸琵琶

ヲナ微妙ニ彈ク、○中博雅流泉、啄木ノ手ヲ聞カム云フ、盲故宮ハ此ナム

彈給トテ、件ノ手ヲ博雅ニ令傳ルケ

〔鄧曲相承次第〕藏○伏見宮御所

式部卿敦實親王宇多第八御子、源家音曲元祖也、師匠未詳、若藤原千魚朝臣弟子興

後深草院勅書云、源家音曲、自敦實親王至信有、相續所藝異他云々、

孝道治國抄云、催馬樂と和琴とは、自敦實親王世ニ傳云々、又見絲管要抄、

後鳥羽院被下信成卿勅書云、自雅信公以來相續之由、雖被載之、自敦實

親王始之條勿論也、

神樂事 神樂雖爲諸神製作、傳于世以多自然、鷹爲根元、其後次第上下翫之、彼親王

殊携此道、子孫雅信公、時中卿以下皆名譽堪能也、

左大臣雅信略○事蹟

〔文机談〕三 又朗詠の曲は、をこり儒家よりいつへし、○中いまの源家と

號せらるゝは、宇多院の御子に、敦實親王と申し親王、音曲をこのませ給け

るによりて、風俗、催馬樂、かやうの曲ともおほく傳させ給、これらより源家

のはしめごは申也、○中そらにはたほへ侍ぬ人もありぬへければとて、系

圖をしるし侍也、

源家 宇多院——一品式部卿敦實親王——大納言時中略○下

〔源氏催馬樂師傳相承〕記○伏見宮御所

康保四年三月二日

笛ニ長ジ  
給フ

蟬丸ハ親  
ノ雜色

流泉啄木  
ヲ彈ジ給

源家音曲  
ノ祖

催馬樂トハ  
和琴トハ

神樂ノ道  
ニ携リ給

子孫名譽  
ノ堪能者



催馬樂ヲ  
王雅信  
ニ傳ヘラ

源家催馬  
樂ヲ作ラ

郢曲ノ御  
師ハ藤原  
千魚ナリ

胡蝶樂ノ  
舞ヲ作ラ

淨藏ノ唄  
ヲ賞シ給

源博雅ト  
意趣ヲ構

康保四年三月二日

八八四

敦實親王 寛平御子、一品式部卿

源雅信 敦實王子、左大臣

〔參語集〕 内外之雜談口傳等 一源家、藤家催馬樂事

〔本朝皇胤紹運錄〕 家○前田 敦實親王 郢曲、催馬樂、千魚朝臣弟子云々、

〔體源抄〕 十二 胡蝶樂 破、急

延喜六年八月、太上天皇覽童相撲之時、○中 敦實親王作舞、○延喜八年是

〔淨藏法師傳〕 仁和寺櫻花會、法師爲唄師勤之間、中納言藤原朝成子時、頭云、

唄音大誤云々、法師奇思且千、法會事畢、亭子第八親王召法師、感唄曲殊有勅、

祿、又勸坏酒之次、法師啓親王、甚稱有興、即召中納言、令尋其誤之處、納言理伏、

啓云、唄曲事は臣等之狂言也云々、

〔續教訓抄〕 十一上 名物等物語 第二 基通云ク、故三宮ノ仰ラレシハ、式部

卿宮、博雅三位意趣アルニヨリテ、門ヲ切ニ、勇從等數十人仰ヲ奉テ、ヒソカ

ニ行向フ、三位略中大筆築ヲ吹スマシテ居ケリ、勇從等コレヲキクニ、不覺

ノ涙下ケリ、各ナミタヲナカシテ、コレヲキル事アタハス、歸參シニケリ、宮

待テトヒ給ケレハ、具ニ此由ヲ申ス、宮此ヲキカセ給テ、同ク涙ヲナカシテ、

意趣ヲ思止玉ニケリ、

〔郢曲相承次第〕 藏○伏見宮御所 權中納言信有 蹴鞠、敦實親王以來至此

卿相續

〔九條殿記〕 部類 年中行事 菊花宴 天曆五年十月五日菊花宴記、

略○上 雅信朝臣、略中 搦笏左掖開宣命、先年大納言元方卿雨儀之日、奉仕宣命

御歌什

名譽ノ御

有職故實

信王教雅實

給フニ教ヘ

康保四年三月二日

八八五

親王十八人

一品式部卿入道親王 敦實、同院

〔勅撰作者部類〕 庶自帝之部 敦實親王 天一品式部卿、宇多帝八年御子、

康保四年三月二日

後撰集

八八五



藤原仁善  
子ノ許ニ  
通ヒ給フ

康保四年三月二日

八八六

〔大和物語〕

上

おなし右のおほいどの(仁善子)みやすどころ(藤原)みかとおはしま  
さすなりて後、式部卿宮なんすみたてまつり給ひけるを、いかゝ有けむ、お  
はしまさゝりけるころ、齋宮(柔子内親王)の御もとより、御ふみたてまつりたまへりけ  
るに、みやすどころ、宮のおはしまさぬ事なときこえ給ふて、おくに、  
しら山に降にし雪の跡たえて今はこしちの人もかよはず  
となん有ける、

〔後撰和歌集〕

冬入歌

式部卿あつみのみこ、しのひてかよふ所侍けるを、の  
ちくたえくになり侍ければ、いもうこの前齋宮(柔子内親王)のみこのもごよ  
り、このころはいかにそとありければ、その返事になむ、

女

しら山に雪ふりぬればあこたえて今はこしちに人もかよはず

〔兼輔集〕

家歌本

ふるき式部卿宮、いまの式部卿宮にて物語し給ひける  
に、哀れなることも見けむかし、

君かなも我も昔の宮ながら變れる物は年にそ有ける

親王ト敦  
慶親王

親王ト源  
仲宣

〔後撰和歌集〕

春歌下

源仲宣朝臣

いまどあるは入道のなり、

散事のうきも忘れて哀てふことを櫻にやとしつるかな

〔江談抄〕

二 雜事

平中納言時望相一條左大臣雅信事

故右大辨時範談云、一條左大臣年少之時、故平中納言時望到其父式部卿敦  
實親王、召出雅信、令時望相之、時望相云、必至從一位左大臣歟、下官子孫若有  
申觸事者、可有必舉用之也、數剋感歎云々、

〔富家語談〕

○應保元年  
柳原家記録百三十九所收

仰云、式部卿敦實親王劔ト云物

持タリ、故白川院召シカハ、令進畢、其劔定此鳥羽院ニ有歟、○中件劔雷鳴時  
ハ自抜云々、然而未然、又故殿令恐給、不可脱抜歟之由被仰、而依不審、余(忠實)以或者令  
拔是之處、小峯方寄テ、以金坂上寶劔トソキク也、

〔古事談〕

一 王道后宮

延喜野行幸之時、被入腰輿之御劔ノ石付落失云々、○  
略件劔敦實親王傳給テ、身モハナタス令持給タリケリ、雷鳴ノ時ハ自脱云  
々、

御所持ノ  
劔

平時望子  
雅信ヲ相  
シテ王子  
ヲ相シメ  
フセシメ  
給

康保四年三月二日

八八七



康保四年三月二日

〔石清水文書〕

太政官牒 田中家文書

太政官牒石清水八幡宮護國寺

宮寺所所庄園參拾肆箇處事

一應如舊領掌庄貳拾壹箇處事

河內國淡箇處

略

○中

壹處 字甲斐伏見庄 錦部郡

甲斐庄

葦谷山肆拾捌町玖段

甲斐宅壹處

今宅壹處

東宅壹處

御敷野栗林肆町

佐太山地拾貳町

佐美蘇河會山地伍拾捌町

新居地山壹町參段

栗原里貳坪捌段

上原山地貳段

岡本地林壹町伍段

郡殿栗林貳町

辻山地肆段

豐國殿地伍段

大栗栖地壹町

大井山地貳町捌段 佰貳拾肆步

高田地伍段

宮道里拾壹坪貳段 拾貳坪貳段參佰步 貳拾伍坪肆段 貳拾陸

坪壹段 貳拾柒坪參段 參拾肆坪壹町 社里拾肆坪肆段貳佰肆

拾步 貳拾貳坪參段貳佰捌拾貳步 狹田里貳坪壹段佰捌拾步

捌坪參段 參拾坪貳段 參拾壹坪貳段 里外捌坪壹段佰步 正

里柒坪貳段 久保田里玖坪壹町 拾伍拾陸貳拾貳坪內參段 字

中島陸段 堅田里外壹町參段

拾貳條天野里玖坪拾陸坪捌段 葦谷西四至內字向栗栖地貳段

川會山西邊地壹町伍段 字東平野北島參段 同西平野島參段

同南少平野島陸段 同東平野南島參段 文有行島參段 字窪宅

地參段 門田里肆段

布志見庄

槻本里貳拾伍坪陸拾步 川原里拾壹坪伍段 山守里參坪參佰捌

拾步 中嶋里外貳拾肆坪貳段 正里貳坪貳段 猪垣里參拾坪壹

布志見莊

康保四年三月二日

八八九

八八八